
呪わればっち

みゆ貴茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われぼっち

【NZコード】

N5205D

【作者名】

みゆ貴茂

【あらすじ】

呪い、それは人のもつ負の力の具現であり、心の闇。他人の呪いを肩代わりする特殊な職業、呪われ屋の不破大智。これは世界に蔓延る呪いと、日夜戦い続ける少年の物語である。

ヒロトカゲー 繼れた風

行き過ぎた科学を人は“魔術”と呼んでいた

業深き“魔術”を“呪い”と忌み嫌つた

“進化の指針”

彼のものからの

墮落故にと

知る由もなく

ただただ怯えボクらは“呪い”を拒み続けている

たつた一つの外典“呪われぼっち”を除いて

1

「あぼさや べいろうしゃのう

草木も眠る丑三つ時。

「まかばだら まに はんじま

煌々と炎が灯る祭壇の上でいささか怪しげな呪文を唱えているのは不破大智。そう、スパ、靈能高校生であるこのオレだ。

今、オレは目の前に陰気臭く……じゃない神妙な顔で座禅を組むおつせん もとい、お密さまをお救いするためにお仕事の真っ

2

最中。

「 はらばりたや うん」

真言（呪文みたいの）を唱えつつ金剛杵という手持ちの法具を大げさに振り回す。べつにそれほど必要なことでもないがハツタリとパフオ マンスはどこの業界でもオマンマの糧、相手に真実みを植え込むには大切なことなのだ。

で、結局オレが何をやっているのかと云うと呪咀移しの儀式を行なつてたりする。

みんなは呪われ屋というのを知つてゐるだろつか？

呪いというのは云うまでもなく、負の願いで人に災厄を齎らそうとする術のことだが、近年この呪いを使うアンポンタンが急増している。

そこで登場するのがオレたち呪われ屋である。呪いのはずばりイメ ジ通りとても粘着性の強いもので、短期間では祓うことが難しい。そこでオレたちみたいなやくざな靈能者がその呪いを肩代わりするという。コ タイプな職種が隙間産業として活躍し始めたのだ。

「はあああ のうまく さんまんだ ばざらだん かん 我、
金剛に帰依す。一切の禍を滅さんと、衆生の業を括り給え！」

気合い一発張り上げる声。だからといって炎がでかくなったり、雷が出たり何の効果もないのが虚しいところ。

「おん」

呪咀移しは完了した。オレは依頼人に深々とお辞儀する。

「あなたの呪いは確かに引き受けました。もう安心してください」
オレの言葉を耳に依頼人は脱力したようにため息を吐く。きっとここに来るまで散々な目にあつたんだろう。さつさとオレンとここに来りや 酷い目に合わなくて済んだのに。

みんなっ！呪いかな？つて思つたら、即この不破大智の呪われ屋に来てね

安い、早い、安全、お客さまは仏様（なんか縁起悪いのは何故？）

がモット の不破大智をよろしく！！

2

「ふわあああ

朝日を浴びてオレは思いつきり背伸びをする。気持ちのいい晴れで良かった。

今日は一日ぶりに学校へ行ける。いつたん呪いを引き受けたら祓うまで本堂から出ることが出来ない。なんせ呪いは不運が連續みたいなものから病や死に至るものまで様々である。そんな状態で神聖な境内から出てしまつたら、幾らオレが空前絶後のスパ霊能力者といつても身が持たないからだ。

筆もつてゐる間、高校は『護法天童』が代わりに行つてくれる。護法天童とは靈能者が使役する使い魔のことで、ぶつちゃけて云えばパンの「ピロボットみたいなのと思つてくれればいい。

「おはようさん、大智

幼なじみで同級生の上条隆盛かみじょうとうかもりが迎えにやつてきた。

この男、特に運動をやつてるわけでもないのに長身で無駄に屈強なガタイをしている。オレはかなり小柄なので一緒にいるとよく兄弟に間違えられるのがとつても癪だ。

「おつ今日は本物だな」

「やつぱ隆盛にはばれるな」

オレがそう云つと隆盛はゲラゲラ笑い始める。

「はつはつはつ 分かるもなにもお前の式神ドジすぎるし。道を歩けば転け捲るわ、まだ女子があるので体操服に着替え始めて変態扱いされるわ、先生のことお父さんとか間違つて云つわ、ホントいい天然だぜあの式神」

「式じやねえ護法天童だつ！」

「式神の方がなんかカツコいいじやん。そんなことよつさつと行こうぜ」

「…………」

くそつー護法の奴め。後でたつぱり扱いてやる。

「それはそうと大智。最近、仕事しすぎじゃなねえ? 今月に入つて二回目だろ? 体もたねえぞ無茶してたら」

「うみゅ…… そつは思つんだがちょっと事情があつて」

深刻に云うオレに眉を顰める隆盛。

「事情?」

「ああ」

「なんだよ事情つて」

「金がいるんだ」

「はあ?」

「来月欲しいゲ ムソフトが五本も出るんだよ。それに冬物の服買いたいし、駅前でシルバ アクセの激カツクイイの見付けて。それからDVD BOXで」

「お前、煩惱断ち切る明王の僧侶のくせに物欲ありすぎ……」

呆れる隆盛。

そりや自分でも、ちとさもしいかなとか思うけどでもしようがないじゃん。だつて世の中素敵なものが溢れているんだもん。ああ、あれも欲しい、これも欲しい、全部欲しい。そのためには金が要る。ちょっとくらい無理したつてオレは負けない。なぜならそこに素敵なお褒美が待つているから。

オレが夢の世界にトリップしていると、隆盛が急に立ち止まつてオレは奴の背中にぶつかってしまう。

「おい、痛えだろ? 止まんな」

「なあ大智、あの娘……」

隆盛は険しい顔で前を歩いていた少女を指差した。見かけない娘だ。でもオレたちと同じ高校の制服を来ている。

「あの娘、なんか憑いてねえ?」

「あつほんとだ」

その少女には何か不穏な気が取り憑いているように感じる。

隆盛は一般庶民のくせに何故か昔から靈感が強い。その感覺は才よりも鋭いようで、よく先に何かに気が付くことが多い。ちょっとむかつく。

「何が憑いてんだろ？なんにしてもあの娘に目標を絞つてる感じだから呪いの類だよな」

よく靈とかを見たりする人がいるがあれはかなり特殊なことで、實際は視覚や触角とは違つたそれこそ第六番目の別の感覺でそれを感じ取ることが普通である。オレたちもそうで、その感覺は他のものより不確かなため靈などを感知するときはどうしても手探りな感じになつてしまつ。

「生靈？……いや、狐とかか？」

と隆盛。

「狐憑き？それじゃあもしかして、先祖代々呪われてるつてやつとか？」

「うーん……どうだろ？なんか微妙に違和感が 分かりにきいなあ」

靈感の鋭い隆盛にしてはこさか頼りない返事である。まあ、なんにしてもあの娘が危ないに変わりない。金にはなりそうにないが、りっぱな正義感もあるんですよオレは。情けは人のためならず。きっといつか金になるつて意味だ。微妙に違うか？

「おーい」

オレは少女に駆け寄り声を掛けた。彼女がこっちを振り向く。おつ、なかなかの美人。大きめで猫みたいな目が魅力的である。

「オレ、この近所の不動尊寺つてとこのもんなんだけど」「不動尊寺？」

少し冷たい印象の声で彼女は訊いてくる。こうこう反応する人ちよつと苦手なんだよなあオレ。

「あつ……えと、その 云いにくいんだけど、あんたなんか呪われてるみたいなんだけど 」

「知っています」

「へっ？」

少女は鋭い眼光でオレを見下ろしながら云つた。

「これは生れ付きなんです。それがなんですか？」

「そのなんだつたら祓います？今なら格安でいい

「ほつといてくださいっ！」

行き成り怒鳴りだす彼女。美人なだけにすんげえ迫力。

「これは私の問題です。お坊さんだかなんだか知らないけど関わないでください」

そう云うと走つて行つてしまつた。なんなんだといったい？人が親切で云つてやつたつていうのに。

茫然としていると後から来た隆盛がオレの肩をポンと叩いた。

「まつこんなこともあるわな」

「ううん……なあ隆盛。悪いけどあの娘のこと調べてくれない

「今日の昼飯おごつてくれるなら」

「うつ」

隆盛はホントにお前人間か？と疑いたくなるほどの大食漢である。金が……。オレはため息混じりに承諾した。

「うつ」

一時間目と一時間目の間の休み時間、隆盛が少女について調べたことを報告する。相変わらず仕事が速い。

「鬼灯風音。夏休み開けの始業式の日、双子の姉、なきよ凪紗と共に一年F組に転校してたみたいだ」

一個下の転校生なら見かけなかつたのも無理はない。しかし、双子の姉がいるとは。

「その凪紗つて娘も呪われてんのかな？」

「そこまではまだ」

チャ～チャラララララ

隆盛の携帯電話が派手な音を立てて鳴り始めた。着メロが『ボレ

口』つて趣味悪い。

「お前に仕事の依頼のメ ルだぜ」

「ん?」

隆盛から携帯を受け取る。

呪われ屋の客は大概インタ ネットのホ ムペ ジと電子メ ルで承つているのだが、いかんせんオレはパソコンが使えないし携帯も持つてない。だから隆盛にそういうことを全て任してしたりする。当然バイト代は払つてんよ。（因に先日の客は駆け込みだったので隆盛を経由せず仕事をしていた）

「なになに『呪いと思われる症状で息子が死にそう』か

オレはメ ルに載つていた電話番号に掛けてみる。

「もしもし、不動尊寺の不破大智ですが」

『あつよかつた。お願ひです。勇太が、息子が死にそうなんです。

助けてください』

母親と思われる依頼人が今にも泣きそうな声で懇願してくる。オレは落ち着くよに云つてから訊ねる。

「症状とかを詳しくお聞かせください」

『数週間前から息子の体に急に発疹が出来て高熱が出て』

「あの、医者には見せましたか？」

呪いが流行つていいせいが、たまにただの病気なのに呪いと決め付け医者にも見せずに駆け込んでくる奴がいたりする。

『見せました。お医者さんに点滴とかしてもらつたんですが全然だめで、それでそちらさまに見てもうつよに云われて』

『分かりましたすぐ伺います』

携帯を切つて隆盛に返す。

「仕事？」

「ああ。すぐ行かにやならん」

オレは鞄から一枚の護符を取出す。

「うーと……のうまく さんまんだ ばざらだん かん」

真言を唱えて護符を放るとあらびっくり、この世の者とは思えな

いほどの美少年が現われる。オレそつくりの。これが護法天童である。

「今から仕事だ。後は頼む」

オレがそう云うと護法はにっこり笑つて応える。

「大変でちゅね。頑張つてくだぢやいね」

どうにかならんか言葉遣い。隆盛め、腹抱えて笑うんじやねえ。

「オレも付いていつていい?」

笑いすぎで涙を溜めながら隆盛が訊いてくる。

「なんで?」

「だつて昼飯おじつてもらわな」

「……まついいけど、授業どうすんだ?」

「じゃん、これなんだ?」

そう云つて隆盛は制服の内ポケットから一枚の護符を取り出した。

「あつそれ、仏壇の中に隠しておいたやつじゃん。なくしたと思つ

てたら、てめえが盗つてやがつたのか」

「ははは、メンゴメンゴ。大日如来の札なんて超レアと思つて」

「そんな理由で盗むな。それ国宝級だぞ」

「まあまあ、えーと確か…… おん ばざら だと ばん」

護符が隆盛そつくりの護法天童に変わる。何故に大日如来の真言
なんぞ知つとるんだ隆盛。てか、靈感が鋭いだけじゃなくてこんな
芸当までできるとは。

隆盛は自身の護法天童のできに満足気に頷く。

「任せたよん。式神くん」

「かしこまりました。ご主人さま」

「うわ、丁寧にお辞儀してるし。己れ隆盛。一般人のくせして。オ

レの護法との格差は実力の違いかよ!?

「どつちたんでちゅか、ご主人たま? プルプル震えてまちゅよ」

「つむせえ。出来損ないつ!」

殴る蹴る。思わず護法にハツ当つしちやつた!!

「つねうでつけえ屋敷」

タクシ ですっと飛んで依頼人の家までやってきたオレたち。当然必要経費だよん。

依頼人、御陰邸はそこら辺にある家の三・四件分ぐらいあるお屋敷だった。

「ふつふつふ、こりや期待できそうだ」

「ああ、いけないんだ。ぼつたくる気だ」

嬉々として攻めてくる隆盛。てめえのアルバイト代がどこから出

ると思つとるんだこの男。

「オレは貧乏人からはそれなりに、金持ちからはお心遣いを頂いてるんだ」

「それをぼつたくりつて云うんじゃねえの」

「分かつてないっ！ オレは尊敬するブラック ヤック先生よりしくだな」

「あのう」

オレたちが云い争つていると背後から声を掛けられる。後ろを振り替えると、

「うおっ山姥つ！？」

そうとしか思えない老婆がそこに。驚くオレの頭を隆盛が小突き、「失礼だぞ大智。よく見ろ、ただの砂かけ婆あじやないか」真顔で云う。

「この家の使用人のキクにござりますが」

着物姿の自称使用人は困った様子で自己紹介してきた。どう見ても妖怪婆あみたいだ。

「それじゃあ、あなたが呪われている方ですか？」

「いえ……私ではなくて坊っちゃんです」

いや分かつてるけど、あんたが背負った負のオ ラを前に聞かずにはいられなかつた。

「奥様がお待ちです。どうぞこちらへ」

使用者キクはオレたちを屋敷内に案内し始めた。彼女の後ろを歩きながら隆盛がオレに耳を近付け訊いてくる。

「なあ大智。死妖人じようじんなんて妖怪いたっけ？」

「……さあ

「

「この男、本気か！？まあ気持ち分からんでもないけど。

「いらっしゃでござります」

長い廊下を行き部屋に通されるオレたち。中には小学一年生くらいの男の子がベッドの上で苦しそうに寝ている。その横で若い女性が心配そうに付き添っていた。たぶん彼女がその子の母親なのだろう。

「ようこそおいでくださいました。法師さま」

彼女はそう云つて頭を下げる。助け船が来たとばかりに寄つてくる。隆盛に。

「あの、オレは助手みたいなもんでこっちが法師さま（？）だよ」

隆盛はオレの頭をポンポン叩いて云つ。それを見た御陰婦人の顔に不安の色が。どうせオレはガキっぽいよ。

心で腐れながらも、大人なオレは笑顔で云つ。

「靈能力は年齢を重ねればどうこういうものではありますん」

本当は少し関係あるが、でもオレは特別だし。強いし、偉いし、めげるな自分！！

「こう見えてもキャリアを積んだプロです。安心してお任せください

「そうですか」

それでも半信半疑といった婦人。オレは無視して呪いを掛けられた男の子に近寄る。確か勇太とか言つてたな。もともとは色が白くて可愛い子なのだろう。しかし、今は顔の半分に異状な発疹ができていて、その中心が黒ずんできて見るも無残な姿になつている。

「ヘルペス？」

「いや」

オレの問いに首を横に振る隆盛。

「恐らくアレルギーだろう。俺も靈力過敏症だから分かる。この子、もともと凄い靈的防御力が高いらしい。でも呪いそのものが強すぎて」

「そうか、自身の靈的防御力がかえって体に悪影響を及ぼしている。どちらにしろ、この呪い　かなりの靈能力者によるものだな」

オレは隆盛の言葉に続けた。
しかし、これはやっかいだ。強い靈能力者の呪いを祓うのは普通の何倍も力が要る。

「どうする？」

隆盛に訊かれ、オレはそこはかとなく悟った笑みを浮かべて云う。

「来るのは拒まず、去るものは追うがオレの心情だ」

「追わずだろ？」

うつ間違つた。

「まつ、まあようするに救えるものは救いましょうことだよ」

「ふうん」

ふう誤魔化せた。

オレは婦人に向き直り云う。

「お母さん。呪いを祓う手順を説明します」

「はあ」

インフォ　ムドなんたら。オレはできるだけ仕事内容を依頼人に説明するようにしている。

「この呪いは強力なものなので、一・三日私自身の靈力を整える必要があります。それまでお子さんは境内に結界を張つて安静にして頂きます。これは呪いの進行の抑制と緩和のための処置です」

オレの説明に婦人は一つ一つ丁寧に頷く。

「その後、自分の準備が整いしだいお子さんの呪いを移します。お布施は必要経費別途で全額成功報酬とし五〇万円頂きます。以上のことを納得して頂いたら、契約書にサインをしてください」

オレは鞄から契約書を取り出す。婦人は契約書に目を通すこともなく、すぐさまそれにサインした。息子のことで動転してるとはい

えあまり感心したことではない。よい子のみんなは契約を交わすさい、きちんと書類を隅々まで確認してね。

「では、自分たちは先に行つて結界の準備をしてきますので三十分後くらいにそこに書いてある住所まで勇太くんをお連れください。では後程」

オレは契約書を受け取りペリペリつと力 ボン用紙が裏に付いた上の一枚を剥いで控えの方を婦人に渡す。そして隆盛と部屋を後にした。

「なあ、大智ホントに受け取るつもりかよ」

屋敷を出たところで隆盛がオレに非難めいた口調で訊いてくる。

「ああ」

「でもさあ、昨日まで呪い祓つてたんだろ？ 体力持つのかよ」

「見た目よりは丈夫なんですよ。華奢で悪かったな」

自分が巨漢だからつていい気になるなよ、こん畜生。

「いや、そういうこと云つてるんじゃなくてだな……。お前、靈力整えるつて断食するんだろ？」

「うむ」

靈力の行使の方法は人によつてまちまちである。

オレの場合、靈力の質がかなり変わつていて、他者或いは周囲の靈力を飲み込み、自身の細胞の異常活性を発生させるという性質を持つていて。これを放つておくと際限なく周囲の靈力を飲み込こんで、自身の細胞が活性し続けて下手すれば栄養失調に陥るつてしまふので普段は不動尊の靈力を使って自身の靈力を封印していたりする。そして問題はここからで呪咀移しは不動尊の靈力にほぼ依存しているので、今回のように強い呪いを移すためには断食してオレ自身の靈力を減らし、封印に使つてている不動尊の靈力を術の行使に回せるようにする必要があるのだ。

「ただでさえお祓いした後は体力落ちるのに断食なんかしたらきちいだろ？」

「まあ、そうだけど。でも仕事しなきゃ食つていけねえし

「よく考えるよ。オレは大智のためを思つて云つてるんだ。今はまだ大丈夫でもその内疲れが溜まつて病気になるぞ。だいたい、大智が月一でいらんもん大量に買物するのつてその反動だろ？が。こんなこと続けてたらいつかストレスで死んじまつぞ」

「うみゅ」

オレはわざとらしく口を尖らしてみせた。

「だつて、もう契約しちやつたし」

上目遣いに見上げるオレに、隆盛はため息を吐く。

「今度からは気をつける」

「はい！？」

隆盛つてばオレが拗ねてみせると絶対折れるんだよな。扱いやすい。

「ご主人ちゃん」

夜。本堂で一人座禅を組んでいたオレのところに護法がやつてきた。今の姿は自分と同じだと紛らわしいので別人に変えてある。「男の子、結界が効いてきたみちやいで安定してきたでちゅ」

「そうか。母親は？」

「疲れてたみちやいだつたから、帰つてもらつたでちゅ」

「わかつた。お前は引き続き勇太くんを見張つてろ」

「はい」

元気よく返事をすると護法は勇太を寝かせて『る』祭壇のあるお堂に向かつた。

「…………」

しばらくは目を瞑り座禅を組んでいたが、どうにも集中することができない。

「くそつ隆盛がよけいなこと云つから」

オレは頭を搔いて立ち上がる。

隆盛が云つことはもつともだ。このところ仕事のしすぎで体重が

減つてきている。体力も。でもなあ……ついつい、仕事入れちゃうんだよ。なんか仕事してないと落ち着かないって云うか。ちょっとばかしヒロコンプレックスの氣があるのかもしれん。

「……尊……」

オレは本堂に置いてある不動尊の像に目をやつた。

本尊は大柄な人くらいの大きさで、嘘か真かヒヒイロカネとかいう伝説の金属で出来てているらしい。炎に包まれ厳しい顔で石の上に座している。幼い頃から見慣れている猛々しいその姿は、オレにとっては暖かさで包み込んでくれるような父性の象徴であった。

「不動尊。オレは間違っているか」

思わず像に語りかけてしまう。しかし、すぐにそんなことをしている自分が滑稽に思えた。

「バカか、オレは」

魔と戦い続ける宿命を背負つた不動尊に訊ねることじゃない。なんにしても、自分にできることはやつておきたいんだよな、結局のところ。

3

ぐりゅ めりゅ めりゅ

オレの腹の虫が授業中の教室に響き渡る。護法に勇太を見張らせ、オレが学校に来たのだが、失敗した。逆にすりやよかつた。

「さつきからうるさいぞ。不破大智くん」

数学教師の渡部わたべりか子が黒板からオレの机にやつてくる。

こいつ、なにかとオレに構つてくるんだよな。しかもなぜかいつもボディコンとか着てるし。胸がでかいことをそんなに自慢したいのかよ。教師が高校生挑発してどうする。色魔でも憑いてんじゃねえの？

「キミは何匹お腹に虫を飼つてゐるのかな？ウン？」

オレの机に腰掛け教鞭でペシペシオレの頭を叩く渡部。みんな笑

つてるし。勘弁してくれ。

キ ンコ ンカ ンコ ン

そこで終業時間を報せる鐘が鳴つた。

「よかつたわね。これでお待ちかねの『ご飯だぞ。起立、礼』渡部はオレのでこを人差し指で突つ突くと腰をくねらせ教室から出ていった。

はあ、やつと解放された。でも全然お待ちかねじやないんだよ。寧ろ地獄。

「大智、大丈夫か？」

隆盛が訊いてくる。

「オレ、食堂行くけどお前どうする？」

「行くよ。行きます。行つてお前が美味しそうに食べてる姿を指囲えて見てますよ」だ

自暴自棄。人間腹減ると悪人になる。普段と変わらないとか云わないようだ。

「いっただきま す」

手を合わせ、隆盛は定食四人前に手を着け始める。くそ、今日も変わらず嬉しそうな顔で食べやがつて。

「で? どうだ、様子は」

隆盛はくちやくちや咀嚼しながら喋る。もつ慣れてるが品がないことこの上ない。

「なにが？」

「勇太だよ。その後どんな感じだ」

「ああ。なんか安定してきたよ。あの子、もともと呪いに対して抵抗力が強かつたわけだし。本尊の靈力とも相性が良いみたいだから結界の中に入れて点滴うつてたら結構治ってきたんだよ。だから今夜にでも呪咀移しの儀式に入ろうかと思つ」

「そうか」

頷く隆盛。

とにかく腹減つた。水飲んで誤魔化す。オレは席を立つて冷水機

のところまでいく。

「ねえ、聞いた? F組の鬼灯さん」

「ええ、また怪我したんでしょ」

水を飲んでいると不意に隣でくつちやべっていた女の子たちの会話が耳に入つてくる。

「今日は調理室で包丁が滑つて手を怪我したんですって」

「その話し詳しく聞かせてくれないか?」

オレは何かに憑かれていた鬼灯風音のことが気になつて、女の子たちの話に割つていつた。彼女たち曰く、風音は転校してきてから毎日のようになつに怪我や不運な目にあつてこりらしき。わざわざ怪我をし、今は保健室に行つているということだ。

「サンキュー」

オレは女の子たちに礼を述べて、保健室に向かうことにする。それを見た隆盛が後ろから声を掛けてくる。

「おいつどこ行くんだよ」

「.....」

オレは答えず無視してさつさと進む。隆盛は仕方ないと、食べ掛けの飯を無理やり口の中に詰め込んでオレの後を追つてきた。皿とか、かたづけろよ。

「のあ、どくうこくんどよ」

隆盛が口をむぐむぐいわせながら訊いてくる。

「保健室」

「なんで?」

「昨日の鬼灯風音。なんかやばそつだ

「.....」

走つて保健室まで行くオレたち。途中、渡部に出来くわす。

「きみたち、廊下は走っちゃダメ。いやあーんな、お位置をしちゃうぞー?」

「うひひせえ。緊急なんじや色ボケ。てめえの存在自体が違反なくせして、人に教えを説くな。

オレたちは某美少女戦士のポーズなんぞをとつているバカ女をスピードアップでやり過ごす。

「はは、りか子ちゃんつてばいつもノリノリだな」

「廊下を走ることがタブで、あいつの存在を許している校則をオレは認めない」

そんなこんなで保健室まで辿り着くオレたち。

「失礼します」

戸を開けて中に入ると腕に包帯を巻いた風音がいた。用事でもしているのか保健医の姿はない。その代わりに、風音の横に彼女そつくりな少女が付き添つていて、その娘が双子の姉、凧紗なのだろう。

「あなたは」

風音がオレに気付く。それを見て凧紗が彼女に訊ねる。

「知ってる人？」

「近所のお坊さんらしいです、お姉さま」

「えつお坊さん？」

そう云つてオレと隆盛を交互に見る凧紗。

「僧はオレだけだ。こいつは助手

「へえ、ちつちやいのにすういのね」

平気で人を傷つける奴だ。気にして云いやがる。

「体のでかさは関係ないだろ？ が。だいたいオレはお前らより先輩だぞ。敬え」

「えつ？ マジ。ぜんぜん見えない」

この女ア。妹は突然キレるし、姉は無礼者とは最悪な双子だ。

「もういい。それよりそこの妹に憑いてるもんを祓いたいんだが」

オレが撫然と云つと凧紗が嬉しそうにはしゃぐ。

「えつ！ 祓ってくれんの！ ？ よかつたじやん風音…！」

「しかし、お姉さま……」

躊躇う風音の背中を凧紗はポンポン叩く。

「いい機会じゃん。ね？」

風音は俯き加減で考えてから、

「わかりました。よろしくお願ひします」

「オレに頭を下げた。おお、そつやつてしおりしきれると可憐い

じゃん。

「じゃあ今日はもう早退して、オレンんとこに来い。ぱっぽと祓つちや

」

「おい、大智。ちょっとこいつち来い」

行き成り隆盛がオレの手を強引に引いて保健室の外へ連れ出す。

「なつなんだよ。隆盛」

「祓うつて、お前今日勇太の呪咀移しすんだろうが」

叱り付けるように云つてくる隆盛。

あつそうだつた。もしかしてダブルブッキング? いついや。

「あの程度のやつなら本堂でお経でも詠めばなんとなるだらうじ。その後、勇太くんの呪咀移しをしても全然問題なしだよ。ノ プロ

ブレム、ハハ」

オレは笑つてみせるが、隆盛の顔は依然険しいままだ。

「確かにそれほど靈力が強いつて感じはないけどな、でも正体がぼやけてはつきりしないんだ。いつ豹変するかわからねえぞ」

「心配ないつて」

「おいっ! ?」

隆盛がオレのカツタ シヤツの襟首を掴んできた。

「ちよつ! ? やめらつ! !」

隆盛から「こんなことされたことは今まで一度もなかつた。

ちよつ恐つ! !

オレは少し狼狽える。

「お前、昨日オレが云つたこと憶えてんだらうな」

「体が大丈夫かつてことか?」

「それだけじゃねえ。オレは大智のことを思つて云つてゐつて」と
だつ! ?」

「わかつてゐる…… でも

「でも、やるのか?」

「…………」

オレは隆盛から田を逸らして頷いた。隆盛は掴んだ襟を放し、「ちつ！勝手にしろ。なにがあつてもしらんからな」そう云つてどつかへ行く。オレは隆盛の背中に向かつて、「あつ勝手にするよつ！勝手にすりやいいんだろつ！オレが決めて、自分でするんだ。文句はねえだろつバカ力」

思いつきり幼稚な悪態を吐いた。隆盛は振り返らずすじんじん歩いて去つていった。オレは壁に向き直り、

「バカ」

壁相手に頭突きした。

バカはオレだつて分かつてゐる。分かつてゐるけど、自分にできることをやらぬで何かが起きてしまつのは耐えられないんだ。父さんのときみたいに。

オレはちょっとだけ自分を痛めつけてから保健室に戻る。

「あの、なんか喧嘩してなかつた？」

凧紗が訊いてくる。オレは自嘲氣味に笑つてから云つ。「いや、なんでもねえ。風音は責任持つて祓つてみせる」「あつ、ええお願ひ」

オレの顔が変だつたのか、凧紗は真顔になつて頷いた。

「風音。行こう」

オレは風音と一人で校舎を後にした。

「あの」

寺までの道。数分ほど歩いたといひでそれまで黙つていた風音が声を掛けてくる。

「先輩は不動尊寺の方なんですね」

「ああ」

「じゃあ、黎須法師さまの？」

「えつ、親父のこと知つてゐるのか？」

思いがけないところで父さんの名を耳にしオレは驚きで歩を止めた。風音も足を止めオレの方を向く。

「昔、お世話になつたことがあるんです。そういうえば面影がありますね」

「世話つて……」

「はい……」ことです

「それどうこいつことだつー?」

焦りが口から飛び出でてくる。思わず風音に詰問してしまった。そんなオレとは対照的に風音は飽くまで冷静な態度を崩さず答える。

「私たち姉妹は幼い頃に両親と死別し、施設で育ちました。一人とも生まれ持つて呪われていたのでいつも何かしら不幸に付き纏わっていたんです。そんなだからみんなから後ろ指差されるような生活が続いていて

あつ関係ない話ですね」

「いや」

生れ付き呪われて育つた人間の苦しみがどれほどのもののかオレには想像できない。きっと生き地獄と云うに相應しい人生を彼女たちは歩んできたのではないだろうか。

「私たちが小学六年生のころ、学校の帰り道に私が転んでしまって靴が片方脱げてどぶ川に落ちたんです。私は泣いてしまって、姉がそれを取つてくると云つてくれました。しかし、川堀の梯子を下りている途中で姉は足を滑らせ落ちそうになつたんです。そこにたまたま通り掛かつた黎須さまがとっさに手を取つてくださり間一髪のところで姉は助かりました。その後、黎須さまは姉を救いあげると自身の着物が汚れるのも構わず私の靴をどぶ川から取つてきてくださつたんです。そして礼を述べた私たちに『もし困つたこととかお願いごととかがあるならうちのお寺にくるといい』と仰つてくださいました。黎須さまには私たちが呪われていたことが分かつてらしたんですね。それでも私たちが不安を感じないようにそんな云い方をしてくださつたんです。私たちがお寺を訪ねると黎須さまはいろんな楽しい話を聞かせてくれて、最後に呪い封じの術を教えてく

れました」

「呪い封じ?」

呪い封じとはその名の通り、呪いの効力を一時的に封じる方法である。オレが呪咀移しで他人の呪いを引き受けた後とかに、自分が酷い目に遭わぬよう呪いを祓いきるまでの間行なう術であり、その場凌ぎの防御手段のようなものだ。

「本当に呪い封じを? 被つたんじゃなくて」

「はあたぶん。私たちは靈力が強いので呪い封じができるといったようなことを仰つてたと思います。梵字を手の平に指で描いて飲み込む方法です。それを毎日行なうようにと云われて実行したら、その日から嘘のように厭なことが減つたんです」

「今までそれで凌げてたということか。凧紗もそれで防いでいるんだな?」

「はい。でも、数カ月前くらいから私だけ急に効果がなくなつたみたいで。また、昔みたいに不幸なことが度重なつて。前の学校もそんな感じで転校せざるえなくなつたんです」

「じゃあ、なんですぐにうちに来なかつたんだよ」

オレの問いに風音は俯いた。そして、蚊の鳴くような消え入る声で答える。

「私たちが呪い封じを教えて頂いて少し後に黎須さまが亡くなられてしまつたのを知つてたから恐かつたんです。もしかしたら私たちの身代わりになつたのかもつて思つて」

「…………」

だから昨日、オレが声をかけたときもそれで取り乱してしまったのか。オレが息子だと気付き、どう対応していいか混乱して。

「親父が死んだこととあんたたちのことは関係ない。気にしないでくれ」

風音は俯いたまま頷く。もしかしたら泣いているのかもしれない。長い髪に隠れてうかがい知ることが出来ない。

「あと、悪いけど祓うのを数日延期させてくれないか? そして、そ

れまで境内の中で過ごしてほしい。そしたらいくらか緩和されると思つし」

父さんはオレと違つて呪咀移しをしたことはなかつた。でも、それは移すまでもなく短時間で呪いを祓うだけの法力を持つていたからだ。それなのにこの姉妹には一時凌ぎである呪い封じの方法を教えただけで祓わなかつた。となるとなにかしらの理由が存在するはずだ。それを見極めなければ危険かもしれない。

「明日からは土日で休みだけど、その後も少し学校休んでもらうことになるかも」

「お任せします」

風音がお辞儀する。アスファルトにぼたりと雲が零れた。

その日の夜。

「これより呪咀移しの儀式に入ります」

オレは祭壇で寝ている勇太と付き添つている御陰婦人にお辞儀する。

今、オレは両手に金剛杵という法具を持っている。これはそれぞれ不動尊が持つ降魔の利剣と羈策（縄）に見立てているのだ。そして清めたその身に法衣を纏う。自分の体型に合わせてわざわざ特注して買つたのに、全然似合つてないから頗る悲しい。

「お母さん。緊張せず、ただ息子さんの無事を願つていてください」「はい」

オレの言葉に真剣に頷く婦人。

「おん あぼぎや べろいしゃ のう まかぼだらまに」

儀式はつつがなく進む。

しかし、勇太は本当にすごい。こうしている間にも無意識のうちにどんどんと本尊の靈力を体内に取り込み自力で呪いを祓おうとしている。これを靈能力者の器とでもいうのだろうか。

「はあああ のうまく さんまんだ ばざらだん かん 我、

金剛に帰依す。一切の禍を滅さんと、衆生の業を括り給え！」
勇太に憑いた呪いを我が身に移すことに成功した。

「おん」

オレは立ち上がり勇太に近寄る。彼はまだ薬が効いて寝ているが、心なしか表情が楽になつたような気がする。

「これで息子さんの呪いは自分が引き受けました」

「本当ですかっ！？」

「ええ。後は医療を続けてしばらく安静にしていれば完治するでしょう」

「ありがとうございます」

婦人は泣きながら息子の手を握り締める。しかし、問題はまだあつた。嬉しそうな彼女に告げるのは酷だが致し方ない。

「ただ、勇太くんに呪いをかけたのは靈能力者です。だから、もしかすると呪咀移しを行なつたことがそいつにばれて、もう一度呪いをかけてくる可能性があります」

「そんなんっ！」

婦人の顔がショックで固まる。

「どうすれば？」

「落ち着いてください。これを勇太くんが寝ているベッドの傍に置いておいてください」

オレはそう言って懐から木でできた小さなヒトガタを婦人に手渡す。

「これは？」

「これは一種の身代わり人形です。一時的なものですが、勇太くんが呪われればそれを代わりに受けてカタカタと揺れ始めます。ですからそうなつたときすぐにここに来てください。呪いの儀式をしている最中であれば、それを行なつている相手の居場所が掴めると思いますので、自分が相手にやめるように交渉します。わかりましたか？」

「はっはい」

それでも婦人の顔は浮かないままだった。

当然だ。なんでこんな幼い子が呪われなければならないのだ。

婦人は礼を述べ勇太を連れて自宅へ帰つていつた。聞いたところによると彼女の夫は数年前亡くなられてしまつたらしい。いくら使用者がいるようなお屋敷の人間だとしても、子供を一人で育てていくのは大変なことだろうな。

さてと、オレはこれから本堂に籠もつて勇太から移した呪いを祓わなきやならない。呪い封じをしてあるから、勇太みたいな目には遭うことはないけど、これが一苦勞である。オレは本堂に入ると、扉の鍵を下ろして誰も出入りできないようにする。そして本尊の前で座禅を組みお経を詠む。お経 자체、真言のように力を發揮するものではないが精神を集中させるにはちょうどいいのだ。

「爾時大会 有一明王 是大明王 」

そういうや、隆盛あれから顔を見せてこなかつたな。ちょっとくらい様子見にきてくれりやいいのに薄情もん。

……いや、自分でも我慢だつてことはわかってるよ。でも今日はなんか心がぞわぞわするから隆盛に愚痴を聞いてほしい気分だつたんだ。

「 是經 皆大歡喜 信受奉行」

ああ、なんか集中できん。

暗闇の中に妙に響いて浮き出る自分の声がなんか無性に腹ただしく感じる。

「のうまく さんまんだ ばさらだん せんだま 」

久しぶりに父さんの話をきいたからだ。そのせいで思い出したくない、自分の馬鹿さ加減に触れてしまつてイライラしているんだ。もう一度とあんな思いをしたくないのに、いつまで付き纏つてオレを責めるんだ。

あれは四年前、

「 うんたらた かん まん」

オレが中一の秋のことだつた。

「おかえり大智」

学校から帰ってきたオレに父さんが挨拶してくる。父さんは境内の庭で落葉を箒で掃いていた。疲れていたオレは適当に頷いて部屋に上がった。部屋で寝ていると父さんがノックして入ってきた。

「大智。悪いが今日の夜、一件お祓いのお勤めがあるんだが手伝ってくれないか?」

「はあ?」

オレは露骨に嫌な表情をする。

「オレ、今日体育祭の練習でくたくたなんだよ。だいたい、ただでさえ朝の修業で眠いのに夜まで手伝えない」

「はは、そうだな。すまんかった、無理云つて」

父さんは自嘲気味に笑つて部屋を出でいった。

なんなんだよ、いつたい。

自分が父さんを傷つけたみたいな気がしていやな気持ちになる。

オレはそのころ父さんに反抗ばかりしていた。本当に疲れてもいたが、正直のところ父さんの仕事の手伝いなんかしたくなかったんだ。別に父さんのことが嫌いだからとかそんなんじゃない。オレは母親を物心が着く前に亡くしているので知らない。だから父さんは唯一の家族だし、叱られたことがないくらい優しい人だから嫌いになれるはずがない。ただ、そのころ自分の持つて生まれた靈能力に對して思うことがあって、そのイライラを昇華しきれず父さんにぶつけていたんだ。

小さいころは上手に自身の靈力を封印できずによく病気になつていた。最近は不動尊の靈力の制御になれてきてそんなことはなくなつたが、それだつて座禅組んだりお経詠んだり、毎日毎日いやになるような修業をしているからだ。なんでオレだけがこんな辛い思いをしなければならないのかと、どうしようもないことをぐだぐだ悩んでいた。

「……ん……」

いつのまにか寝ていた。目が覚めるともう夜中だった。

「みゅう」

眠気眼でしばらくぼうっとしていると急に胸がざわざわしてきて、いやな予感が膨れ上がってきた。

「父さんっ！？」

オレはベッドから跳ね起きて本堂へ向かった。

きやああああ

その途中で女の悲鳴が聞こえてきた。本堂じゃない。その奥の祭壇があるお堂からだ。

「ああああ

お堂の戸を開けると中にいた中年の女が苦しそうにのたうち回っていた。こいつがお祓いの相手なのだろう。

「うっ」

やがて女の動きが止まる。事切れたのだ。

「親父っ！」

恐怖に戦く間もなく、父さんが祭壇の上で倒れているのが目に入ってきた。オレは父さんに駆け寄る。

「親父、おいつ！しつかりしろ！…」

だめだ、もう死んでいる。嘘だつ！なんでだよ

オレは混乱する頭を搔き集まる。

お祓いに失敗した？そんな、まさか父さんに限って。

何が何だか分からなかつたオレは、そのときはただ父さんの死に顔を前に茫然となるしかなかつた。

翌日、警察が事情聴取でやつてきたがどんな対応をしたのか憶えていない。その後隆盛が来て何か云つてきていたが、オレがわめき散らして追い返す。

一人になる。何もしなかつた。

少し時間が経つて数人の僧がうちを訪ねてきた。父さんの葬儀を本山で行うといったようなことオレに告げてきた。オレにも本山に

来るように云つてきただがオレは断つた。子供が親の葬式に出ないと
いつのはおかしい話ではないかとか云われたが、この家を一步でも
出ると全てが終わつてしまつよつた気がして恐かつた。親父はたし
かに死んだ。でも何かが自分の中で違うような感じがしていた。結
局わめいて彼らを追い返した。

また、一人になる。オレはふらつく足で本堂に行き木の床の上に
寝転がる。本尊がそんなオレを厳しい顔で見下ろしている。

「……尊……」

オレは不動尊を目にした一番古い記憶を思い出した。

『どうしてこの人怒つてるの?』

まだ、三歳くらいの頃だつた。父さんに抱っこされたオレは不思
議を口に出す。父さんは愉快そうに笑つていた。

『はは、恐いか?』

『ううん。恐くないよ』

不思議と本当に恐くなかった。怒つてているように見えるけど、そ
れは自分ではないのだとなんとなく感じていたからだ。

『不動尊さまはね。みんなを悪いものから守つてくださつているん
だよ』

『ふおつ……ふおつ……そんさまえらいんだね』

不動尊が言えなかつたから尊だけを取つて呼んだ。

『みんなが幸せになれるように戦つてくれてるんだからね』

『かつくういんだね。そんさま』

父さんはそんなオレを愛しそうに見つめていた。

「……尊……」

オレは起き上がり本尊に縋る。

「……尊……どうして親父は死んだんだ!……どうして……答えて
くれよ、不動尊つ!?」

なんで答えてくれないんだ。みんなを守つてくれるんじやないの
か。どうして父さんを守つてくれなかつたんだ。

「……尊さま。お願ひだ

オレが見苦しいまでに取り乱していると本堂の入り口から人影が伸びてきた。

「…………！？」

オレは驚きのあまりに口を抑える。

「父…………さん」

そこには父さんが立っていた。昨日死んだはずの父さんが照れ臭そうに笑っている。

「私は黎須さまの最後の力で出来た護法天童です。靈力が足りず具現化するのに時間が掛かってしまいました」

「護法天童…………」

オレは全身から力が抜けてへたり込む。少しでも馬鹿な希望に期待していた自分がそこにいた。父さんの姿をした護法がオレに近付いてくる。

「大智さん、黎須さまからあなたに伝言を授かっています」

「…………」

「ごめな、大智。父さんが力不足だつたばっかりにこんなことになつて」

オレは戸惑いで首を横に振る。護法のそれはまるつきり父さんだ。「父さん、大智のことといっぱい愛してたけどなんかお前には辛いことばかり押しつけてた気がする。靈力のことだつて父さんのを受け継いでしまつたためだし、そのせいで辛い修業とかするはめになつてしまつたわけだし」

「父さん…………ねえ…………父さん」

語りかけても護法は一方的に話すだけだ。単なるビデオレコーダーなのだ、これは。

「だがな、もう大智は十分強くなつた。これからは自分が生きたいように生きろ！父さん死んじまつて直接は応援できないけど、不動尊さまと共にお前のこと見守つてるからな。がんばつて…………以上です」

護法から父さんの雰囲気が薄らいだ。そして護法自身もその姿が

薄らいでいく。

「もう時間です。靈力がないので消えます。これからはあなたが護符の『ご主人』さまです」

「いや、待つてもう少し」

懇願するオレに護法は首を横に振る。

「すみません」

「いやだ。父さん 父さん」

オレは薄らいでいく護法に縋る。

もう少し、もう少しだけそのままの姿でいてほしかつた。

「がんばって」

護法がオレを抱き締めた。父さんだ。父さんがまだ残っている。

「父さん、オレ」

護法は煙と消え、一枚の護符がヒラヒラと舞い、やがて冷たい床に落ちた。

それから数日間、オレは本堂で座禅を組み続けた。そして決意する。自分にできる」とを見付けよつ。そして納得するまでやり続けよつと。

4

いつのまにか座禅を組んだまま寝ていた。勇太から移した呪いはすでに祓い終えた。オレは本堂から出て自宅の居間に向かった。

「あつお疲れ様です」

「やつほ~」

風音と凧紗がそこで寛いでいた。

「今、何時?」

「11時よ。しかも、日曜の」

とうこつことは丸一日以上も籠もつてたのか。祓つてる最中は時間感覚が薄くなる。

「あなた、黎須さんの子供だったのね」

「風紗が云う。

「そう云えば似てるよね。体は全然ちつこいけど」

「つむせ。この女、本質的にいじめっ子か。

「あの、」飯食べますか？勝手にお台所使わせて頂き作つたんです

が

「あつうん」

風音が朝食の準備をしてくれる。三口ぶりの食事だ。昔は断食した後のご飯はいつも吐きそうになつてたが、今はなれてそんなことなくなつたのでまだ救いがある。

「いただきます」

焼き魚に味噌汁に卵焼き。どれも絶品だ。普段、護法に飯を作らしているがこいつが料理が下手でろくな食事じゃない。久しぶりに家でこんなすばらしいものを頂きました。

「」ちうそうさま。いや、本当に頂かたよ。ありがとうございます

「男の人の一人暮らしだとろくな食事を取つてらうしあらないと思つて、作つて正解でしたね」

「はは……」

仰るとおりですがなにげに慇懃無礼だな風音。まあ、明白に無礼な姉よりいいけど。

「そうだ、風紗も呪われていて呪い封じてるんだろ？」

「えつ？ええそうよ。でも、なんか私の方は別になんともないのよ」

風紗の云うとおり、彼女の方からはいやな気配は感じない。呪い封じが完璧に作用しているからか？

「ちょっと今から祓つてみるか。無駄かもしれないけど念のため」

風音に言つと彼女は黙つて頷いた。

「聞説是経 皆大歡喜 信受奉行」

祭壇の上でお経を詠んでみた。弱い靈なんかだつたらそれだけで逃げ出すこともあるのだが。でも風音の場合はそれが効かない。

「はああ　　のうまく　さんまんだ　ばざらだん　かん　我、
金剛に帰依す。一切の禍を滅さんと、衆生の業を括り給え！」

真言もダメ。呪咀移しすることもできない。

表層的な邪氣を括ることができても、呪いの根源的な依代の部分をピクリとも動かすことができないのだ。

やはりこの呪いは祓うことができないものなんだ。なぜだつ

「くつ」

「…………」

風音は田を開く。平静を装つてはいるが、その心中は落胆していることだらう。

「もう少し辛抱してくれ。オレが必ずなんとかしてみせる」

風音は田を開き微笑んだ。

「よろしくお願ひします」

信じてくれているんだ。オレのことを。絶対になんとかしてみせ る。

次の日。風音と凧紗を残して学校へ行く。凧紗は風音に付き添つ と云つてはいたが、単にずる休みしたかつただけに見えた。

「くそつ、隆盛の奴」

ホントはオレも護法に行かせるつもりだった。でも隆盛に相談に のつてほしかったのにあいつはいつまで経つても迎えにこない。携 帯には繋がらず、自宅に電話したらもう学校に行つたとおばさんか ら云われた。仕方ないから学校まで行つて会わなければならなくな つちまた。まだ怒つてるのかよ？

「不破大智くん！？」

「げつ」

下駄箱でハレンチ教師、渡部りか子と出くわす。なんてついてな い田だ。

「あれ、今日は上条くんと一緒にやないの？」これがホントのひとり ぼっちね。ぼっちって法師の意味なんですつて。知つてた

「はいはい」

オレは上履きを履きつつれなく返事をした。それを見て渡部はにっこりと微笑む。

「あつわかった。喧嘩したのね。寂しそう。うふつ先生が癒してあげようか? ベッドの上で」

「うわつキモつ! 冗談でも口にするな、悍ましい。」

「な~んてね、半分冗談で半分本気よ」

本気でもあるのか、この脳味噌フローロモン女。もはや危機感すら憶えるわ。

「先生も気持ち分かるわ。一人のときつて泣きたくなるもんね。月のない夜とか自分で自分を呪いたくなつちやうもの」

「はいはい、かつてに呪つとけ。オレが許可する ん? ん?」

「今云つたこともう一度云つてみる」

「えつ? 一人だと寂しいって」

「いや、その後」

「自分で自分を呪う?」

不思議そうに口に出す渡部。

自分で自分を呪う。そんなことあるのだろうか? もし、あるのだとしたら。

オレは教室まで駆け出す。

「廊下は走っちゃダメっていつてるの!」

渡部は年甲斐もなくほっぺたをふくらかしていた。もう、勘弁してくれ。

「おい、隆盛」

教室まで着くと、すでに席についていた隆盛に声をかける。

「隆盛。まだ怒つてるのか?」

オレが恐る恐る訊くと隆盛は立ち上がりつてにこり笑う。

「いいえ。この主人さまは大智さまのことを怒つてなどいませんよ」

これは護法天童か。じゃあ隆盛はどこに。

「おい、隆盛は?」

「この主人さまは今朝未明に、大智さまのこの自宅に向かわれました」

「なんだつて」

「全然気付かなかつた。

「くそつ」

オレの護法は家に置いてきてるし、欠席になるが仕方ない。オレは家に引き返す。

「よう、大智」

家に着いて居間にいると隆盛は風音と廻紗の三人で楽しそうに喋りなんかしてらつしゃつてたよ。陽気に挨拶してきやがつて。「お前、なに他人ん家に黙つて上がりこんでんだよ」

「いやあちよつち捜し物があつてな。あの日別れてすぐからここきて探し始めたけど、なかなか見つかんなくて。ほら、オレ靈力過敏症せいでの寺に長居できねえだろ?だから行つたり来たりで大変だつたぜ」

あの日つて、こいつオレン家のスペアキ でも持つてんのか?

「オレ、鍵渡してたか?」

「うんや、針金でちよちょいとして開けた」

「なんてことすんだてめえ!?」

「まあそつ怒りなさんな。オレと大智の仲じやん」

どこの世界にピッキングで家宅侵入して許される仲というのがあるのだろうか?てか、絶対鍵付け替えよ。ミステリとかにでてくるドイツ製のとかに。

「そこまでして捜し物つてなんだよ。また家のもんパクるつもりか?」

「ちやうちやう、中国犬なんちつて」

ギヤフン。くだらん洒落はやめなしゃれ。

「そのことで、話があるからお前の部屋に行こいがぜ」

「ああ」

オレたちは居間に風音たちを残して、部屋に向かつ。

「あのや、こないだのことなんだけど

「ああ、あれ?悪かつたな。頭に血が上つちまつて。すまんかった」

謝つてぐる隆盛。

「いや、べつに」

悪いのはオレなんだけど。なんかオレってば『『じめん』』が云えな
い人種なんだよな。

「あのさ、オレ」

「大智の気持ちは分かつてゐつもりだ」

隆盛は真剣な声で云つ。

「なんてのかなあ 唯一の我儕じやん。オレが大智のことを氣
遣うの……正直、大智からしてみれば齎陶しいかもしんねえけどさ」

「…………」

「他には何も望まねえからわ そんくらい許してほしいんだ」
なに云つてんだ、こいつ？

「なんかその云い分だと、オレがお前のことアッシ とか丁稚とか
散々利用してゐくせに本命が別にいる悪女みたいじやん」

「当たらずも遠からずつてやつじやねえ？」

「はあ？」

「だつてオレ、大智のこと誰よりも愛しいですし つか毎日
毎日、湧き出る欲望を抑えるのに必死みたいな？」

「…………」

「本気かこいつ ……前々から変態とは思つていたが……いや、
隆盛のことだ、またいつも質の悪い冗談ということも いや
待てよ、そういうえば父さんが生きてた頃、隆盛は異常なまでに父さ
んに慕情を示してはいたような。それはもう懐くなんてレベルじゃな
くて、恋する乙女ならぬ恋する奴隸体質？つまりなにか？父さんが
死んだからその息子であるオレに乗り換え
死んだからその息子であるオレに乗り換え

「やめやめ、あんま深く考えんど」

「え～オレとしてはさらりと流されても面白くないんですけど」

必死で頭を振り現実逃避をしようとするオレに隆盛が非難めいた
声を上げる。

だつてあんた、これ以上考へると人間不信になりそうですし。

「そつそれで、話つて？」

「ん、オレさつきまで黎須さんの書斎にいたんだよ」

「あそこだけ何故か携帯の電波が入らないんだつたな。

「呪いのこと調べようと思つて。それでこんな本見付けてさ、隆盛が一冊の本を渡してきた。『おもしろ靈力大百科』ださいタイトル。みゆみゆ社？あまり聞いたことがない出版社のものだな。ゲつ！著者のところに不和黎須とか書いてある。父さん本とか出してたのかよ。著者近影がやたらと修正してあるよう（ホスト風）に見えるのはオレの気のせいか？」

「読んでみるよ」

隆盛に促されオレは適当にペジを捲つて音読する。

「え」『それが異形のコンドリオゾムの齧らすものであり、靈には一種類の物質が存在する。それらが互いに作用しあい魂を構成、つまり魂がナノサイズの第三中枢』

「そこじゃなくて付箋のところ」

「ふむ。『靈力のガン化は先に述べた通りだが、これとは別の理由も存在する。それは魂の一部に疾患ができ本人の意志とは無関係に靈力を使用する現象』『なつ！？そんなことがあるのか？』

驚くオレに隆盛は頷く。

「風音ちゃんの呪いの正体を感じにくかつたのは、それが憑いたものではなく彼女自身の暴走した靈魂そのものだつたからだ」

「やはり自分で自分を呪つてたのか。依代の正体が自身の魂なら祓えるわけがない」

だから父さんは一時凌ぎでも効果を防げる呪い封じを一人に教えた。

しかし問題は、

「問題なのはなぜ風音だけ呪い封じが効かなくなつたかだ」

「単に呪いの力が彼女の使う術の防御力を上回つたんだと思うがその理由を」

チャ～チャララ～ラ～ラ～

隆盛の携帯が『威風堂々』を奏でる。メールではなくて電話らしい。趣味悪い。

「もしもし。ああ 分かった。すぐつれてきて。はい、いるよ。

大丈夫だから

簡潔に話を切り上げ携帯を切る隆盛。

「大智。御陰婦人からだ。お前が勇太に渡していたヒトガタが動きだしたつて」

「ちつ次から次に」

オレたちは慌てて部屋を出る。

「隆盛。祭壇の準備をしろ」

「わかつた」

隆盛は頷いて祭壇のお堂へ向かう。

「おいつ！？風音つ！凧紗つ！」

「はい」

オレが廊下から呼ぶと風音が居間から顔を出す。

「姉は出掛けましたけど」

「そうか。風音、悪いけど法衣に着替えるの手伝ってくれ

「ええ」

年ごろの娘に頼むのは気が引けるけどそんな悠長なこと云つてゐ暇はない。法衣を一人で着てると時間かかるのだ。不器用とか言うな。

「お願いしますっ！」

息を切らして御陰婦人が勇太の手を引いてやつてきた。

「さあ、祭壇に。勇太くん、この中にいたら安全だから心配ないぞ」「うん」

勇太は元気よく頷いて母親と結界の張つた祭壇に上がる。すでに発疹はほとんどなくなつていて元通りの愛らしい顔に戻つていた。

「…………」

あれつ？確かに勇太に向かって呪いが送られてるのに、その発信源がわかんないぞ。

「隆盛？」

オレは後ろにいた隆盛に助けを求める。しかし、彼も同様に首を傾げていて、

「うーん。なんでかな、わからんぞ。しゃあねえ大智、水鏡もつてこい。倉にあるから」

オレは云われたとおり水鏡を持つてきて隆盛に渡した。水鏡とは銀の盆などに水を注ぐと鏡の代わりになるという代物。神道系の儀式とかじやあ使うことがあるのかもしれないけど、オレはこんなもん始めて見たぞ。

「護符貸して。オレの学校行つてるから」

オレは隆盛に護法天童の護符を渡す。いつたいこんなもの、何に使うつもりだ？

隆盛は護符を水鏡に浮かべ真言を唱える。

「えーと　　のうまく　さんまんだ　ばざらだん　かん」
すると護符が消えて水鏡に何かが映り始めた。そうか！護符には靈力を物質化する力があるから、その効力を応用して水鏡をモニタにしたんだ。水は靈力を捕らえやすいし、こうすればぐんと分かりやすくなる。でもなんで隆盛こんな方法を知ってるんだよ？
「なつこれは　　」

オレは鏡に映った人物を見て驚愕する。

「風音？」

そこにはオレンちの居間で寛いでいる風音が映っていた。勇太と婦人に結界で待機するよつ言って、オレと隆盛は風音の下へ。

「どうかしたんですか？一人とも」

オレたちの様子が尋常ではなかつたんだろう。風音はぽかんと口を開けている。

「間違いない。やはり風音ちゃんから呪いが発せられているぞ」

「えつー？どうこうことですか？」

隆盛の指摘に怪訝に問う風音。

本当にどういうことだ？ 風音がなんの儀式もなしに勇太を呪えるとは思えない。でも確實に呪いは風音から送られている。

「靈魂が串刺しに」

隆盛がぼそりと呟く。

「え？」

「風音ちゃんの靈魂が同質の靈魂によつて串刺しになつていて、その一方が勇太に向かつていてるんだけど」

「まったく質の同じ靈魂に貫かれている？ しかも、その一方は勇太に伸びていもう一方」

「…………」

まさかっ！？

オレの頭に、ある最悪な仮説が浮上する。そして隆盛は唇を噛んでいた。彼もオレと同じことを思いついたようだつた。

「…………」

「…………」

とあるビルの廃墟の中、凧紗は棘をポイントにした逆五芒星の中に跪いて呪文を唱えていた。棘には小動物がそれぞれ串刺しにされている。しかもまだ生きている。生かしたまま激痛を与え続け、苦しみの念を呪いの糧とするために。

「魔力を……」

「もう、やめるんだ凧紗」

オレたち三人の出現に凧紗は固まつた。

「お姉さまどうしてこんなことを……」

そう、勇太を呪つていたのは凧紗だった。

「憎かつたから」

凧紗はゆつくりとした動作で立ち上がる。そして、風音に思いつきり罵声を浴びせた。

「あんたのことが憎かつたからよつ……」

「…………」

風音はわけ分からず口を抑えて首を振る。

「私たちは生れ付き呪われてた。ずっと不幸だつたけど一人で支えあつて生きてたわ。それなのにあんたのお父さんが呪い封じなんてもんで風音だけ救つて

「そんな、お姉さまだつて教えて頂いて」「効かなかつたのよ！」

「つ！？」

呪い封じが効かなかつた

「ずっと効いてる振りをしてたのよ。あんたは幸せそうにしてるし、私は厭なことがあつてもいつもあんたにばれないように隠していたわ。黎須さんに相談しようと思ったときにはすでに亡くなられていた。憎かつた。どうして風音は救われたのに私は救われないの？双子で、同じように呪われていて、ずっと同じだつたのに　　あの日からあんたは毎日毎日楽しそうにしていて

「ひつ　　う　　ごめ　　な……さい」

凧紗の辛辣な告白に風音は両手で顔を覆い隠し謝罪する。凧紗は興奮のあまり肩で息をしていた。

そして笑いだす。魂を震え上がらせているような声で。

「ふはははは。そしてついこないだ誰かがネットで教えてくれたのよ。呪いをどうにかする方法を。呪いをあんたに擦り付ければいいつてね」

魂の疾患による呪い。そしてこの呪いは恐らく自身の靈力を食らつて精神を蝕む代物。本来ならばまともな思考能力を失うほど強力な。それでもこの姉妹の靈力は疾患が食い尽くせないほど強く、残った靈力でなとか防御をしていた。だからこの姉妹は昔から少し意識が飛んで不注意の連續を起こすくらいですんでいたんだ。

そして父さんは呪い封じによつてその防御力を高める方法を教えた。

風音はそれで救われたが、なぜか凧紗には効果がなかつた。

『自分がどうして……』　　そのストレスが更に呪いの力

を加速させたのだろう。そして昨今、靈魂の疾患部位を伸ばし自分の靈力の代わりに風音の靈力を食らわせ、更に精神を蝕む呪いをも彼女に移す方法を凪紗は知った。双子で靈力の質がまったく同じだったからできた芸当だ。風音は自分と凪紗の二つの呪いを引き受けることになってしまったために呪い封じの防御力が負けてしまったのだ。

「自分の魂を伸ばして風音の魂を貫くには支柱となるべつの目標が必要だった」

「それが勇太くんか

勇太はただ一人のどばつちりを受け、靈力アレルギーであんなめに。

גַּתְּתָה עַל-

凧紗は血走った目をオレに向けてくる。

「誰でもよかつたのよ。ネットの掲示板にあの子を呪つてくれつて匿名で書いてあつたからあの子にしただけ。今度こそ、邪魔させないからっ……！」

「ナニヤアゼハ」

凧紗はオレの制止も聞かずに呪いの儀式を完成させる。

「やあやあやあやあやあ」

風音と凪紗、一人が同時に苦しみ始めた。

「アーティスト？」

オレの問いに戦慄を浮かべて隆盛が云つ。

「呪いが返された。勇太の奴、無意識に呪咀返しをやつちまつたんだ」

た

呪いには風音の体を貫いている正糸の魂を経由している。だから――人ともに影響が出てしまつたんだ。

ますい。呪咀返しは元の呪いの何倍もの力になる。このままじゃ一人とも死んじまう。

「おひまく　　」

「おいつー。自分に移すつもりじゃねえだらうな。そんなことしたら、お前がつ　　……」

「つるせえ隆盛。このままだまつて見てらわれるかよー。」

「さんまんだ　ばざらだん　かん　我、金剛に帰依す。一切の禍を滅さんと、衆生の業を括り給え！」

移せた。疾患部位、依代である魂そのものを移そうとしても無理だが、精神を蝕むという呪いの効果（邪氣）だけでも一時凌ぎに代行できた。

二人とも動搖はしてるが苦しみはなくなつたようだ。

「おん」

なつ！オレの力でも呪い封じしきれない。

「うがああああああ」

頭が割れるように痛い。思わず手にしていた金剛杵を床に落とした。それを拾おうとしゃがんだがそのまま崩れるように倒れてしまふ。針で刺されるような痛みと熱湯を浴びせられたような刺激が交互にやってきて　　。

「あああがあああ

「

意識が　　。

『風音、泣かないで。お姉ちゃんがついてるかい』

小さいときの風音？泣いてるのを誰かが慰めている。

『お姉ちゃんが守つてあげるから』

これは廻紗の記憶。

『お姉ちゃん。私、今日一度も厭なことがなかつたよ。やつぱり呪い封じが効いてるみたい。お姉ちゃんは？』

『うん。私も　　（気付かれてはいけない。折角、風音が笑つてるんだもん。水を注しちゃいけない）』

心の歪みが流れこんでくる。

『法師さまは亡くなつて　　もう誰にも相談できない』

閉じこめではいけない苦しみ。

『お姉ちゃん、手火傷したの?』

『つづん。霜焼けよ、きつと(私が我慢すればすむ)じだもの)』

軋んでいく。

『邱紗さんは協調性に欠けてるんじゃないですか?もう少し妹さんを見習つて』

『すいません(我慢しなきゃ)』

責任はやがて脅迫に、

『お姉さま、私料理の大会で優勝しました』『そう、よかつたわね(うれしいはずなのになんで私、こんなに惨めなの?)』

目的はその理由を見失つて、

『私、お姉さまと同じ高校に通いたいのでランク下げます』

『(あんたなんか、あんたなんかつ)』

愛情が憎しみに。

「おじつ、大智。しつかりしの」

「つー?」

隆盛の声にはつとなる。いつのまにかオレは隆盛に抱き起こされていた。

『まよい、じのままじや精神を蝕まれて死んでしまつ。』

『ぐううう じんぐうはあ……じんぐうづぶ』

『金剛杵かつーほらこれ』

隆盛が金剛杵を拾つてオレの手に握らす。

「はあああああああ

』

オレは極限の痛みを堪え、涙で鼻水がつまつた声を張り上げる。

『のうまくさらば たたきやていびやく サラバボッケいびやく
さらばた たらた せんだまかんしゃだ けん ぎやきややや
さらばびきんなん うん たらた かん まん 恐るべきこ
大忿怒うううぞんよおおわれを喰らいてええ……刃となせ

ジャキン

』

真言を全て唱え終えた瞬間、金剛杵の先から鋭い刃が飛び出でくる。他の靈力を食らうオレの靈力を不動尊の靈力で結晶化した降魔の利剣。オレはその刃を自分の心臓に突き立てた。

「大智つ！？ なにをやってんだ！！」

オレの行動を狂氣と感じたのか隆盛は戦戦兢兢となる。確かに端から見たら気が触れたとしか思えないが、これは魔を祓うための最終手段だ。この剣で傷ついても、食らった靈力でオレの靈力が細胞の異常活性を促し瞬時に傷が塞がる。死ぬほど痛いけど。どの道死にそうだし。だが痛みで氣絶してしまえばそれでお陀仏になつてしまつ。

「ひつ ひゅあ…… はつ はつはつのうまく…… さん…… はつ」

「くつ 苦しい。 だつ だめ 。

「がんばれっ！」

隆盛がオレの震えが止まらない剣を握る手に、上からそつと手を被せる。泣いている。それでもその目はずっとオレのことを見ている。戦つているオレを応援してくれている。まるで父さんみたいに。「さんまんだ ばざらだん かん 我があ力あ解きい放て」

ぎゅりゅ

剣を心臓から引き抜こうとするが力が入らない。それを察してか隆盛が力を貸してくれた。

引き抜いた瞬間、刃が金剛杵の中に引っ込む。それと同時に心臓の傷は塞がり、地獄の苦しみも一瞬のうちに引いていった。

「大智。 大丈夫か」

「ああ。 もう大丈夫」

「このやうつ。 無茶しやがつて」

隆盛がオレの頭を抱える。分厚い胸板がむさ苦しいが今だけは我慢しよつ。

「わつ私……」

凧紗が全身血塗れになつてているオレを見て顔面蒼白になつてている。

ここにきて初めて自分のしたことの大きさに気が付かされたかのようだつた。

「…………」

そんな凧紗に風音が近付く。

スパンツ

風音が思いつきり凧紗の頬を叩いた。それまで一度も妹からそんなことをされたことがなかったのだろう。凧紗はボロボロ涙を流しながら謝り始めた。

「ごめんなさい…………私、ごめんなさい」

「どうして…………どうして相談してくれなかつたんですか？」

風音も泣きながら姉に訴える。

「お互いたつ一人の家族じやないですか。一言相談してくれれば、私だつて…………」

「ごめん、風音」

姉妹は互いに抱き合いながら泣いた。オレは体を起こして寺に戻ろうとする。

「待つて」

凧紗が呼び止めてくる。

「私のしたことが許されることじやないと想つけど。でも、私

」

「許すか許さないかは風音や勇太が決めるんだ」

オレは少し突放したような云い方をした。疲れ果ててたのもあるけど。

「…………大智…………」

そんなオレの肩を隆盛が支えてくれる。

「風音の云つ通りだ。辛いなら、助けてほしいなら誰かを頼れ」「えつ？」

「うちにうちに寺に来い。不動尊は頼つてくるものは拒まん。境内で寝泊りしてたらさすがに呪いも封じれるだろ。幸い部屋は腐るほど余ってるしな」

「お姉さまっ！」

風音が喜びの声を上げる。凪紗は頭を垂らして咳く。

「ありがとう」

感謝の言葉はいつ聞いても気持ちがいい。

自分にできることなんてそれほど大したことじゃないし、限界もある。だけどできることに全力でぶつかって、感謝されたりするから、ああ、またがんばろうって気持ちになれるんだ。

「そうだろ？ 父さん。

5

その後、凪紗は勇太と母親に土下座して謝った。始めのうちは戸惑っていたようだったけど、彼女の境遇に同情の余地があると婦人は謝罪を受け入れるという手紙を後によこしてくれた。で、肝心の凪紗は「

「いつたい何年ほつたらかしてたのよ…」

本堂を隅から隅まで掃除するよう云々付けると文句ぶつたれながらも結構楽しそうに掃除している。風音や隆盛も手伝ってくれてるし。

「仕方ないだろ。今まで人手がなかつたんだから」

「男の人気が一人暮らしすると大抵部屋が汚れていることが多いですね」

風音。やっぱ慇懃無礼だぜ。

「きちきち動け、日が暮れるぞ」

オレがみんなに発破をかけると隆盛が傍に寄つきた。

「はは、なんかよかつたな。賑やかだし」

「ああ」

「でも正直、大智が凪紗のことを受け入れるとは思わなかつた」
オレが人間として成長してくれて嬉しいみたいな調子で微笑む隆盛。なんか、失礼くない？ それ。

「まつ。オレもこんな力持つて生まれたわけだし、凧紗の気持ちがわからなくもなかつたからな」

あのとき、流れてきた凧紗の記憶。あんなもの見ちまつたりほつとけるわけないじやないか。

「そうか」

隆盛がオレの頭をくしゃくしゃと撫でてくる。だから子供扱いすんなよな。

「まあ、あれだ」

オレは顎に手を当てて云う。

「蛇の道は蛇つてな」

「なんかカツ」「つけてるけど、微妙にことわざの「コアンス間違つてるぞ。それを云うなら同病相憐れむだ」

「うつ……」

赤つ恥じやんオレ。まつまあ終わりよければ福来たるつてこと。いや、全ては口 マだつだけ？

とにかくまた、どこかで「縁があれば」このオレ、不破大智の呪われ屋をよろしくつ！

“Cursed x Bluest”

独りぼっちの夜軍
ナイトリィバトル

暗がりに染まりつ氣付いた
強さと重さと
胸に仕込んだ手鏡に
映り込んで追い込んでゆく
心の脆さと

腐れかけてた

私の声、私の頬、そつと

ハンドグラス

触れて撫でてる小さな手を感じるわ

罅の数だけ

理由を聞いて、框を取ってくれた

あなたの傷にも

救いが来る日を願っている

My mind needed it.

リバース制作委員会

著・みゆ貴茂

シクエンス

御陰邸

。あはつ……

部屋でノートパソコンに向かっていた勇太は、その愛らしい顔に不似合いな笑みを浮かべて呟く。

「ちょっと予定は狂っちゃったけどね」

勇太はチャットをしていた。

ディスプレイにも同じ言葉が書込まれる。

『乾闥婆 ちょっと予定は狂っちゃったけどね。でも、超めずらおもしろい呪いに出くわすことができたし、まついつかって感じ』

『竜 よかつたねえ』

『緊那羅 乾闥婆さま無敵』

『乾闥婆 これで暫らく退屈しないで楽しめそ』

』

部屋の戸が叩かれ、母親が入ってくる。

勇太はさり気ない動作でノ トパソコンを閉じ、母に無邪気な表情を覗かせた。

「勇太、まだ起きてたの。まだ、本調子じゃないんだしそろそろ寝なさい」

「うん」

時刻は九時を回っていた。母は勇太の首筋にお休みのキスをして部屋から去った。彼女を笑顔で見送っていた勇太は、戸が閉まるのを待つてパソコンを開く。

『もう寝なきや。じゃあまた』

勇太はチャットを終え、立ち上がりと電気を消して窓の前へ。

「呪わればっち 間に染まりて、闇を断つか」

勇太は目を瞑る。

そして陽気な歌を口ずさんだ。

「そんなこと思うから今夜も眠れない」

つづく

ヒロトカゲー 腐れかけの肉

行き過ぎた科学を人は“魔術”と呼んでいた

業深き“魔術”を“呪い”と忌み嫌つた

“進化の指針”

彼のものからの

墮落故にと

知る由もなく

ただただ怯えボクらは“呪い”を拒み続けている

たつた一つの外典

“呪わればっち”を除いて

“SALVATION”

闇に魅せられたときに呪われて
抜け出すなんて一人じやフエイティッドできず
彷徨い続ける道は孤独ロングローーディズな日々
きみの視線、妙に気になつて
煩わしい日々の中
雑音に笑えるのは
糸、紡ぐから
縋り付くみたいに

傷ついて、涙、溢れたつ
きつとかまわない

魂の叫び、渴れ尽きるまで進もう
目の前に光明、もつと光明
罪に溺れずに

この先に望みえる空、蒼天

That I am of the tribe.

腐れかけの肉

1

「ただいま」

「おかえりつ
てなにその荷物つ！？」

買い物から帰つてきたオレと隆盛。

居間で寛いでいた畳紗と風音は隆盛の抱えている荷物の量に仰天する。紙袋六つに箱が数個。

「大智はあプチ買物依存症だあ」

戯けているがどことなくため息混じりに云つ隆盛。

「いいじゃん。自分で稼いだ金なんだし」

「そりやそうだけど、一日で三〇万以上使つ高校生つてどいつよ」

『三〇万……』

見事にハモる双子。

「う……そりやさ。自分でもちよつとは異常かなあとか思つけど、
でも月に一回だけつて決めてるし、頑張つて日々生きてる」褒美だ
もん。

「あつそつだ。二人にお土産買つてきたんだよ」

啞然としている双子に、取り繕つようにオレは云つ。

「えつーお土産？いいのー？」

「ありがとう」¹『』こまます

二人は驚きつつもとても嬉しそうだ。

よかつた土産買ってきて。こんなに感激してくれたら、こいつも

嬉しくなる。

「ありがとうつ……て」

渡した紙袋を開け、その中身を見て風紗は絶句する。

「このジンズ　ドルバ……」

そして風紗は風音の方を見て、

「　ラのスカ　ト　　一いつ合わせたら十万くらこするんじや…

…

「えつそんなんにっ！？」

姉の言葉に風音も驚愕する。

「そんなんにしてねえつて。安売りしてたから一いつ合せにゼン五万くらいだる」

「じつ五万」

「一ヶ月は生活できますね」

う～みゅ。どうも金銭感覚のずれが

「うれしいけど」

「いんですかね」

戸惑う一人に、

「いいの、いいの。大智は買物してぱあつて金使うのがストレス発散なんだから」

と隆盛。まあそれはそうなんだが、お前の科白じやねえだろうよ。でも、ほんと。気にしないでいいぜ。恐縮させるために買つてき

たんじやねえし

オレの言葉にそれでも渋い顔をしてる風紗と風音。

う～値段なんか見ずに適当に買つてきたんだが失敗したかな。

「そつはいつてもねえ。ただでさえ、法師さまには居候させてもらつてるわけだし」

「それに隆盛さんのお父さまには私たちの後見人になつていた

だいて　　至れり仄くせりつて感じで申し訳ないです

「いいの、いいの。ととさまは不破家の雇われ弁護士だぜ。黎須さんの遺産ふんだくつてんだから」

「…………」

恐縮する双子に隆盛はカラカラと云い放つた。

それでオマンマ食わせてもらつてんだからちつとは謙虚に生きろよ、隆盛。

「でも、まあホントありがとね法師さま。それにしてもサイズひとつしだけど、よくわかつたね」

「ああ　　なんか隆盛が知つてた」

「えつ？」

隆盛に疑惑の目を向ける凧紗。隆盛はピースをして云い放つ。

「はつはつはつオレの眼力も伊達じやねえ。一人とも上から80・

58・84だ」

「なつ！？」

飛び出してきた数字に風音はきょとんとなり、凧紗は顔を紅潮させ怒鳴る。

「何を根拠につ！風音はどうかしんないけど私はもつとあるもん」
何が？

「ははつ見た目はな。そりやあパットを二つも

「他人のトップシクレットをつ！」

凧紗の放つた右ストレートが隆盛の顎にクリンヒット。ア
妙なスキルで曝すなつ！」

「うげえ　　うげえ　　うげえ　　」

おおつ！－長淵キックの嵐つ！－自業自得だ、隆盛！

「それで大智先輩は何をお買いになつたんですか？」

「つ！？」

風音、自分の姉が繰り広げる日の前の惨劇を無視して別の話題に
移るかよ！

まあ気持ち分かるけど。このさい、オレも風音に乗つかつて脳内

から排除しよう、』のドメステイク・バイオレンズ。

「ん~とゲ ムとお 『世界 車窓から』のDVD BOXにい

い』

「『世界の 窓から』の そつそんなものが……？」

「冬物の服いつぱいにい Gパンでしょ」

「ほんとにいつぱいですね」

「あつほらほら見て見てつーク ム・ハ ツの新作ブレス」

「へえ意外。法師さま、そんなのいつもしてるつけ?」

いつのまにか暴行が終了していて、話に加わってくる凧紗。

よつよかつた……。また、この家で人死にが出るかと思ったぜ。

「大智は買つた端からすぐに飽きて人にやるからな」

ホント頑丈だなあ 隆盛。ケロつとしてやがる。

オレだつたら最初の一撃で三途の川を飛び越えていただろひ。

「それはそうと大智。明日、体育祭の全体練習だからな。体操服ち
やんと用意しろよ」

「……体育祭の練習……」

「ああ。それなら私が洗つて干しましたから」

風音が云う。

「そつそつ、体操服を洗濯機から出したときには、すごく小さ
かつたんで一瞬縮んでしまったのかと思つて焦つてしまつたん
よ。でも、よくラベルを見たらあのサイズで良かつたんですね」

「……」

「ははつ大智の体操服姿はそりや『可愛い』のなんのって」

「でしおうね」

「……」

「あ~あ……せつかく買物していい気分だったのに 三〇万
以上かけてストレス発散したのに。」

『体育祭の練習』

その一言で全てが台無しい。

あ~……コウウツ……。

*

この世界は呪われている

どこもかしこも黒で溢れている

古ぼけた電車のホム

事故の多い交差点

夜な夜な何かが徘徊する神社の境内

墓を除けて建てたデパート

滅多に使われない教室

人の心

触れては染まり、退いては消える淡い闇
でも、ほらそっと背中を押せばそこは深淵
藻掻け、苦しみ、抜け出せず
掴んでは切れる糸を求めて

呪われろ呪われろ呪われろ

「お早よう一ヒロくん」

ホムルムが始まるか始まらないかの時間、前の席の御陰勇太みかげゆうたが登校してきて僕に声をかけてくる。

久しぶりに彼の顔を見た。一週間くらい病気で休んでいたのだ。

永久に来なくていいのに。

僕は腹の内をこれっぽっちも曝さず御陰勇太の挨拶に応じた。

「お早よう勇太くん。なんか病気みたいだつたらしいけど、もう大丈夫なの？」

「うん。ありがとね。心配してくれて」

この顔だ。まるで処世術かのように愛らしさを研ぎ澄ましたこの笑顔に無性な厭らしさを感じる。それなのに御陰勇太はやたらと僕にかまつてくるから始末に負えない。

「ねえねえ、実はねボクただの病気じゃなくて呪われてたんだよ」「えつ！？呪いつ！」

呪い。その単語に僕は過剰に反応してしまった。御陰勇太は二口

二口顔のまま続ける。

「うん。それでね、けつこう危なかつたらしんだけど、近所の寺の
お兄ちゃんが助けてくれたんだあ」

「へえそなんだ」

ちつ！よけいなことを。

それに付けても、御陰勇太に関わりたくない一心で情報収集を疎
かにしたのは失敗だつたな。せつかくこいつの深淵に苦しむ様が拝
めるいい機会だつたのに。

「近所にお祓いとかできる人がいたんだね」

本心から出た言葉だつた。そんな奴が近くにいたんじや田障り極
まりない。

「なんかねえ、呪われ屋とか云つてたよ」

「ふうん」

呪われ屋ふぜいか……なんとか肅清できたらいいけど。
しばらく、御陰勇太が引きりなしに話し掛けてきて僕はそれを

自動的に処理する。

そういうしていいるうちに、チャイムが鳴り担任教師が教室に入つ
てきた。

「おうつ！勇太　　もう大丈夫なのか？」

「うん。もう、平氣だよ」

担任の問いにわざとらしいゼスチャ　で応じる御陰勇太。

どうでもいいが、この若い担任、受け持ちの生徒たちのことを名
前で呼んでいる。それで媚びているつもりなのか友好を誇示してい
るつもりなのか知らないが、吐き気がするほど鬱陶しい。

「よかつたなあ。ヒロトも心配してたしな」

「ええ」

心配とかしてたっけか、僕。担任から何か云われたりして適当に

対応したんだろ? うな、きつと。

なんか嘘をつきすぎたせいか、最近では口先と脳とが全然連動していないような気がする。それでも、うわの空とするには適切に「ミコニケ シヨン」が取れているようだ。まるで相手の言葉を処理する機関が脳とは別にある感じだ。

「ほんと! ? ヒロくん?」

御陰勇太が嬉々として訊いてくる。そしてまた僕の口は勝手に動く。

「友達だもん。心配するよ」

「へへ」

僕の言葉にはにかむ御陰勇太。端から見ればとても仲の良い親友同士に映るのか……。糞喰らえだな。

「綾菜とゆりが来てないな」

担任が出席を取り終え、まだ来ていない生徒がいるとぼやいた。

「誰かなんか連絡」「

その折り、教室の後の扉が開いて問題の一人が入ってきた。

「どうした? 二人とも」

「ごめんなさい。私が寝坊しちゃって」

古手川綾菜が申し訳なさそうに云つた。担任は出席簿に何かを記入しながら云う。

「ん、まあいいけど。二人とも罰として、今から先生と郷土資料室に行つて次の授業で使う道具運ぶの手伝え」

「…………」

担任の言葉に遅刻した二人は何やら云つていたが、そんなこと僕の耳には届いていなかつた。

郷土資料室……。

「そこは確か。」

「ヒロト。すまんがお前も頼む」

「ええ。いいですよ」

担任は案の定、学級委員である僕にも話を持つてきた。

なんという幸運だらう。

いつか何かの足しになるだらうと、面倒な役職を率先して引き受けたが、本当によかつた。

「はいはい！ボクもっ！ボクも手伝つ

滌刺と手を挙げる御陰勇太。

「おいおい、勇太。お前、病み上がりだし無理するなよ

担任がそう云うと、御陰勇太は膨れつ面をして云い返す。

「え、大丈夫だよ。ボク、ヒロくんと一緒にいきたいもん

「はいはい、わかつたわかつた。べつたりさんめ。あんまりはしゃぐなよ

「はい。行こつーヒロくん

「うん

ちつ金魚の糞が。まあいい、お前も僕の快樂の糧となれ。

「他の奴は静かに待つてろよ。じゃ行くぞ」

担任の引率で郷土資料室へ向かう。その道中、古手川綾菜が僕に謝罪してきた。

「ゴメンね。縫取織くん なんか付き合わせちゃつたみたいで」

「いいよ、気にしないで」

バカな女だ。担任は端から僕に手伝わせる気であつて、お前が遅刻して勝手に巻き込まれただけだ。それにしても哀れだな、河原ゆり。友人の遅刻に巻き込まれた挙げ句、犠牲者一号の仲間入りになつてしまつたのだからな。ふふ、まあどの道おそれはやかれの問題にすぎないけどね。

「ねえねえみんな知つてる？」

御陰勇太が口を開く。少しでも黙つて行動ができるタイプだな、こいつは。

「これ噂なんだけどね、郷土資料室つてなんかお化けが出るつて聞いたんだけど」

「……」

そんな噂聞いたことがない。

そういうった類の情報は聞き漏らさないよう神経を配つてゐるが
こいつのでつちあげだろうか？それにしては偶然すぎる。

「なんか蜘蛛のお化けらしくてえ」

「もう、やめてよ。今から行くの」

「ええ、おもしろいじゃん。そういうの」

それぞれ、固有の反応を示す河原ゆりと古川綾菜。それが愉快
だつたのか更に続ける御陰勇太。

「それでね可愛い子供に取りついて、ムシャムシャ食べちゃつて
もう、そういうの口に出したらホントになるんだよ」

「恐いって思うからいけないのよ」

「ボク、可愛いから心配だな。もし襲われたらヒロくん助けてね」

「ハハ……」

「ふん、寧ろ化物の加勢してやる。

「おい、お前ら。まだ、ホームルームやつてるクラスもあるんだか
ら静かにしろ」

「はい」

「そうこいつしているうち」、郷土資料室に到着する。

そして、扉が開かれた。僕にとつては享楽の
即ち奈落の扉
が……。

「うわっ」

河原ゆりが鬱氣を洩らす。

「やっぱ、お化けがいるかもねえ」

もちろん、そんなものいるわけない。そんなものはいないが
。

「バカ云つてないで、さつさと入る」

担任に急かされ僕らはそこへ足を踏み入れる。

「埃っぽ」

「それにカビくさ」

「日当たり悪いせいでね」

たしかにそこは御陰勇太の話を裏付けるかの「」と「陰氣な部屋」だった。

見るものによつては怖氣を誘つ土器や土偶などの郷土品。
微かな日光に垣間見られる塵芥の舞い。

目に見えないとこで大量に蔓延つてゐるのであらうカビの臭い。
だが、それだけではない。

僕には見える。この部屋に確かに存在する深淵の源が。それはまるでどす黒い水蒸氣のような 煙よりも重く霧よりも大きな呪われた証し。

僕以外、誰も氣付いていない。だから平氣で深淵の中に身を置ける。ドブ川に潜り込むよつなこの情況で、正氣を保てるのはこの僕一人だけだ。

「先生どれ運ぶんですか？」

人が動けば深淵にも流れが生まれる。まとわりついては離れ、口から入れば鼻から出ていく。即ち触れては染まり、退いては消える淡い闇。

でも、ほらそつと背中を押せば 。

「フフフ 」

僕は手を延ばし、黒い靄を齧掴みにする。
そして塗りたくろう。

僕の周りにいる愚かな輩に。
僕の快樂の餌たちに。

さあ、深淵の宴が始まる。

藻掻け、苦しみ、抜け出せず。

掴んでは切れる糸を求めて。

呪われろ 呪われろ

呪われろ 。

暑い、きつい、だるい。

なんでこんな炎天下の中、運動場でずっと体操座りなんぞをせり
れななんのじや。

体育祭とかなくせえ、バカ。

護法天童に任せようと思つたのに、『運動不足だからちつたあガ
ンバレ』とか云われて隆盛に護符を奪われるし、いいかげんキレる
ぞ、オレー！

「先生つ！」

オレは立ち上がり拳手して叫んだ。それを聞き付けた担任の堤が、
急いでオレに駆け寄つてくる。

「どうした、不破？ お前は選手宣誓じやねえだり？」

「ちげえよ」

確かにそんな感じに見えただろ？ けど。

「オレア ぶちキレたぜつ！ きつい、暑い、喉渴いた。木陰で見学す
るからなつ！ ？ もう！」

「おい、まだ練習始まつて一時間も立つてないぞ。喉渴いたんなら
水飲んできいいからもう少し頑張りなさい」
諭しに入つてくる堤。つるせえ、こいつらもうそんな段階すぎて
んだよ。

「いやだつ！ 休むつ休むつ休むつ……」

「我假云うな みんなだつて我慢してるんだぞ！」

「うい！」

怒鳴り付けられて、思わず涙が出そうになる。うぬぬぬ。
「だつてさあ。ホントに暑いし、きついし、オレチビだしい
「チビは関係ないだり？」

「関係あるもん。さつきさあ、下級生に『あつ小学生が紛れ込んで
るんじゃない？ かわゆい！』とかバカにされたんだぞ」

「そつそれは…… 気の毒だと思つが

「うえーん、スネ毛も生えてない男子高生の気持ちなんて誰も分か
んないんだあ。うえーん」

「その態度が小学生並みだぞ、不破」

地団駄を踏むオレに全校生徒の白い目が突き出される。

「くう、こうなつたらあ 死なば諸共、全員くたばれつーのうま
く もんまん 」

「うわあ、止めるつこの腐れ坊主つ！…」

不動金縛りを使うため、印を結ぼうとするオレの腕を羽交い締める堤。

「放せえつ！逆鱗に触れたてめえらが悪いんだ」

「誰かあ実行委員の上条呼んでこいつー？」

「はいっ！」

(間)

「こうひつ 大智…ちつたあ我慢しろ。つうか素人に術使おうとするな
つ…！」

くつ保護者を連れてきたか だが、そんなことでオレの我
僕は止められねえぜ！

「黙れ隆盛！金縛るぞ、こりあ」

「ちつちつちつ オレに術はきかんぜよ

「くう」

そうなのだ。隆盛の奴、昔、オレの父さんにもむらつた法具やら、
いつの間に彫つたのか二の腕入れてある光明真言の刺青（普段はテ
ピングで隠してある）やらいで、やたら靈的防御力が高いでやんの。
ちつ、こうなつたら別の方法をとるまで。

「だつてさあ」

オレはしゅんとなつてみせる。

「日焼けしたくないんだもん」

『そんな理由かつ！』

オレの言葉が聞こえたほぼ全員が罵倒していく。

違うよ。でもこう言えれば隆盛は 。

「おおつー白いのがいいぜ、大智はーー」「ほらね。

「つうわけで大智を医務テントに運びます、先生」「はつ?『

周囲が唖然となる。

カツカツカツ!隆盛を操るなんざ朝飯前だぜ。

「ほら、おふってやる。行くぞ、大智!」

「ハイドー隆盛!」

運動場を隆盛の背中に乗つて駆け抜けれる中

「このバカコンビがあ

担任・堤教師の憤りとも嘆きとも取れる叫びが背後でこだました。

「ほらつもうすぐつくぞ、大智

「おつ

「きつと、りか子ちゃんもお待ちかねだぜ」「

「げつ

忘れてた。あのハレンチ教師、渡部りか子は医務班担当だつたんだ!

「ちょっと止める」「

「車は急に止まらないー!」

「いや、ちょっと まずいって 」

あの女に体操服姿なんて見られた暁には、確実にハラスメントだよ。セクシャルな方向につ!

「やだやだやだ」「

隆盛の頭をボコボコ殴つていると、ピンポンパンポンと校内放送が鳴り、

『一年D組の不破大智くん。至急校長室まで来てください』と呼び出しがかかる。

「なんだろうな?』

「なんにしてもラッキ。隆盛、そのまま方向転換

「ラジヤ』

渡部りか子を回避でき、オレは隆盛の背中でほつと胸を撫で下ろした。

しかしそれが、これから起ころる辛辣な事件の開幕ベルとは夢にも思はず。

あたかも、呪いの真意を思い知らされるかのような悲劇の。

*

「いいか。これがそれまで使われていた風呂鍬で、こここの木の部分を」

一時間田の社会の授業がつつがなく行なわれている。担任が郷土資料室から運んできた道具やらを掲げて、その説明をしている。もつとも、僕から言わせれば異常は着実に進行している。即ち、資料室に向かつた四人に擦り付けた闇の靄が彼らの中で膨れ上がつていく。

「これが江戸時代に農業技術の」

ふふふ。それにしても、学校、教室とはなんと都合のいい空間だうひつ。

昼間にありながら静寂が生まれえ、また単独の声が大勢の耳に届きうる。意識の一点集中。黒板に。白墨に。教師の声に。

それは力場の形成や、儀式の遂行にも似ていて。

「それでこっちの備中鍬を初めとする農具が開発され

「あつ」

僕の前の席に座つてゐる御陰勇太が小さく声を洩した。彼の体が傾ぐ。

そして派手な音を立て、御陰勇太が椅子から転げ落ちた。

「どうした勇太」

担任が御陰勇太に駆け寄るうつとした瞬間、

「うつがあ

「

彼は胸を押さえて倒れこむ。

「うああああああ

続く河原ゆりの絶叫

河原ゆりの狂ったサイレンのよくな叫び声の中、古手川織菜がビクンビクンと体を痙攣させながら床に落ちた。 さながら、陸に打ち上げられた魚のごとく。

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

詰かか呑いた 教室中は恐怖が蔓延する
二うして闇の感染が始末した。

卷之三

100

立モニハ
もつ

「ええつええつ

立ち上がり、首を一八〇度回転せんが勢いで体を捩り始める女生徒もいる。

教室が黒い靄で包まれている。郷土資料室よりも、より深い深淵の、運命の車鎖。

もはやまともなのは僕一人のみ。

くわなわなわなわ

最高だ！最高だあ

二の業を樂しませぬためだ。さう呪われろつ呪われろつ呪われろつ

! !

「やはり、肉は腐りかけが最も美味しい」

思わず本音が出た。

「まあ果実もそうだけど。今はそんなこと云つてる場合じゃないよ
ね、ヒロくん」

「なつー?」

突如、背後で声がする。驚いて後を向くと御陰勇太が怪訝そうに立つていた。

「バカなつー? じつは最初に落ちたはず。
しかし、御陰勇太の中の靄はすでになくなつていてる。

「勇太くんは大丈夫なの? 倒れてたけど」

「うーとね。消しゴムが落ちて拾おうとしたら転んじゃって、頭打
つちゃった。たんこぶちゃん」

「…………」

なんてことだ。御陰勇太は端から呪いにかかりていなかつた
まさか、一度呪われたら耐性とかできるのか? 或いは、先の話に
出た呪われ屋がなんらかの処置を?
いざれにせよ、なんて体たらくだ!」 じつを誰よりも優先して、
突き落としたかつたのに……。

「うわっひつどいねえ」

御陰勇太は教室を見回し言葉を洩らす。

「どういう意味だ? まさか、僕がやつたことがバレてるのか?
「なんでボクたちだけ平氣なんだろうね?」
「さつさあ」

素つ頓狂な御陰勇太の雰囲気。

思い過しか?

そういひ、杞憂していると教室の扉が開き隣のクラスの教師が入
つてくる。

「どうしたんだ? いつたい」

その教師は倒れている生徒たちに駆け寄り僕らに訊ねてくる。

「さあ、突然みんなが

僕は怯えたように答えた。しかし御陰勇太は、

「先生、これ呪いかも」

平然と口に出す。

「こつこいつ

「呪いだと？」

「うん、でもそんなことより早く救急車と人手を」

「あつ そうだな。呼んでくる。ちょっと待つてろ」

そう云つて教師は職員室に向かう。携帯電話を持つていなかつたのか？それとも気が動転して忘れているのか？

慌てている教師の背中に、

「あと、真鎧高校に電話して不破大智つていうお坊さんに来てもらつた方がいいよ」

そう御陰勇太は告げた。

不破大智。そいつが例の呪われ屋の名か。

まあいい。呪われ屋ごとにこの巨大な深淵が扱えるのか、見物

だ。

「なにこれ？」

いつのまにか廊下に野次馬ができていた。隣のクラスの生徒たち

だ。

「うげえ」

「気持ち悪つ」

きやつらの中に不安が騒めぐ。

いい感じだ。教室中に溢れる靄が野次馬たちにも触手を伸ばし始める。じわじわと、和紙に垂らした墨のように。

ふふ。これでもつと大きくなる。

「うつらうつらん うつらうつらん

「？」

なに？

突然、御陰勇太が歌を歌い始める。なんのつもりだ

「思いつきり駆け出してえ 大きく手を振ってえ」

場にそぐわない、稚拙で明るい歌声。

「どこまでも広がる道はあどんなところだろ～う

「――?」

「嘘……だろ。

僕は愕然となつた。

靄が、野次馬たちに侵入しようとしていた靄が退いていく。それだけじゃない！教室中を支配していた深淵が少しづつ、少しづつ薄らいでいく。

「バカな

」

僕は渴いた声を洩らしていた。

せつかく せかつく僕がお膳立てした享楽が

奈落が

呪いが

消えていく。

「悩んでもつまらない思い切つてみよう

「こんなくそガキに。アホ丸出しで、人に媚を振り撒くしか能のない腐れに！」

「そんなこと思つてて今日も眠れない

」

御陰勇太が目を細めた。

勝ち誇つてているように感じた。

「――

僕はなりふりかまわらずその場を後にした。

3

なんでも、近くの小学校で呪われごとが起こつたらしい。それで、オレに来るよう要請があつたとか。

オレは隆盛に負ふわれたまま、小学校へと向かつた。

現場の教室に着くと、子供たちが泣き喚いたり震えたりしているのを大人たちが懸命に宥めていた。

「あなたが呪われ屋の？」

白衣を着た女性が近付いてくる。恐らく養護教諭か何かであろう。

「私は校医の隅田です。たまたま、学校に用があつていたんですが

」

例によつて隆盛に「呪つてゐる」。

「呪われ屋はオレじゃなくて、負ふつてゐるのがそつだよ」

「えつ？」

「毎度毎度、懷疑的な目が向けられるし。

「ごめんなさい、てつきり息子さんかと」

『息子さん?』

これは少なからずオレだけじゃなくて隆盛にも打撃を与えたよう
で。

「こんなでかい息子がいる年に」

「けつけつけつ老けてんだよ、てめえは」

「ちょっとびり愉快。それにしても、二人とも体操服姿なのにぼけた医者もいるもんだ。」

「さてと」

オレは隆盛の背中の上から教室を見回す。

「そこの藻搔いてるおっさんと、真ん中で叫んでる女の子と、その横でピクピクやってるのが呪われてるだろ?」

「ああ、あの子はたぶん三人の呪いにあてられて暗示にかかつた
か」とにかく、三人とも不動尊寺に運べ

「はい」

隆盛が周りの大人に指示を出す。

「あの、暗示つて集団ヒステリのよつなものですか?」

と隅田女医。

「たぶんな」

「そうですか」
「そうかもしだせんね。話によると、正氣だつた生徒が歌を歌つたらみんな少しづつ正氣を取り戻していくたつて
聞きましたし」

「歌?」

偶然か? それはある意味で、適した応急処置といえるかもしだ
い。

歌なら恐怖や苦痛に集中する意識を分散させられるだらうし、もともと言葉には力があつて更にそれにメロディ やリズムを付けた歌には靈力を行使する力があるともいわれてる。

「誰がそんなことを

「ボクだよん」

後から声がして振り向くと、そこには先日呪いから救つた御陰勇太が立つていた。

「おはよう。大智兄ちゃん、ヨシ イさん」

「わつわつわつ、ツシイじやなくて、チヨ ボだぜ。S級海チヨ

」

「

オレはいつまでも隆盛の背中に乗つていることが急に恥ずかしくなつて、いそいそと下りる。

「あの勇太くんどうしてここに？」

「だつてボクのクラスだもん」

「

ここは五年生の教室 オレ、てっきり勇太は一年生くらいか

と思つてた。

「勇太くん。お兄ちゃんとマム同盟を組まないか？」

「はは。いいけど、数年後には脱退かな？」

ちつ。暗に『ボクはこれからが成長期なのだ』と主張しやがつて。

「それより勇太、なんで歌つたりした？」

隆盛が訊ねる。勇太は首を傾げとぼけたように云つた。

「う～ん、べつに。なんとなく。呪いだつてのは分かつたし、歌とか歌つたらちよつとはいいかなとか思つたのかなあ？」

「

この子、靈力が強いだけでなくセンスもいいのか。

しかし、危ないのも確かだ。ここは靈能者先輩としてびしつと云わねば。

「みゅう、勇太くん。まあ結果、助かつたけど。あんま無茶するな

よ。ほら、生びい

生ば

生ぶい……」

「生麦生米生卵？」

「おお！勇太、早口言葉つまいな。

「じゃなくてだな、ほら

」

「生兵法は怪我の基つていいたいんだろ大智は」

「ちつ隆盛に云われてしまつた。

今、云おうと思つたのに。噛んでたんじゃなくて、勿体振つてたんだい！グスン。

「玄人跣ともいづよね

「うつ」

小学生に諺で返された。

「とつとにかく、危ないことしちゃだめ」

「はい。それじゃあ、ボクちょっと用事あるから行くね。呪われ

ガンバッてね。バイバイ」

そう云い残すと、勇太はとつとつとビックリ走り去つていた。

「変な子」

オレが眉を顰めていると隆盛がじつと人の顔を見下ろしていく。

「なつなに？」

「可愛さ」ゴツツ（訳：一人とも同じくらい胸キュン）

親指突き出してくるし。

「…………」

「うひこひこ、やはり変態か！？」

*

「…………」

「誰もいない廊下。僕は一人黙々と歩く。

騒ぎのため、こんな辺境に目を向けるものはない。幸いだつた。

「ふん」

僕は郷土資料室の前で立ち止まる。

さつさまで怒りで興奮していた心も、今はすかつり朽ちていた。

つた。割り方に工夫したためそれ程音はない。

框に残ったガラスを慎重に除き、内鍵を開けて部屋に侵入する。

- ああ「

僕はその場でへたり込む。黒い霧の中に体を埋める。

心が闇と同化する。世界と一つになる。

「せつだ、むつと集めなきや」

集めて、もつと多くの場所をここと同じにしなければいけない。

。 あいの 従順勇力のおの屬らしい笑みを滲さない

「もつとだ
もつとだ

床に這いつくばり靄を搔き集める。

取れない
取れないよう

「ああ、兄ちゃん、お前が兄ちゃんか？」

はあ はあ はあ

気持ちがいい。

「あん はあん ああ

「心が、魔力かな？」

呪われろ 呪われろ 呪われろ

たとえ腐れても、それが当たり前だと思えるほどに

僕自身が呪われて
僕が全てを呪つてやる。

アハハハハハハ

」の心地よさ、みんなに分けてあげるから。

シケンス

呪うのが先か、呪われるのが先か。 。
快樂にのたうち回りながら深淵に落ちていく少年を、隣の棟の校舎から見下ろす視線があった。

「アハッ」

御陰勇太はその愛くるしい顔に不似合いな笑みを浮かべる。

「ヒロくん ボクがキミに付きまとつのはねえ」

勇太は舌舐めずりをした。

「ヒロくんが呪われてるからだよ。ずうつと昔からね

唇に付いたお気にいりのアイスでも拭うよつに。アハッ」

その日の深夜。

御陰邸の住人はすでに寝静まっていた。ただ一人、御陰勇太を除いて。

勇太は電気を消した暗い自室で、パソコンに向かっていた。

『乾闥婆』 という話。どう?おもしろかった?』

『夜叉 人を呪わば穴一つって奴?』

『天 なんかそれダサくねえ(笑)』

『乾闥婆 ううん。ある意味では夜叉くんの云うとおりなんだ。ただ、順番が逆』

『天 つまり人を呪う奴は端から呪われていると』

『乾闥婆 そう。もっと大きく云えばこの世に呪われていない人なんていらない。命が誕生した時点で赤ちゃんは母親に括られる。質や量はまちまちだけどね』

『緊那羅 さすが乾闥婆さま サイコ!』

『天 ふうん。そんなもんかね。まついいけど、それよりなんで乾闥婆さまは祓つたりしたんだ?やっぱクラスメートは見捨てられな

い?』

『乾闥婆 はは、手厳しいな。確かに趣味じゃないってのもあるけどね。ただ、まだ「^{ダイアモンド・カット・ダイアモンド}金剛切り金剛」を見るにはヒロくんに分があるから。それに、量より質』

『緊那羅 被えば確實にそのヒロひで子の心は軋むし呪いは進行する。乾闥婆さまはじつくり一つを育てて吟味するですね』

『乾闥婆 そう。アハツ、やっぱ肉も果実も腐れ掛けが一番美味しいもんねえ』

『天 うわあ～エグ』

『乾闥婆 アハツ、おやすみ』

勇太はそこでパソコンを閉じ、ベッドに身を沈めた。

「闇に染まりて闇を斬る呪われぼっち 闇に染まりて闇を振り

撒くヒロくん 楽しいなあ」

そして、陽気に歌を口ずさむ。

「そんなこと思つから今夜も眠れない てか」

つづく

ヒロトカゲ～尊き樹～

1

「あふう」

オレはだるい体を引きずるようにして本堂から這い出る。辺りは暗かつた。夜目を凝らしながら自宅へ戻り居間にどてんと寝転がる。「う～と うまく さんまんだ ばざらだん かん」

小声で真言を唱えると、それに誘われるよう護法天童が居間にやつてくる。

「お疲れでちゅ。」主人ちやま

「今、何時だ？」

「一時くらいでちゅよ」

丸一日とちょっとか 弱かつたものとはいえ三人分を一気に引き受けたんだから上出来と云えるな。

「何か変わったことは？」

「え～とでちゅね。今日、凪紗しゃんが体調悪いって学校休んでたでちゅ」

「凪紗が？」

「うん。でも、あれたぶん仮病でちゅ」

「…………」

仮病か しきうがないよな。

まだ……恐くてたまらないんだ。いろんなこと。時間がかかる。

「お風呂、入る」

*

なんて哀れだ御神木

。

数百年もの間、この地の人間のために御身を捧げてきた優しい優しい国つ神。それが人間たちによつて汚されるなんて。

「くつははは

思わず笑いが込み上げてくる。寝静まつた神社の境内に僕の笑い声が響いた。

「おつと ここは私有地だつたな

住人に目覚められては面倒だ。

「さて、解放してあげよう御神木

僕は汚された神の木に手を延ばす。ぶつとい幹、いっぱいに黒い靄が、深淵の源がつまつている。

「呪え、お前の苦しみに気付かなかつた全てのものを なにつ !?」

争うか この僕に……。

黒い靄を奥底から引き出すことには成功した。だがそれを御神木から抜き出すことができない。

まあいい。そんな、汚れきつたその身でどこまで耐えられるか、見物だな。

2

「そういえばさあ

昼休み。鬼灯姉妹と隆盛とオレの四人で学食を囲んでいると、凧紗が思い出したように口を開いた。

「不動尊寺つて、寺でしょ? なんで、階段下に鳥居とかあんの?」

「…………

凧紗の問いにオレは言葉を失つた。

そういえばそうだ。うちつて一応、寺なのになんで石段の下に鳥居があんただろ? あそこもオレンジの敷地だよな、確か。

「大智、知らなかつたのか?」
と隆盛。

「なつ？じゃあ、お前知つてんのかよ！？」

「知つてる。てか、小学校の頃、不思議に思つて黎須さんくねすに訊いた」

「つまり、今まで不思議に思わなかつたオレは小学生以下と？普通の人なら疑問に感じますよね。口に出すか出さないかは個人差ありますが」

くそお風音 折目正しく追い打ちかけてきやがる。

「で？ なんなわけ？ 鳥居の理由」

「えうと、たしかなあ」

隆盛はおやつのフランスパンサンドを頬張りながら答える。どうでもいいが、その前に四人前の定食平らげといてよく入るな。

「廃仏毀釈つて知つてつか？」

「ええ、まあ」

「それほど詳しくはあつませんが」

「…………」

「なにそれ。知らない。

オレが黙つていると、

「たしか日本史で習いましたよね」

おのれ風音 生温い笑みで優しげにバカの烙印押し当ててき

やがる。

「みゅうう」

オレが打ち拉がれないと、横の隆盛がオレの頭をポンつと叩いて云う。

「風音ちゃん……ほら、大智だし」

「そ……ですね。大智先輩ですし」

「知らなくともしようがないよね」

「…………」

「なんだよそれ。その人だからしようがないって、どんな理屈だよ。うえいん みんながオラをバカにするじょ。」

「…………」

「いじけて ブルに『のノ字』を書いていると隆盛が優しく頭を撫でてくる。

「いじけるなよ。お兄ちゃんが搔い摘んで教えてやるけん」

カカン（拍子木）

また、人のこと子供扱いするし。てか、拍子木どこからだしてきた？

「Anno · Domini 1868／黒船来航より十五年」

泣い声だして語り始める隆盛。なんか、アニメのオーディオ プーリングみたいだ。

「世は徳川体制より明治という新しい時代へと移り変わっていた。そんな中、維新政府の内部に天皇親政・祭政一致を主張、神道の国教化をはかる動きが生じ、神仏分離令が出される。これは、それまで神仏習合 つまりほぼ仏教とごちゃ混ぜのよつたな状態だった神社から仏教色を取り除くようにとの命令だったのだが、地域によっては曲解がなされ寺院・仏教的文化財などの破壊運動が勃発してしまう。これが世にいう廃仏毀釈であった」

「…………」

「うつわー、話難しそぎて途中で眠つてしまつたあ。それにつけても、隆盛なんかすごすぎくない？」

「でつ鳥居は？」

畠紗の催促にがらりと雰囲気を変えてくる隆盛。

「さあてさてさて、お立合い」

なんか、紙芝居屋みたいた。

「そんな時代の烈風に、我らが不動尊寺も例外はなく巻き込まれようとしていた次第でありまして（カカン 拍子木の音）時の和尚はどうしたものかと考え込んで、坊主頭に人差し指クルクル……ポクポクポクチーン」

「一休さんかよ！？」

「しかし、何にも思いつかない。そこに和尚の幼なじみサヨちゃん

「登場」

だから、一休さんかよ！？

「『あはん、寺がダメなら鳥居を立てればいいじゃない！？』」

サヨちゃん 何故、ちょっとマリ アントワネット風？

「かくして、サヨちゃんの助言に従い和尚は鳥居を立て『ここはスサノオを祭る神社だ』と云い張りことなきを得たそつな チャンチャン」

「なんか、すごいんだかアホなんだか分からぬ話ね」

アホなのは隆盛の脚色のせいでは？

「しかし、ほんとにそんなことで難を逃れられるもんなんでしょうか？」

たしかにかなり胡散臭いな。

「まあ百年以上も前のことだからなんとも云えねえが ともあれ、その後政府は国民教化に失敗、運動の嵐が去るも『まあ、鳥居もめでてえもんだしそのままにしどくか』と今日に至ると

「嘘臭い話ねえ」

「今思うと黎須さんに担がれたのかもな、オレ」

「だろうな。たまに虫も殺さぬ顔して、冗談云つたりするから始

末に終えなかつたもんなあ 父さん。

「それにしても、紛らわしいですよね」

「いんじやねえの」

オレは食後のアセロラジュースを啜りながら云う。

「日本人なんてほとんどが無宗教みたいなもんなんだし……願いが通ればなんでもいいみたいな 」

「けしからんつ！！」

突然、背後より怒鳴り声がする。振り向くと知らない女生徒が一人、怒りの形相で立っていた。

「それが仮にも聖職者の言葉かっ！？」

長身で、少しきつめだがかなりの美人。故に見下ろされているだけで萎縮してしまう。てか、なんでオレ、見ず知らずの人から怒られてんの？ぶつちやけ、いじめ？

「不破大智 ょもや、貴様のような軟弱そつな男とは……」「あのどじりさんで？」

オレは、一個目のフランスパンサンドに熱中している隆盛に助けを求めるべく、彼の肩を突つ突く。隆盛はパンを喰えたまま振り向き（認めたくないが、座高が恐ろしく違うためフランスパンはオレの頭上を掠める）、

「つおおつ、C組の高橋千佳子じやん」「知ってるのか？」

「ああ。ほら、近所にある玉串神社の娘」

口の中もぐもぐさせながら説明する。

「神社の？」

神社の娘だからオレのこと怒鳴るのか？これもさつき云つてた廢仏毀釈の一種？（百年以上前の話というのを忘れてこる）「いやあ～近くで見ても美人なのな。巫女さん姿が萌えるって評判で」

「貴様つ！私を愚弄する気かっ！？」

隆盛の言葉に牙を剥く高橋。

「してない、してない。綺麗だつて讚めてんだよ」

「それが愚弄してると云つのだつ！未熟なれど神事に仕える姿を美人だの萌えるだの綺麗だのとつ……」

怒っている割に隆盛の贅辞を全て記憶していくとは、あながち満更でもないとみた。

「貴様のような不良にそんな田で見られると思ひと虫酸が走る」

「不良？……オレ、不良かな？」

不安気に訊いてくる隆盛。

不良の定義はよく分からんが、まあ事情はどうあれ刺青してる高校生は世間一般では不良だらうな。普段はテピングで隠してるとはいえ。それに。

「銀髪つ！カラコン！不良以外のなにものでもなかろうがつ！？」

「いや、これ自前……」

隆盛はハ フ・アンド・クオ タ (バタ 入りマ ガリンのこ
とではない)。母親がどつかの白人種で父方の祖父もロシア人だつ
たか? 顔はほとんど日本人だからよく誤解されるが、銀の髪も青い
瞳も昔から。

因にオレは純粹な日本人だが不動尊の封印が解けて自身の靈力が
解放されると、瞳が赤く光つて瞳孔が変形するらしい(もしかして
先祖が妖怪とかだつたりなんかして……)。

そう云えば鬼灯姉妹も茶髪で色白だけど、出生はさすがに訊きづ
らいな。

「おまけにチャラチャラ飾りつけよって」

それは父さんの形見……。

オレは隆盛に目をやる。

彼の顔が 。

「校則違反以前に 」

「ほざいてんじや ねえぞつ!」

ガシャン

ブチキレました……オレ 。

目の前にあつたトレイやらなんやらを弾みで床にぶちまける。飲
みかけのアセロラジュースが零れ床に広がつていった。

赤色 オレの怒りみたいに……。

「人の事情も知らねえで 」

「 」

高橋千佳子が表情を崩さずオレを見下ろしている。隆盛は目を伏
せた。

辺りが静まり返り、他の奴らの視線が集まる。

居たたまれない気持ちになつて、オレは走つてその場を後にした。

放課後。

その日の午後は体育祭の練習だつた。実行委員の隆盛とはあれつ

きりで 。

「大智。おいてくなよ」

下駄箱で下履きに履きかえていたら、隆盛が駆け寄つてくれる。

「お前、実行委員があるんだろ?」

「式神代行ぶつちぎりつ！」

腰に手を当てふんぞり返る隆盛。何を、威張つてゐるか知らないが、だめだろそれは?

「いいのかよ?」

「いいの、いいの！やるべきことは全部すましたし。ハツ！オレつてばもしかしてスペシャル優秀なのではつ！？」

「はいはい

オレは適当にあしらい歩きだす。隆盛は慌てて靴を履きかえ後に続いた。

しばらく沈黙が続く。よそよそしい空気が流れていた。あるいはオレ自身が壁を作つていていたのかもしれない。

人通りが途絶えたところで隆盛が口を開いた。

「ありがとな。大智」

「…………」

ざらつとした気がした。

背中越しから聞こえてくるそれは本心からのものだと云わつてくれる。

お前にそんな言葉、貰つ謂れはない。

「何が?」

わざとらしく云つてみせた。

「さつきのこと……オレのために

「自惚れるなよ

オレは早口で答えた。

「あれはオレんちの法具をあの女がバカにしたからであつて、断じてつ うわつ！」

「うん?」

隆盛の方を向こうとオレが振り替えると、問題のある女、高橋千佳子がこっちに近付いてきた。

高橋は身を退く隆盛の横を通り越しオレの田の前にやつてくる。長身美人なだけあってやつぱりちょっと恐い。

「なつなんなんだよ？」

さつき怒鳴つた仕返しにきたとか？

オレは怯えながらも必死に虚勢を張る。

「あれはお前が

「悪かつたな」

「へつ？」

突然の謝罪。表情は堅いままだけ。

「すまなかつたと云つてい。さつきは少々頭に血が上がつていてな、愚かしい発言をしたと反省している」

「…………」

なんか すいせい、この女。普通、自分が間違つていたことに気付いてもこんな風に撤回できるものではない。オレ、謝ることすら苦手だし。君子なんたらかんたらつてこいつみたいなことなんか？

「お前の云つとおりだ。事情も知らずに見た目や表面だけで判断するべきではなかつた」

「はあ、まあいいけど

「そつちの えつと

高橋は隆盛の方に向き直り、暗に名を訊ねる。

「隆盛だ。上条隆盛

「そうか。すまなかつたな、西郷どん」

「…………」

一瞬固まるオレと隆盛。

ギヤグのつもりか？それにしては、無表情だし。いや、でも……。

「あつえつと、気にしてないで」わすよ

隆盛の中に流れるお笑いの血（？）が辛うじてノリで應える。

「ふつ」

鼻だけで笑つた。やはり、ギャグだったかよ。なんか、すいいぞ

高橋千佳子。

「えつとそれで、なんか用なのか?」

「私の父がお前に用があるそうだ」

「父?」

玉串神社の娘の父となると

「神社の神主だ」

「神主がオレになんの用?」

「仕事の依頼だ」

「えつ?」

「呪われ屋 それがお前の仕事だろ?不破大智」

そう云つと、高橋千佳子は歩き始める。

「ついてこい」

「あつああ」

神社の神主が寺の坊主に仕事の依頼?

ミステリアス これも、廢仏毀釈の一 種か? (意味不明)

「()苦労でした。千佳ちゃん もつ下がつていいでですよ

「はい」

高橋千佳子に案内され、神主さまが待つていた客間に通される。

娘は深々と頭を下げ部屋を後にした。

「さて」

「()の神主さま、高橋千佳子の父とするにはずいぶんお年を召しておられるような気がする。養子縁組か何かなのだろうか?

「()足労頂いて誠に申し訳ありません、法師さま。恐れながら、私が当神社の神主、高橋十蔵と申します」

神主さまは控えめな、それでいてはつきりと耳に届く声で云つた。しかも、オレの目を見て。初対面で隆盛とオレとを間違われないの

は珍しい。

まあ、IJの神主さまの靈力を考えれば見分けがついて当然といえば当然だが、IJして面と向かっているだけこの人が徳の高い祠官だといふことが分かる。

「自分は不破大智です。不動尊寺の管理をしておりますが、正式な仏門というわけではなく、一介の呪われ屋です。IJちは助手の上条隆盛」

「どーも」

隆盛はさつきからそわそわした感じで、氣の抜けたあいさつをかます。

神をも恐れぬ奴め！

「本来なら私から出向くのが礼儀」

申し訳なさそうに云う神主さまにオレは手で制する。

「いえ、今云つたとおり自分はそんな立派なものではないですし

それに仕事ならどんなところでも出向きます」

「恐縮です」

「それをふまえて申したいことが　　お見受けしたところ、神主さまのお力は自分より優れていらっしゃるかと。果たして自分が役に立つかどうか

「御謙遜を　　」

そう云つと、神主さまはおもむきある皺の一本一本を柔和に深める。

「力の量、重さ、各々違のはあれど、上質なるは得難く尊きもの」

「…………」
まあ、そうかもしけないけど　　讃められりやつた？

「それで十蔵さん、用向きはなんですか？」

さよろきよろしていた隆盛が本題を催促する。なんか、不謹な感じ。

「IJの神社で御祭神とさせていただいております真榦の尊つまり、御神木の神が枯れてしまったのです」

「なつ！」

驚愕する隆盛。

「いつですか？」

「今朝、娘が発見しました」

「まさか

「何をそんなに驚いてるんだろう。

「もつ、秋ですし 少し気が早くて枯れたんじゃ

て……」

神主さまと隆盛が絶句している。

あれ？ オレ、なんかまずいこと云っちゃった？

「あつあの

神主さまの額に脂汗が

「大智……」

隆盛が小声で云う。

「榦つてのは常緑樹 つまり一年中枯れない木の総称だ

マジ？

「アハハハハ、冗句です冗句！ イツツア仏門冗句なんちつて「さつき自分で仏門ではないとか云つてただろ？」

黙れ、隆盛。

くそぅ、またしても赤つ恥を 普通知らないって、そんなこと。いいじやん、知らなくても生きていけるしさ。

生きることは恥をかくことだ！（大智、魂の言い分け）

「そつそれで 枯れたつて云うのは病氣とか寿命とかじゃなくて？」

「はい、じ覽になつてください」

そう云つて神主さまは立ち上がつた。

「こつこれは ！」

オレは驚愕で思わず後退りする。

オレの両腕なんかじゃ到底足らない巨大な幹。元の姿はさぞや立派な御神木だつたのである。それが今やみるも無残に枯れはてている。

そして強大で悍ましい邪気が蠢いている。辛うじて、御神木の靈力でそれは押さえこめられているようだが。

「こんなもの、もはや呪い云々の騒ぎじゃないですよ」

オレは呟いた。

「こんなもの一朝一夕でできる代物じゃないはず。気付かなかつたんですか？」

「お恥ずかしながら 今日、この枯れはてたお姿を拝見するまで……」

「たぶん、御神木そのものが邪気を封じてるからだ。だから、大智だつてこんなすげえ邪氣があるのに田の前に来るまで気付かなかつただろ？」

「そう云つとか。隆盛は恐らく薄々感じていたんだ。だからこそ、さつきからどうも落ち着きがなかつた。

「いつたいじうして？」

「近付くなっ！」

原因を探るべく御神木に寄りつとしたオレを隆盛が制する。

「あてられるぞ」

「でも

「オレが調べる」

そう云つて隆盛は一の腕の手ピングを剥がし、真言の刺青を曝す。

そして右手を翳した。

「光明真言五色光印か……」

「おん あぼきや べいろしゃ のう まかぼだり まに はんざま
じんばら はいばりたや うん」

隆盛の靈的防御力がどんどんと高まつていいく。凄いぞ これ

も刺青の効果なのだろうか？

隆盛はじりじりと御神木に近寄つていぐ。

「くつ」

途中、隆盛の顔が苦痛に歪んだ。高度な結界並みの防御力を発揮しても、この邪気を完全に防ぐことができないのか？

隆盛が御神木の幹に手を触れた。ジュッと何かが焦げるような音がする。

「無理するな隆盛！」

「しつ！」

隆盛は空いた手で黙るよう口に手を当て、徐に顔を幹に近付ける。

「これかっ！？」

そう唸つたかと思うと、バックステップで御神木から飛び退く隆盛。

「大丈夫か？」

「原因が分かつた」

「なに？」

「本當ですか？」

オレと神主さまの問いに隆盛は重厚に頷いた。

「ああ、原因は丑の刻参りだ」

「なんだつて！？」

丑の刻参り 丑の刻に五寸釘で藁人形を打つ。あるいは日本

で最もポピュラ な呪いの方法かもしれない。

それがどう関係しているのか。

「この御神木で恐らく万に匹敵するほどの丑の刻参りが行なわれている。釘穴があつた」

「なつ！」

「お前も知つての通り丑の刻参りなんてそうそう成功するもんじゃない。だが、微かなりとも怨念だけは釘なんかに込められているわけで、その念が少しずつ少しずつ蓄積していくことになつたんだ。これまで御神木の靈力で押さえられていたが、なんらかの理由か あるいは御神木そのもののキャラを越えたかで

」

「そんなん！神主さまは、丑の刻参りが行なわれていることをご存じでらしたんですか！？」

オレが詰問すると神主さまは眉間に皺を寄せ目を瞑る。

「お恥ずかしいかぎりです。丑の刻参りが頻繁に行なわれていることは薄々感じておりました。ここも、身内でやっているような小さな神社ですので夜警にそれ程尽力を注げず。警察の方々に警邏をお願いしたのですが、それでも後を絶たなかつたようだ。しかし、まさかこんな自体を招くとは

「…………」

神主さまは苦虫を噛み潰す。

「たしかに丑の刻参りでこんなことが

もともと神社は鳥居などの結界がある故、丑の刻参りなどよほど戦闘に特化された靈力を持つものでないと成功しないだろう（真に正式なやり方の文献なんかほとんどないだろうし）。それでもまことしやかに語られている伝説が人々の怨念を駆り立て御神木を枯らしてしまはうはめに。

「くつなんてことだつ！こんな立派な 何百年もみんなを見守

つてきた御神様が……」

「大智 こいつはいへり何でも無理だぞ

「分かつてる！」

こんなものの呪咀移しなんかしたら、呪い封じをする間もなく一瞬でオレなんか命を落としてしまう。いや、それだけで済むならまだいい。下手をすれば、怨念がオレの体を食い破つて町中に広がってしまうかもしれない。

「…………」

なんとかならないのか こんな素晴らしいものが朽ちるのを黙つて見てるしかないのか？

降魔の利剣で いや、駄目だ。アレは邪氣だけでなく不動尊以外の靈力なら全て喰らい尽くす代物。斬つたら御神木の靈力も根

「」を覗き見らつてしまつ。

「」

「どうにもならないのか」。

「隆盛」

「この御神木はもう駄目だ。徳の高い祠官を集め然るべき儀式、更に結界を何重にも張り燃やしてしまつしかない」

「そのようにさせて頂きます」

神主さまは深々と頭を下げた。オレもそれに倣う。

「お役に立てませんで」

「いえ、こちらこそ不快な思いを」

「結局、役立たずか?」

高橋千佳子だ。

制服から巫姿になつてゐる。少し離れたところから蔑みの視線をオレに向けていた。

「ふん。呪われ屋などと大層な名目もただの大風呂敷」
「千佳ちゃん、失礼ですよ!」

「ちつ」

高橋千佳子は舌打ちをして走り去つていった。

「申し訳ありません」

「いえ」

彼女の云つたことは本当のことだ。

「あの娘にとつてこの御神木さまは親のようなものでして、それを失うことに混乱を押さえきれないのでしょうか」

「親ですか?」

「はい。……お察しの通り、私は千佳子の本当の親ではありません」
「思つた通りか。

「千佳子は今でこそ普通に暮らせるようになつておりますが、子供の頃は持つて生まれたESPを制御する術を知らず」

「……ESP……」

PSPはプレイ・ス ション・ポ タブル。GPSはカ ナビ。

「大智」

隆盛が腰を屈めて耳打ちをしてくる。

「ESPつうのは超感覚的知覚 テレパシ とか靈感とかのこ
とだ」

「…………」

大きなお世話、ありがとう。

「その能力のため、両親から遠い血縁である私どものところへ

捨てられた子供か 。

「気を付けて接していたとはいえ、本当の両親がいない寂しさはな
にものにも代えがたいものなのでしょう。その寂しさをこの御神木
さまが語りかけて慰めてくれるのだと」

「そうですか」

胸が潰れるような気がした。

「さつきの話、本当かな?」

帰り道。先を歩いていた隆盛の背中に訊ねた。隆盛は立ち止まり
振り返る。

「話つて?」

「木が親 語りかけて慰めてくれる

「うーん」

隆盛は少し考え込んでから云つた。

「色んな可能性があるが、最近の研究では植物にも感情があるって
いうし、あれだけの靈力を持つた御神木だ。知慧があつても不思議
じゃない。千佳ちゃんは特殊なESPがあるわけだし、その声を聞
き取ることができるんだろ?まあたぶん、そう云うのが神様とかシ
ヤマンとかの正体つてことだろ?」

「だったら 」

「親だな それは……。親なら救いたいだろうな。何に代えて

も。どんな代償を払つても」

「…………

隆盛は応えない。ただ真つすぐオレを見下ろしている。

「優先順位とか云つのか

そういうの」

いつときの静寂。

やがて、隆盛が口を開く。

「何かをすれば、誰かはそれに共感し、誰かは反感を覚え、誰かは何も感じない」

当たり前のことだけど

「真理だな……」

「人はみんな大人になる。大人つてのはそういうことを考えながら選択して生きていぐ。たとえ後悔しても、どれが後の最善なのかを考え続けて」

オレは隆盛から目を逸らした。そして、相手に聞こえるか聞こえないかの小声で呟く。

「お前は向よりもオレの最善を選んでる。自分のことよりも

「…………

それは何より父さんの意志を尊重してること云ふこと。

オレの意志よりも

3

「…………

「何もできないのか?何かないのか?あの御神木を救う方法が

。

眠れない。

オレは深夜テレビを付け放しで、居間の畳の上に寝転がつていた。

「うん?」

誰か一階から下りてきた。居間にやつてきたが、ここにはどうち

だ？さすがは一卵性、見ただけじゃあ区別つかない。

「あら法師さま、まだ起きてたの？」

凧紗か

。

「お前こそ」

「ちよっとお腹空いちやつて。夜食作るけど法師さまも食べるでしょ？風音のよりはあれだけど、それなりに美味しいわよ」

「ああ」

生返事する。

ほどのくして、凧紗が焼きうどんを作つて持つてくれる。それは、彼女の云う通りやうに美味しかつた。

「（こ）馳走様」

「御粗末さまです」

凧紗は皿を流しに持つていくと、また戻つてきて居間に座り込んだ。

いつときの間、一人でテレビを眺める。

そして番組の切りがいいところでオレはテレビを消した。

「眠れないのか？」

「あ～……まあ　　ね」

オレの問いかに濁したように答える凧紗。

「辛いのか？」

「ふふ」

凧紗は自嘲氣味に笑つて、

「まあ　　布団に入つてね、目瞑つて、自分の馬鹿を加減に嫌気がさして、みんな同じよねとか強がつたりして、がんばらなきやつて前向きになつて、どうすればいいのか途方に暮れて、風音はとてもいい娘だなとか、法師さまには感謝してるとか

遠い目をしてぼつぼつ語る。

「まつ何にせよ、がんばらなきやね」

「ゆつくつでいいからな」

「…………」

「走ったところで着くのがいいところとは限らない。歩いていれば、綺麗な景色を見ることがだってできるかもしない」
都合のいい言い分。自分は走り続けなきや潰れてしまいそうで怯えてるくせに。

「自分のペースでがんばれ。お前たちがオレに嫌気がさすまでは面倒見てやるから」

「ありがとう」

凪紗は俯いて囁いた。

「ねえ、ついでに訊いてもいいかな?」

「ん?」

「云いたくなかったらいいんだけど、今日の昼休み……どうしてあんな風に怒ったのか」

「どうして?」

「法師さまはさ。正直我慢だけど、いつもどこかギリギリのところを弁えてる気がする。それでもあんな風に怒ったのはホントに辛かつたんだろうなって思うから」

「…………」

オレは逡巡する。

そして、意を決して口を開いた。

「隆盛が付ける装飾品、オレの親父の形見だったから。それに、アレはあいつの靈力過敏症の保護のやつだし。そういう、人のデリケートなところを刺激することに頭きた」

「そう」

凪紗はほんの少しだけ寂しそうに頷いた。

「…………」

違う。それは建前だ。

凪紗はそれに気が付いてる。

「嘘だ。ホントは違う」

「…………」

「ホントはあの時の隆盛の顔にすげえムカついたから

「うん」

凪紗は頷いた。今度はほんの少しだけ嬉しそうに。

「分かつてたのか?」

「まあ。だつて隆盛さん 普通の人はあんなどき、あんな風に笑わないもの。ちょっとだけ寂しそうで、なのに自尊心で満ちたみたいだ。その後すぐだつたから」

隆盛があんな顔をする理由は知つていて。というか、癖みたいなものだ。ホントに辛いくせに、我慢ができたからオレの父さんがきっと讃めてくれていいのだと思い描いているのだ。

父さんの口癖 『大智を頼むぞ、隆盛』それを聞くたびに隆盛は嬉しそうに頷いていた。父さんの信頼を得ている隆盛にオレは嫉妬している。

父さんが生きてた頃も、今も、隆盛は心底オレのために生きている。父さんの信頼を得るために。父さんにもオレは嫉妬している。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「う~みゅ」

オレは食卓に顔を突つ伏せた。

「時間がかかるよな。オレも」

「ふふつ」

凪紗は心底可笑しそうに笑つた。

「お互いこれからみたいね」

「はあ」

ホントにその通りだ。

もうすぐ、父さんの命口がやつてくる。

深夜、巫女姿の女が朽ちた御神木の前に佇んでいた。

*

「どうして」「

巫女は茫然と苦境を口にする。

「いんなことに」「

「この巫女、少し変わった靈質をしている。これなら使いものになるかもしない。

まだまだ、僕もつきに見離されていないよ」

「もう、どうにもならないのか?」

「そうとも限らないよ」

「えつ?」

巫女は驚きを洩らす。彼女からしてみれば突然、人の声が聞こえたように感じたのだ。僕が御神木の幹を挟んで彼女の反対側にいるから。

「誰だ?」

彼女はきょろきょろと声の所在を探す。

「僕が誰かはそう問題ではないよ」

「何?」

「ふん、問題なのは僕がこの御神木の救う方法を知っているかもしないということじやないか?」

「救う方法だと?この私を謀るつもりか!?」

さつきまで打ち拉がれていたくせに、人がいると分かつたとたん冷厳となるか。ずいぶん勇ましい巫女だな。

「だとしてあなたに何かデメリットがあるのか?」

「何だと?」

「だつてそうでしょ?この御神木は何もしなくとも、もう朽ち果てるのみなんだから」

「…………」

何かを考えるよつに沈黙する。

そして、

「どんな方法だ?」

ほら、乗ってきた。

「教えてやつてもいいけど」

「僕は少しだけ焦らしてみる。交渉においてすぐに要求に応じるのはかえって相手に不信感を抱かせるから。

「何か望みがあるのか？」

「いや、べつに。ただ、覚悟があるのかと思つて」

「覚悟だと？」

ふふ、半端にプライドが高そうな奴は操りやすいな。

「そう、覚悟。何かをなすにはそれなりの代償が必要でしょ

「覚悟だと？」

「…………」

「「」と今回のように大変な「」となると、やつぱりそれなりの代償が

あなたにその覚悟があるのかと思つてね」

「悔るな！不肖、この高橋千佳子、もとより半端な覚悟など持ち合わせてはおらん」

ほらね。

「ならいい。方法は簡単なことだよ。あなたがこの呪い、祓えばいいだけのことだ」

「ふん、何を云いだすかと思えば

「巫女は嘲る。

「未熟を盾にするのは恥ずべきことだが、これだけの邪氣を浄化するだけの力を持つているのなら最初からやつている」

「誰も浄化しろとは云つてないよ。ただこの御神木から祓えばいいと云つているんだ」

「なー？」

「あなたはどうやら、かなり優れた精神感応能力を持つているようだね。それを応用すれば、この御神木の意識にアクセスして邪氣を封じるのを止めてもらひう。それで自然と邪氣は外に流れ出て御神木はいづれ自然治癒するだろ？つまり救われるってことだ」

「バカなっ！これだけの邪氣が放出されれば下手をすれば町中が呪われてしまつぞ」

どうやら知識がないわけではないらしい。

「ははは」

「？」

「そう、もしかしたら町中が呪われる
なんて素敵なことだらう。

「色んな人が傷つき、大勢の人々が不幸になるかもしねない
なんて素敵なことだらう。

「さあ選択の時間だよ。あなたの大切な御神木を見捨てるのか

代償を払つて救つてみせるのか
夜の闇はいろんなものを鈍らせる。

そう、意志薄弱に選択を

代償を払つて救つてみせるのか
夜の闇はいろんなものを鈍らせる。

そう、意志薄弱に選択を

代償を払つて救つてみせるのか
夜の闇はいろんなものを鈍らせる。

「覚悟を見せてみせてみるがいい

「うつぐ……」

巫女の体は震えている。この闇の中において見えるわけないが、
空気を伝つてありありと感じることができる。

それだけ悩んでいる。悩んでいるところとは、交渉の仕方によ
つてはどうともなるところだ。

「やはり悩むか。まあそれが普通だね」

「…………」

「猶予はある。明日の三時までに決めてくれればいい。覚悟ができ
たら、そのとき儀式をやつしてくれ」

「三時？なぜそんな昼間に」

食い付いてきたか。ほほ、交渉成立だな。

「僕にも色々事情があるんだ。ギブアンドテ クつていうだろ？情
報提供料と思つてくれたらいい」

「しかし、そんな時間だと家のものに止められる」

「大丈夫。僕、眠り香を持つてる。あの神主さまには眠つてもらお
う。なに、心配はいらないよ。お香はそれほど害はないし、神主さ
まほどの靈力があればこれだけの邪氣にあてられても死にはしない
だらう。きみはどうかは知らないけど それは覚悟の問題だか

らねえ」

「…………」

うまくいった。

人の心 中々、おもしろいものじゃないかよ。

4

「じゃね、法師さま」

「それじゃあ」

鬼灯姉妹と下駄箱で別れる。

「ふわ～あ」

オレは大きな欠伸をした。

「なんだ大智、寝不足か？」

「うみゅ」

「寝不足はお肌によくないぜ」

人の美容にまで気を配らんでも、隆盛。

「あはん？」

「じつこの声は…………。オレは恐る恐る振り返る。

出やがつたな！変態ボディコン女教師・渡部りか子つ！…！「セクハラは愛のワン・ツウ レッスン」（ キヤツチコピ ？）

「おはよう、りか子ちゃん」

「おはよう上条くん。おはよう、不破大智くん？」

「…………」

「なんでオレだけフルネーム どうでもいいけど。

「ふみゅ～あ」

オレは挨拶する代わりに大きい欠伸をしてみせた。

見るがいい、この崩れた間抜け面をつ！そして、幻滅しきつ！

「ふふつカワユイ欠伸い」

「ああ、可愛さMAXだぜ」

くつ隆盛まで！

恐ろしや、痘痕も笑窪 　　「うなつたら、鼻糞弄つたり屁をふつたりしてみるか？」

いや。「こつらなら、だらしない」と「ひも素敵とか、フローラルの香りがするとか云いだし兼ねない。

あきらめよ。

「寝不足っちゃん寝ないと肌に響いちゃうんだー。」

隆盛と同じことを

。」ちとち御神木のことが気になつて眠

れんかつたんじや。

「しかし、あれだな。りか子ちゃんはいつも元気つづか職とかけつこうストレス溜まんじゃねえの？」

「まあね

体をくねらせ肯定する渡部。

はい、嘘。この女にストレスがあるなら、日本全国のサラリーマンの方々はすでに胃潰瘍で絶滅しているはずだ。

「たしかに、家に辿り着いたときはもうクタクタで死んじやうつて感じだけど」

死んどけ。

「半身浴して、歌うたつたり、ワイン飲んだりしたら干乾びてた心もフルフルリン、生き返つちゃうのよ？」

干乾びときや いいのに 　　。生き返んなよな、たく ん？

「生き返る？」

オレはぼそりと呟いた。

「？」

「大智？」

二人が怪訝そうに見下ろしていく。

「生き返らせねばいいんだよ、隆盛ー。」

「はつ？」

「だから、御神木の靈力を高めてやるんだ。そうすれば、御神木自身があの邪氣を浄化できるかもしない」

「まあ、理屈じゃそうかもしねえけど実際どうやるんだ？」

当然の疑問を口にする隆盛。オレはピスをして呟く。

「オレが小さいころな

」

「今も十分ちつさい」

下からチョップ！

「うげつ

「黙つて聞け！」

「はい」

「オレが小さいとき、熱とか靈力が激減したときとか親父がまじないをしてくれて、それがすっげえ効果あつたんだけど」「ほう どんなんだ？」

オレは田を瞑り記憶の糸を手繰る。

「うーん、詳しいやり方は忘れたけど、たしか複雑な印を結んで、レンゴンゲンテンリティなんたらかんたらつて呪文を唱えてたよつな」

「おい、それで伏羲の

」

「知つてんのか？」

「いや まあ

」

歯切れの悪い隆盛。

「ただそれつて道教の秘術だつたよな

「道教？中国の？」

「ああ、でもなんで道教の秘術なんかを黎須さんが？分けわかんねえぞ不動尊寺

」

たしかに。修驗道とかなら密教と道教が交ざつて聞いたことあるけど、父さんが葬られてるのつて密教家だつたよな。ほんと分けわかんねえな、うちの寺。

「とにかく、救える可能性が出てきたんだ。家に帰つて文献とかないか調べるぞ」

「ああ

戻ろうとするオレたちに渡部が、

「一人とも帰つちゃうの？授業は？」

と聞いてきた。まだいたのかよ。

オレは懐から護符を取り出し、

「のうまくさんまんだばざらだんかんつと

護法天童を出す。隆盛も同様に。

それを見た渡部は吃驚喜ぶ。

「きやつすごい！？」

カツカツカツ、尊敬しろ。尊敬して跪いて消え失せるがいい。

「いいなあ。ほしいなあ。このツチ・フ」

だつ 己れ、この淫乱。神聖な護法天童おおー！てか、抱き

付いてんじゃねえ！

「お胸、大きくて気持ちいいでちゅ」

護法 貴様あ！

「オレの顔してそんなこと云うな！」

*

覚悟はできたか 御巫女よ。その意志がこの僕に誘導されたものだと気付かずに。

「ベストポジションだな」

僕はちょうど御神木が臨める位置にあるマンションの屋上から双眼鏡を覗いた。

巫女は玉串を手に御神木の前。表情は険しいが、まあ大丈夫だろう。

「後は御陰勇太がくれば」

さつき奴の下駄箱の中に入れてあの神社に呼び出した。偽造のラブレタだ。ちゃちな手だが、あの万年脳味噌バラ色小僧なら有効だろう。

「ほらな

御陰勇太が嬉しそうにスキップなんぞしながら境内に入していく。

「さて時間だ」

巫女が動く。

玉串を振りながら、祝詞を唱え 。

「掛巻も畏き真神の大神 」

僕は巫女の唇に合わせて口ずさむ。せめてもの弔いだ。優しい優しい国つ神よ。

「祓戸大神たちの大前に、高橋の巫女、恐み恐みも

さあ、祭りの始まりだ。

祓い給え、清め給え、幸はへ給え

そして、

「呪い給え」

この僕のために。

5

「な、まだかよ」

文献や資料なんかを調べ初めてもう何時間も立つ。いいかげんムカついてきた。

「そう、急かすんならちつたあ手伝ってくれてもいいだろ」

「うつ」

あははは、最初の内はがんばって調べてたんだけど、すぐにへばつて隆盛にまかせつきりだつたりして。

「だつてえ、オレ小さい字とか読んでると眠くなんだもん」

「はいはい ん？」

隆盛が持つていた資料に顔を近付ける。

「あつたのか！？」

「ああ、たぶんこれだ。先天八卦印 八卦靈符などを用い、それに靈的な力を与え、災いを鎮めたり、身を守り、生命を保全する力を増大させたりすることができます

「それだつ！」

この秘術を使えば或いは御神木 자체を復活させることができるか

もしけない。

「しかし、いくら道教に仏教や陰陽五行などの流れを汲み取った部分があるとはいえ、外国の秘術が使えるのか よしんば、使えたとして道教の印は複雑だからな。よく調べないと」

「う~みゅ」

「いやいやじけいじけい調べたりするの苦手なんだよな。う~でもそんなこと云ってる場合じゃねえか……。

「貸してみ。う~ん、八卦つてことは方位とかも関係していくのかな?」

「どうだらうな……ただ 」

隆盛の言葉が急に止まる。オレは怪訝に思い訊ねようとして、「どうし なつ!?」

オレも異変に気付く。

「邪氣が!」

「ああ、これは 」

御神木の ！？

突然、ものすごい邪氣の気配を感じた。あの御神木の中で蠢いていたあの怨念の 。

オレたちは急いで玉鼎神社へと向かう。

「うつあ、これは 」

邪氣が神社の境内いっぱいに溢れだしている。辛うじて鳥居などの結界に阻まれているが、いつそれが破られ町中に洩れ出すか分からぬ状態だ。

「とにかく行!」

「待て大智」

境内に侵入しようとするオレを隆盛が止める。

「気休め程度だが、結界を張る

おん きつきり ばざら

なんだ? その印と真言……高度な結界なんだうけど なん
で、そんなの知つてんだよ、隆盛。

「正式な方法じゃないけど、ないよりマシだろ。オレからあんま離
れんなよ大智」

「ああ」

ほんとこいつなんでもありだな。腹立つの通り越して呆れるぜ。
「行こう」

オレたちは改めて境内に侵入する。

「くつ」

予想以上の邪氣だ。心なしか体が重くなつたような気がする。結
界を張らなければ確かに危なかつたかもしれない。

御神木に近付くにつれますます邪気が強くなる。隆盛はさつきか
らなにかしらの印を結び真言を唱え続けている。

「あれは」

御神木の前に高橋千佳子がいた。彼女はひたすら玉串を振り続け、
その度に御神木から邪気が流れ出ている。ESPがどうのこうのと
只者ではないと思っていたが、まさかこんなことをしでかすことが
できるまでの能力者とは。

「 ¥ \$ € £ % # & * @ §

「ん?」

なんだ? どこからか、高橋とも隆盛とも違う声が聞こえてきた。

「ゆつ勇太くん! ?」

すこし離れたところに御陰勇太が立つていてなにやらぶつぶつ咳
いている。

「どうしてここに?」

「 @ § # £ ÷ ×」

勇太はオレに気付いて、何かを口遊みながら（隆盛たちの声で聞
こえない）ピースをしてきた。

「.....」

嘘つだろ? なんで勇太の周りだけ邪気がまったく通つてないんだ

?数日前にあつたときより更に靈力上がりつてゐるし。『男子、三日会つてなかつたら田ん玉こすつて見とけよ』ってんなアホな。いや、今はそんなこと気にしてゐる場合じやない。

「おい、止めろつ高橋！」

オレの呼び掛けに、しかし高橋は一心不乱に玉串を振り、祝詞を唱え続ける。

「祓い給え、清め給え、幸はへ給え

「高橋

汗だくになり、もはや周りの邪氣にあてられ、ボロボロになつてゐるにも関わらずそれでも必死で御神木から邪氣を祓い続けている。

「くはあ祓い給え、ううあ清め給え、幸はへ給えい

歯を食いしばり、氣力だけで地面を踏みしめ、戦つために田を剥いている。

救いたいんだ……何としても御神木を 親といつものを

。たとえ、どんな犠牲を払つても たとえ、後になつてどんなに後悔しても 田の前の たつた唯一の存在のために

「おつオレは

「恐い

邪氣塗れのこの空間の中で、何かに置いてきぼりに去れたような気持ちになつて体が震えてきた。

逃げ出したい。

「オレは

「止められるのか

。親を救おうと必死に戦つてゐるこの女を

止められるのか。

「何のために

オレは何のために戦つてゐんだっけ?

「うう

頭が混乱してきた。

邪気が

邪氣に

「大智つ……」

「えあ！？」

隆盛？

“じれが後の最善なのかを考え続けて”

“自分が生きたいように生きろ”

“オレはお前のこと思つて云つてるつて”

“見守つてるからな、がんばつて”

父さん

「そう だつた」

“お互ひこれからみたいね

法師わま

「全力をつくすつて

「踏張らなきやいけない

明日の自己満足のために

！
「強くなるつて決めたんだ！」 のつまく やらばたたぎやてい

びやく サラバボッケいびやく やらばた たらた せんだまかろ
しゃだ けん もや もや もや も わいばぎきんなんうん たらた か
ん まん

火界呪の真言に伴い左手の金剛杵から青と黄、一本の紐状の光が
飛び出してくる。

「縄索 すげえ具現化された不動金縛りかよつー！」

驚嘆する隆盛。

「くつ」

だが、力不足だ。本来なら青・黄・赤・白・黒の五本を撲つた索
条が具現化されるはず でも今のオレの靈力では一本が限界だ。
「のうまく サンマンだ ばざらだん かん 我つあまねく金
剛に帰依す。大憤怒尊よつ 一切の禍を括り給えつ！」

青・黄、一本の光が境内を駆け回り、邪氣をオレの手元に収束さ
せる。

「うつうつ」

邪氣を縛り付けることに成功した。これで一時的でも邪氣が町に

溢れる心配はなくなつたが……。

「ちつ」

駄目だ。縛るので精一杯で、身動きが取れない。

「隆盛！」

「ああ」

邪気の蔓延がなくなり結界を張る手が空いた隆盛はオレの指示よりも先に動いていた。

「ちつと痛いが勘弁しろよ！」「うう」

高橋千佳子の鳩尾に拳を打つ。高橋は気絶したのだろう、がっくりとなつて隆盛に支えられた。

「なつ！？」

高橋の祓を止めたのに、御神木から邪気が流れだすのが止まらない。

「慣性か！」

隆盛が眉間に皺を寄せ呟く。

慣性？勢いが付いてるからつてことか？

「くつまずい」

「のままじやあじり貧、いすれオレの靈力が尽きたらおしまいだ。御神木に押し戻してみるか？いや駄目だ。ただでさえ御神木はすでにボロボロだつたんだ。逆流なんかに耐えられるはずない。』

『ありがとう……小さき法師』

「えつ？」

隆盛に支えられてだらりとなつている高橋の口だけが動いた。

「まさか御神木？」

御神木が巫女の体を介して語りかけているのか？

『私を救うために懸命になつていただいていること大変有り難いと思う。でも、もういいのだ。このままではたくさんの犠牲がでてしまう。私はもう十分に生きたから』

「なつ？なんでそんなこと？」

神様つて云つたつてもとは植物 それなのに入間を庇おうと
いうのか

「どうして人間のために犠牲に？あなたをこんな風にしてしまった
のは人間なのに。種族の違うもののためにどうして？」

オレは御神木に疑問をぶつける。

『そう 私は人間のためにこうなったのかかもしれない。人間の
弱さと強さが私を蝕んだのだ。それは心苦しい。でも、それ以上に
私は人間に愛されてきた。ただの木でしかない私を神と崇めてくれ
た。私がこれだけの靈力と知慧を持てたのは人間が私を尊きものと
祭つてくれたからに他ならない』

「真神の尊」

『その名も人間が付けてくれた。何百年もその名で親しんでくれた。
そしてこの娘。千佳子は父母とまで思つてくれた。この娘が私を守
つてくれようとしたように、私もこの娘を この娘の未来を守
りたいのだ』

「…………」

オレは唇を噛む。

「それが どれが後の最善なんだよ！？」

「それはあなたの我侷だ。彼女はそんなこと望んでない」

『その通りだ。私の我侷 聞いていただけるか？』
くそう。

「おん」

邪氣を逆流させる。

ピキピキピキ

御神木に蟻が入つていく。

「恐るべき大忿怒尊よ！我を喰らいて刃となせ」

右手の金剛杵から刃が飛び出す。

「のうまく さんまんだ ばざらだん かん 金剛尊よー」

「これでいいのか？本当にいいのか？」

『ありがとう』

御神木の声。穏やかで、なんか父さんみたいだ。

「我が力を解き放て」

オレは刃を御神木に突き立てた。

ビシバシビキ

邪気が消滅した。御神木の靈力も

ビシ

縦に大きく蟬が入り、やがて御神木はバラバラになつて崩れ落ちた。

すでに生命を保全する力は失われていたんだ。靈力だけでその身を支え続けていて、それも今、オレの手で消え失せた。

「…………」

木の破片が散乱する中、夥しい数の鋸びた釘が姿を現す。これが、人間の犯した愚考の象徴。

こんなもののために。

「ご…………御神木さまは…………」

高橋千佳子が目をさます。崩れ落ちた御神木を目に、彼女も同じように地面にへたり込んだ。

「うつ…………うつ…………うわあ…………」

嘆き。予想していたこと。それでもオレの胸は潰れそうで……。

「ちくしょう…………うつ…………ちくしょう…………」

彼女の涙を前にして、『もしかしたら救える方法があつたかもしないのに』などとは口が裂けても云えなかつた。

*

「ちい」

離れたマンションの屋上から全てを傍観していた僕は軽く舌打ちをした。

「まあいい」

町中が呪われるという大望は消え失せたが何百年も生きた国つ神

が呪いで朽ち果てる姿を拝むことができたのだから。

「それより問題なのは

「

御陰勇太。奴の靈力だ。

あれだけ強大な呪いの直撃を喰らってもびくともしない防御を開できるとは もはや呪いそのもので御陰勇太を葬るのは難しけ

いか

「厭

「

僕は崩れ落ちた御神木の残骸に着目する。

「あれを使えば或いは

「

フフフ、これからだ。待つてろよ、御陰勇太。

呪われろ 僕の快樂のために

。

シケンス

深夜の御陰邸。

いつものように勇太の部屋にはキボードの音が静かに鳴り響いていた。

『乾闥婆 ていう話。どう?おもしろかった?』

『夜叉 御神木が自ら犠牲にしてねえ。ちょっと感動かもね』

『緊那羅 うんうん』

『天 オレはどっちかっていうと町中呪われるつてのが見たかったかな』

『乾闥婆 まあボクもそれはちょっと興味あつたけどね さすがにあれだけの邪気が蔓延しちゃつたら みんな肅正されちゃうだらうからねえ。町ごと』

『天 蝅の王に?それとも『進化の指針』かよ?』

『夜叉 はつきり明記しないでくださいよ。恐れ多いですよ』

『天 悪い悪い』

『乾闥婆 まあなんにしても、まだまだ楽しめそうだよねえ。ヒロ

くんで それじゃあおやすみ

勇太は静かにノ トパソコンを閉じた。

そして、椅子の背にもたれ掛かり天井を仰ぐ。

「遊んでいるけど本懐をふざけているわけじゃないんだよ」

「獨り言だが、まるで何かに語りかけているように勇太は云つた。
「蠅の王は尻尾をつかませない。アシハラは香神と共に見事に裏切
つてくれたし。黎須の息子にいたつては使いものにならないからね
え。だからこうやつて遊んでたら彼女の方からひょっこり現
われるかも知れないだろ?」

少しの間。まるで相手の応答に耳を澄ませているように。

「うん 大丈夫。僕は裏切りはないから 『進化の指針』

金神さま

勇太は目を瞑る。

しばらくして、

「うーん、まあ呪われぼっちが使いものにならないってのは嘘だつ
たりなんかして。そんなこと思つから今夜も眠れない」

いつものように口遊んだ。

つづく

ヒロトカゲ～生える腕～

1

登校中、突然凧紗の足が止まった。不審に思い振り返ると彼女は下を向いてなにやらぶつぶつ呟いている。

「どうした？ 凧

」

「つるさいつ！」

オレの呼び掛けに俯いたまま怒鳴る凧紗。風音の問いにも、「どうなさいたんですか？ お姉さま」

「ほつといつ！」

癪癩に答えた。よく見ると凧紗の体は小刻みに震えている。根源的な絶望に曝されながら、それでも押し潰されまいと耐えているかのように。

「いつたいどうこうことだ？」

「大智、これは……」

「ん？ ああ、そうか……」

隆盛の指摘にオレは気が付く。

「この辺り、かなり微弱ではあるが邪氣の気配がする。それに触発され凧紗の中の呪いが爆発的に増大したのだ。

「おん あぼあや べいろしゃ のう まかぼだり まに はんじま

」

オレは光明真言を唱え周辺の邪氣を浄化する。

すると凧紗は正気に戻つたらしく、

「わつ私

」

顔面蒼白になつてオレの顔を見た。

「「」めんなさい

私

」

声が震えている。呪いの責任まで自ら背負いこむつとして。

「私……ごめん」

「お前が謝る必要ない」

オレは凪紗に寄り彼女の震える手を取る。

「お前が悪いことなんて一つもない」

恐らく凪紗の方が風音より纖細なところがあるので。だからこそ呪い封じに綻びが起こりやすい。たつた一人だけの家族、その姉としてのプレッシャーからか。

「ここにいる全員、凪紗が頑張つてることちゃんと知つてるから」「うん」

凪紗は小さく俯いた。

「今日はもう帰つて休もう」

オレは護法天童を出してから、そのまま凪紗と一人で寺に引き返す。

「…………」

それにしても最近なにかおかしい。

呪いの吹き溜まり、邪氣、負の靈力の淀みとでもいうのか、そういつた場所は昔からあつたが、最近それが急増している気がする。

小学校でのこともそうだ。

高橋千佳子を言葉巧みに誘導したといつ子供の声。
御陰勇太。偶然か? それとも。

*

「なるほど これならどうにかできるかもしねない」

僕は“YUA”からの返信メールを読んで呟く。

そして、僕も相手にメールを返す。

『いつも、ありがとう。ほんとうに感謝しています』

文字ではいくら返しても足りないほどに。

僕は“YUA”が何ものかは知らない。一年くらい前、見ず知ら

ずの彼女から僕にメルが届いた。

それは僕の力の使い方を教えてくれた。そつ、今日の僕があるのは彼女のおかげ。僕に生きる希望をくれた。

『いいんだよ。私もヒロ君からの感謝、うれしい』

少しだけ胸が疼く。

『どうして、僕にこんなに親切にしてくれるんですか?』

『そんなの決まってるよ。ヒロ君だから……それが一番の理由だよ』

『僕だから?』

『そう……じゃあまた何かあつたらメルちょうどだいね!×××』

『ええ、必ず』

静かにパソコンを閉じる。

「ふふ……」

そして僕はバケツいっぱいに入つた御神木の残骸の一片を手に取つた。

「神の亡骸。たとえ靈力を失つても依代としては十分といつことか」

待つていろ御陰勇太。すぐに貴様を地獄の底に叩き落としてやる。

2

数日後。

「なつなんじやこりやあ!…?」

美術の時間、オレの喫驚が教室中に響き渡る。

課題を提出するように云われ、収納式の画板から絵を取り出したのだが。

「…………」

いつたいぜんたいこれはなんなのだ?たしか、課題は自画像だつたはず。なのに画用紙には黒い線みたいのが所狭しと描かれているだけだ。

ここにとこにかと忙しくて、護法天童の奴に任せていたのだ

が。

「ああ、それか。なんか『眉毛のドアップでちゅ』とか云つてたぜ」
後に座っていた隆盛が教えてくれた。『』にて寧に護法の声真似まで
して。

「眉毛のドアップ」

オレは今一度、画用紙を食い入るよつに見つめた。
たしかに、この靡いてるよつな黒い線は見事なまでに毛の質感。
しかも、オレの体に生えてるこんな短い毛は眉毛でしかないのだ
が……。

「うーん、これだとチン

「死ねつ！」

オレの放つた画板ハリセンが隆盛を黙らせる。
みなまで云うな！』といつといい、渡部りか子といい、どうしてみ
んなで品を下げるよつなことをつ！？

「どれ、見せてみろ」

美術教師の相原がオレの眉毛画を手にとつて見る。

「左眉だな」

「区別が付くのか？」

「先生」

『画板攻撃にもびくともしなかつた隆盛（ホント無駄に頑丈）が相
原に告げる。

「そいつはシユ ルレアリズムの極致つてやつだぜ」

「ほう」

出たよ、シユ ルレアリズム。なんか変なものをとりあえずシユ
ルと云つて誤魔化そつとする』の『』時勢。藝術の冒澆じやねえか
よ？

『自画像という課題に対し、あえて被写体の特徴から外れた箇所
をクロ ズアップして描く。つまりこれは、外面向的表現をとつぱら
い、より深い内なる自己を表現しようとした大智の渾身の作だ』
ものは云いようだな、おい。

「ふむ、たしかにシユ ルレアリズムと呼べなくもない。いや、寧ろアバンギャルドと云うべきか？」

なんか納得してるし相原。

そんな大層なもんじゃ ないだろ、それ。

「先生、描き直したいから少し提出期限待ってください」

「なんでだ？」

「だつてえ 」

こんなもので評価点付けられてたまるか。オレは不器用ながらも美術だけは頑張って5を取つてきたんだ。2とか3とかが並ぶオレの通知表の唯一のオアシスを護法の奴のせいで枯らされてたまるもんか。

「まあ、待つてやらんこともないが」

「ホント？」

「その代わり条件がある」

条件だと?なんだ?これが渡部とかだつたら『私と して』

とかとんでもないこと云いだすんだろうが。

「放課後オレのとこ来い。話はそのときだ」

「みゅ」

オレは不安を覚えつつ返事をした。

*

「いい天気だねえ」

「秋雨前線はもう南下したらしいからね」

休み時間、特にすることもなく外をぶらついていた僕。そして、

いつものように御陰勇太が僕に付きまとっている。

「あつ和毅くんだ」

御陰勇太は校庭の隅で絵を描いていた相原和毅を見付け彼に駆け寄る。相原和毅は一学年上だが御陰勇太と家が近所で仲がいいらしい。

「ん？ おう、 ゆうはか」

相原和毅はそう云つて口に加えていた絵筆をパレットの上に置く。

彼には両腕がない。

幼い頃、 事故にあつて切断してしまつたらしい。だからこそ彼は往年の芸術家がそうしたように、 口に絵筆を加えて絵を描いているのだ。

「相変わらず凄いねえ和毅くん。 ボク普通に描いたつてこんなに上手に描けないよ。 ねえヒロくん？」

「うん。 真の天才はハンデなんて関係ないんですね」

「はは、 そりや讚めすぎだつて」

そう自嘲気味に笑うと、 相原和毅は立ち上がり足を使って器用に道具を片付け始める。

「もう、 やめちやうの？」

「あ～なんか最近調子悪くてな。 ブランクつて奴かな？」

相原和毅は画板や道具を、 残つた短い腕の脇下に挟んだ。

「まつ芸術家にはつきものだ。 それより、 今日お前んちに遊び行つていいだろ？ 格ゲ の新作やらせろよ」

「うん」

「じゃあ、 後で」

相原和毅は教室に戻つていった。 そんな彼の背中を見送りながら御陰勇太は語る。

「ホントに凄いんだよ和毅くん。 足でコントロ ラ 操作してのに、 ボクいつつもゲ ムで負けちやうんだ」

「へえそれは」

「たしかに凄い。

「大したもんだね」

しかしそれは彼が望んで得た力ではない。 不遇のため自然と身についたもの。 身につけなければならなかつたもの。

「ほんといい天氣だねえ」

御陰勇太は呑氣そうに蒼天を仰ぐ。

「うん」

本当に雲一つない空だ。吸い込まれそうなくらい深い青がどこまでも広がっている。

相原和毅はそれを画用紙に収めようとしていた。どんなに欲しくて手を延ばしても、掴み取ることはできないものの象徴を。そう人は家にある鳥なんて望まない。科学で作れる花ならば思い描くこともない。

もつと別の夢想の中にあるもの。ありえない願望に苦笑しながら、それでも虚しさは拭うことができます。だからこそ、付け入る隙ができるんだ。

そうだろ？相原和毅よ。

3

「で、条件つてなんつスか？」

放課後、絵の提出期限を延ばしてもらつ条件を聞きに職員室の相原のところまでおもむいた。少し不安感があったので隆盛にもついてきてもらっている。

「実はな

相原は腕を組んで話しだす。

「こここのところなんか変でな。べつに体の調子は悪くないんだが、家に帰ると異様なほど早く眠くなるし寝起きも悪くなつて

「

「更年期じゃないですか？」

「んな歳かよ！」

「りりや失敬。

相原はまだ二十代後半くらいである。

「それで病院に行ってみたんだがどこも悪くないって云われてで、今日通り掛かりの一年の生徒に呪われてるかもしれないからお前に見てもらえと、なぜか怒鳴られるよつて云われてな

「通り掛かりの一年？」

「ほら、最近転校してきた双子の

凪紗か

。

「確かに凪ちゃんが云うなら呪いかもな。凪ちゃん敏感みたいだし。どれどれ」

そう云つて隆盛が相原を靈視する。

「ふむ、たしかになんか感じるな。なあもしかして調子が悪いの先生だけじゃねんじゃねえの?」

「ああ、なんか家族全員同じ感じでな」

相原の答えを聞き得意げに頷く隆盛。

「やっぱな 恐らく家自体が呪いの影響下にあるんだ」

「どういうことだ、隆盛?」

隆盛にオレは問う。

「遠距離型の呪いには一通りあるのはお前も知つてんだろう?」

「ああ、そうか」

そこまで聞いてオレも納得する。

一口に呪いと云つても種類も意味も様々だが、術執行者が誰かを遠距離から呪う場合、隆盛の云つとおり大まかに分けて二通り存在する。

一つは対象者の縁のものを手に入れたりして、靈力の感知、怨念を送るルートの確保、目標の絞り込み（たぶんこの間、話題に出てたESPだとか靈感だとかが関係するんだろう）そういう手順を整えた上で相手に術を叩きつけるという方法。これはまさに遠距離用の戦闘術であり、凪紗などのよほど強い靈力とセンスを持ったものにしか成功不能なものだつ。

それよりは比較的簡単な方法として、依代を用いるものがある。

怨念を込めた依代を相手に送り付けるなどし、その依代のテリトリ内の中の、あるいは条件をクリアしたものに対して無差別攻撃をしかける呪いだ。依代にしたものがある程度靈的効力を持つものなら成功しやすく、効果範囲が広いためかなり質が悪い。

「依代を探しださなきゃなんないのか。結構めんどくわ」

「依代が田に見えるものとは限らないしな」

そう、音とかに紛れてる可能性もある。サブリなんとか効果つてやつ。そんなんだったらお手上げかも。

「まあ一つ頼む。ちゃんと報酬は払うから

「いいです。安月給の教師に正規の報酬払つてもひりの気の毒なんで」

「はつきり云つてくれるな……」

苦笑いする相原。

さすがに先生相手に成功報酬50万とか云えないつて……。

「その代わり、提出期限延ばすのOKしてください」

「まあべつにいいけど あの眉毛画でいいと思つんだがな」

「…………」

まだ云つか。

「ん?」

相原に連れられオレと隆盛は彼の自宅を訪れる。

そこは何の変哲もない中流住宅の一戸。しかし、玄関を潜つたところで妙な違和感を覚えた。

「フンフン、フンフン」

オレは犬のように鼻から息を吸い込む。べつに特に変わった匂いがするわけではない。

だけどなんか、

「どうした大智?」

「いや、なんか空気が気になるつていつか
どうにも云い表せない。

「ん? フンフン」

「なんか臭いか?」

隆盛や相原もオレに倣つ。

「これは

隆盛が何かに気付いたらしく田を見開いた。

「もしや　　おい、あんま吸うな。いつたん外に出るぞ」

そう云つて隆盛はオレの手を引っ張つて玄関から出る。相原も首を傾げながら着いてきた。

「どうした上条？」

「先生、この家の空気、毒で汚染されてるかもしない『毒つ！？』

隆盛のこきなりの発言に喫驚するオレと相原。

「どうこことだ隆盛？」

「ああ。呪いつてのの大半は毒を使つたペテンだろ？でも、中には毒を巧妙に使つた呪いというのも存在するんだ。例えば田標にまつたく致死量に及ばない程度の毒を盛り、呪いでそいつの免疫機能を狂わせショック死させる。こうすれば死因を誤魔化せ確実に呪い殺せる。まあ今回のケスが死に至るものかは分からないが、大智が空気に違和感を覚えたんなら毒が漂つてる可能性がある」

確かにオレは不動尊の靈力が減つて自身の靈力が増えると細胞の異常活性が起こつて感覚も鋭敏になるけど。

「でも、毒つてなあ」

「いや、毒などそんなに珍しいものではないだろ」

相原が云つ。

「そこらに生えてるような植物だつて根子に毒があつて食べれば腹を壊すものもある。芳香剤の中には思いつきり吸い込めば頭がクラクラするものもあるし、シックハウス症候群などまさに毒の家だ」

「とにかくだ。依代がなんらかの毒を発しているとみて行動したほうがいいだろ」

たしかに危険性があるんならそれを見越して行動したほうがいいけど。

「でも、どうすんだよ？」

「とりあえず近くのコンビニでマスクを買ってくる

「マスク？」

オレは隆盛の言葉に耳を疑う。

「コンビニで売ってるマスク程度でどうにかなるのかよ？」

「最近のマスクは性能いいんだぞ。それに先生が死んでないんだから、大丈夫なんかないの？」

そう云い残し隆盛はコンビニに走つて行つた。

「上条は細かいのかアバウトなのか分からん奴だな

「あいつ変態だから」

昔から天才と変態のすることは常人には理解できないものだ。そうこうしていると、玄関の扉が開き一人の男の子が姿を現す。

「なんだ和毅、帰つてたのか」

「兄ちゃんこそ早かつたんだね」

中学生位だらうか？ずいぶん歳の離れた兄弟である。いや、そんなことより一瞬気付かなかつたのだが、この和毅つて子の両腕ない。

「…………」

オレが放心していると相原弟はオレを見て相原兄に訊ねる。

「兄ちゃんこの子、誰？」

「オレの生徒だ」

「ええっ 兄ちゃんつて小学校の先生だつたけ？」

ちつ毎度お馴染みの精神攻撃め！

「オレ、高校生なんだけど」

「えつ？小六のオレよりチビなのに？」

「…………」

くつ最近の小学生は発育がよろしくて恨めしい。

「こら和毅、人様のコンプレックスを抉るなよ」

「あつわりいわりい」

あんまり謝られた気がしないんですけど。

「兄ちゃんオレ、友達のところ遊びに行つてくるから」

「ああ。あんまり遅くなるなよ」

「うん」

そして相原弟は去つていった。

「あんまり気にしないでくれ。ああ、あつて気はいい奴なんだ」

「いいですよ。馴れてるし」

「ハハ……」

相原は自嘲気味に笑う。

そしていつときの沈黙が生まれた。

『…………』

やがて相原が口を開く。

「あいつの腕な。三歳の頃、事故であなつたんだ」

「そつなんですか」

「トラックの重荷が崩れてきて、その下敷きに

「…………」

相原は目を瞑つていた。なにかを堪え忍んでいる顔だ。

こういう時、なんて言葉をかけたらいいんだろうか? そういえば父さんは、救いを求めてきた人に対して『大丈夫だよ』と声をかけていた。するとみんな癒されたように泣いたり笑つたりしていた。でもそれは言葉の力ではなく、父さんの力だ。オレにはとてもできない。

まだだ……。なんか穴が空くような。

「お待たせ!」

隆盛がマスクを持って戻ってきた。

少しほつとした。

それでも、いつまでもこいつに頼り続けていの自分に嫌気もした。

*

「あつ和毅くん」

相原和毅が御陰勇太の部屋を訪れる。

「相変わらず広いなこの家は。玄関からここまでトメさんの案内がないと迷うぜきつと」

「はは」

「おっ今日は縫取織くんも来てるのか?」

「どうも」「

座椅子に座つていた僕を見て、相原和毅が声をかけてくる。

「お前ら学校ではいつも一緒にいるのに家に来たの初めてじゃないか?」

「そうなんだよ。ヒロくん誘つても来てくれないんだよお

「じめん、勉強とか忙しくて。でも、今日は気分転換しようかなって

「ふ〜ん」

ふん、今日はお前の観察だよ、相原和毅。

そろそろアレの効果が出始める。それを見て最終調整をしなければならないからね。

「ねえ早くゲムしよつーまずはボクと和毅くんね

「ああ」

相原和毅はスリッパを脱ぐとウエストポーチから足でウエットティッシュを取り出し足の指を器用に拭く。そして、床に置かれたTVゲムのコントローラに足を構えた。

「レディGO!」

ゲムが始まつた。

ほう、聞きしに勝るとはこのことか。足の指がちょっとした不器用な人間の手先より巧みに動いている。

これほどの能力を持ちながらそれでも普通に憧れるか……。

それが人の業。呪いそのものだな。

「う〜」

唸る隆盛。

確かにこの家は呪われている。にもかかわらず小一時間も捜索し

て いるのに 依代を見付けだすこ とが でき ない。

「法具を外して 靈視するか……」

隆盛の して いる 靈的防 御力を 上げる 法具。逆を 云え ば その 遮断 作
用が 靈感を 妨げる こと となる。

でも、

「やめとけよ」

靈力過敏症 外界の靈力に過剰反応してしまつアレルギ 症
状。それが 隆盛の靈感の高さの起因であり、靈的防 御力を 高める 必
要性を 肢らす もの。

「氣分悪くなるんだろ?」

「 そ うだ が 」

「他の方法を 考えるぞ」

そう云つて オレは 通学バックを 漁る。

「先生、 家族何人ですか?」

「四人だ が?」

人数分のお札を 取り出し、 相原に 渡した。

「と りあえず 今日は 帰ります。依代を見付ける 方法を 考えて 改めて
検索を。その間は しつかり 空気の入れ替えして、マスク着用。家に
いるときは このお守りを それぞれ 身につけて いてください」

「わかつた。すまんな 手間をかけさせて」

指示を 聞き入れる 相原。

オレたちは 適当な 済化処理を すませて 暇を 告げた。

「オレ、玉串神社に 寄つて 帰る けど お前、 どうする?」

帰り道、オレは 隆盛に そう 訊ねた。

「千佳ちゃんのお見舞いか?」

「ああ」

御神木が 崩壊して から 数日。高橋千佳子は 大量の 邪氣に あてられ
たため 自宅療養している。正直、会いづらい。だから といって 逃げ
るのは よくない と思つ。

「そ ういえ ば ESPの中には 探査能 力を 持つ ものも いる らし いぞ。」

千佳ちゃんに訊ねて頼んで見るか?」「どうだろ……。

「その時の雰囲気で」「

「ケ　スバイケ　スか。よし、オレも行く

「

高橋の家に行くと神主さまが出てきて密間に通された。しばらく待っていると、巫女姿の高橋千佳子が茶請けの乗った盆を持って現われる。

「

高橋は黙つて台の上に盆を置いてからオレたちの正面に座る。千佳子は美味しそうな興しだった。

「どうも」

ペコリと頭を下げる高橋。オレはなぜか心臓がドキッとして慌てる。

「あの、その、えっとお

「もう、体はいいのか?」

オレがどぎまぎしていると、横にいた隆盛がさらりと加減を訊ねた。

「ああ、もう大丈夫だ。明後日は学校へ行こうと想う

「よかつたな」

「ありがとう」

隆盛の笑顔に高橋もほんの少しだけ頬を緩めて応じた。

「

なんか居たたまれない。オレは思わず田の前の興しに田を落とす。

「口に呰えればいいが

「えつ?」

一瞬だけ高崎の言葉の意味が分からなかつた。少しだけ自分が興しを物欲しげに見ていると彼女に解釈されたとことに気が付き

恥ずかしくなる。

「あつ いただきます」

言い訳するのも却つておかしい気がしたので興しを口に放る。

「美味しい」

甘さがサクサクと口に広がる。凄く美味しい。でもどこか今の気分とは違う気がした。

「そうか、よかつた」

何か云わなきや。

「あの……」

「ん？」

「その、えつと」

でも、何を云えればいいんだろ？
具合は今、隆盛が訊いたし、励ましは脈絡ない気がするし、ここは時節からか？なんか白々しい。

「不破大智」

「はつはい」

高橋に名を呼ばれ思わず背筋を伸ばす。

「これまでの無礼、許してほしい」

「えつ？ その……」

高橋はオレに深々と頭を下げた。

「その、やめ……」

「…………」

彼女は頭を上げオレの目を真つすぐと見つめてきた。真摯な眼差し。オレは思わず目を逸らす。

「その………… オレ………… あの…………」

「自分があれほどまでに弱い人間だとは思つていなかつた」

「…………」

「御神木が突然枯れ混乱した。救えるかもしれない法師がいると父に聞き嫉妬した。完全なハツ当りだ。自分が恥ずかしい」

「そんなことない！」

思わず声を荒げハツとなる。

「そんな……」
「……それだけ大切なものだったんだから焦るのは当然だ」
「すまない」

高橋千佳子の顔が見れない。彼女はどんな顔でオレに謝罪しているのか。

「その……ほんとに大丈夫なのか?もう」

オレの問いに高橋は少しだけ考えてから口を開く。

「辛くないと云えば嘘だ。朝起きてもう一度と御神木を目にするとができないと考えると豪傑ごけつでしかたない。父にも心配掛けた。人を傷つけた。元に戻ることはない」

「…………」

「それでもこうして自分の身を按あじ見舞まってくれるものがいる。失つたものは大きくとも得るものも確かにあるのだと、そう自分を鍛え直そうと思つていてる」

大丈夫なわけない。辛くて胸が張り裂けそうなのだと伝わつてく
る。それでも彼女の言葉に偽りはないと思つた。

結局、能力うのうのこととは訊きねられないまま神社を後にした。

「強いな、あいつ」

帰り道、オレはポツリと呟いた。それを耳にした隆盛は少し考えてから云うつ。

「さあな。ただ、そう見えるのは彼女がより強いいなにかに支えられ
ているからじゃないかな」

「より強い何か?」

「例えば神主の…………十蔵さんだつけ?あの人の優しそうだつたし、

色々懸命になつてくれたんじやないか?」

「そうだな」

「それに大智だいちだつて

「

「真実を告げないという選択で彼女を守つてる。もしかしたら救え
たかもしれないなんて知つたらさすがに、まだ立直たつれてなかつたか

オレ?」

もしれない。そうやつて人から守られて、見えない何かに支えられて、初めて人は強くなれるんだ」

強くなる 支えられて……。

「…………」

オレはいつのまにか泣いていた。隆盛が後からオレの頭を撫でる。

「大智。ごめん」

顔は見えない。彼も泣いているような気がする。

「ずっと支えて上げられなくて。ずっと独りぼっちで寂しい思いさせて」

「…………」

そんなの 仕方 ない……。

「謝んなよ。そんなお前のせいじゃねえじゃんか」

「…………」

雲がぽたりとオレの髪を濡らした。

5

父さんが死んだ後、隆盛の家の者がオレを引き取つてくれると申し出てくれた。そしてオレは一ヶ月くらいの間、隆盛の家にやつかりになつた。

なるほどと思った。隆盛という人間は、たしかにこの家で生まれ育つたのだと。

暖かい、針の縫う隙間もないほど温もりで溢れている。おじさんもおばさんも優しく、兄姉たちも明るく接してくれた。悲しみを忘れていられる時間が多かった。

あの日、オレが倒れるまでは。

原因不明の意識混濁が続いた。結論としてオレが不動尊の靈力で自らの靈力を封印し続けなければならぬ体質なのだということに行き着いた。更に不動尊の靈力はオレや呪われた者には浄化作用として働くが、正常な人間が長く曝されると悪影響を及ぼすという事

実も発覚する。

結局、オレは一人で生きていかなければならなかつた。

それでも隆盛はオレのところに通い続けてくれた。限界に耐え、いつも長居しようとする隆盛をオレは半ば強制的に帰した。そして途方に暮れる。

夜になると音が消える。たとえ聞こえたとしてもそれは遠鳴りか虫の声。それが余計に自分以外ここにいないのだと裏付けている気がした。

眠れずに、長い夜が続く。

意味もなくテレビを付けっぱなしにし、意味もなく部屋を徘徊する。

護法天童に父さんの姿を求めるが出来損ないができるだけ。心配掛けてはいけない。

そんなこと口に出せずには。

寂しかつたよ ずっと……。

「うわあ上手ですね」

空いた部屋で絵を描いてると、鬼灯姉妹がやつてきて感想をくれる。

「なんか意外な感じ」

凧紗の言葉にオレは皮肉を返す。

「不器用なほうだからな、オレは

「失敬、ふふ」

よかつた。また彼女に笑顔が戻つている。昔の歌ではないが、後戻りしてまた進む。それが支えられているものの強さ。

「…………」

いや、違う。

支えられているのはオレの方だ。利用しているんだ、この呪われている姉妹を。祓うことのできない呪い、この寺で過ごすの

が最善だと御託を並べて、自分の寂しさを紛らわそうとしてんだ。

まるで、ペットかなにかを拾つたように……。

「ホントにそつくりですよこれは

「どれどれ

風音の称賛。凪紗はオレと絵の中のオレを交互に見比べる。

「ふうん、確かに

「継続はなんたらってな。暇だったから、ずっと……」

思い出した。一人でいるときに絵を描くことを勧めてきたのも、絵の描き方を教わったのも隆盛にだつた。

「でもさあ

凪紗がオレの両頬を人差し指でくいっと引き上げる。

「笑つてるほうがいいよ。法師さまは」

絵を見る。画用紙の中のオレは死人のような顔をしていた。

「なあ

「ん？」

「やつぱいいや……」

危なかつた。もつ少しで変なこと訊きそうになつた。

「オレのこと好き?とか。

「よしよし、いい子いい子」

凪紗がオレの頭を撫でてくる。

「子供扱いすんなよ。隆盛じゃあるまいし」

「ううん。法師さまはまだ子供よ」

きつぱりと云われてしまつた。

「私たちもね」

自嘲氣味に笑う凪紗。風音に田をやると、眩しそうに笑つていた。

「隆盛さんは子供らしくないですけどね」

「はあ」

ため息。見透かされてやんの。

*

思えば、どうして僕は御陰勇太に拘っているんだろうか？
奴が特別な存在だからか？

厭、違う。

たとえ奴がどんな力を持つていようと、世界の理に関わるものだとしても、僕はなんの興味もない。たしかに御陰勇太の力はすごいのだろう。でも、それがなんだっていうんだ。

僕はただ、他人を呪い自分が呪われ続けていたいだけ
構う必要はない。

なのになぜ？

「肉は腐りかけが

」

『果実もそう

』

ヒロくんと一緒に

ほんといい天気だね

えへへ

「友達だもんか

」

そうだ 奴が僕に構うから。奴が僕の心に触れようとするから。

僕は一人で十分なのに。この腐れ切った世界に友なんていらないし、そんなもの存在するはずがない。ただの馴れ合い。それが分からぬいくすどもばかり。

僕は呪いと共にいられればそれでいい。それだけで満たされる。

「御陰勇太」

お前が僕を友と呼び続けるかぎり、僕がお前を殺す。

「待つていろ

」

もうすぐ完成だ。

「ねえ法師さま、起きて！
オレを呼ぶ声がする。
うるさいなあ。

「だから鮒にマヨネ ズかけてもトロの味なんかしないって云つて
んじやん、パパ！」

「なに理由分かんない」と云つてゐるよ 法師やまに電話が掛かつ
てるから起きてつて云つてゐるんでしょーーー？」

「いてつ」

頭に鈍い衝撃が走る。それで自然と目が開くオレ。目の前に風紗
が立つていて、オレになにかを突き出してくる。

「ほら 電話よ。早く出て」

「ん~、もしもしパパ? やつぱトロは本物がいいと思つんだけど
「もしもし? お前、寝呆けてるな? オレは相原だ。美術の

「あ~そう」

『昨日のことなんだけどな、アレもういいから。なんか体調も戻つ
たし、たぶん呪いつてのも大げさだろ?』

「みゅう

『悪かつたな、手間とらせしよ。あつ縫の方は今月中でいいから。
じや』

「ん~、胡瓜に蜂蜜でメロンだね。それはなんとなく許せる
「ねえどんな話だったの?」

風紗がオレに訊ねてくる。

「みゅう、親父がね。味伝説を試してみよつて……アレ?」
徐々に頭が覚醒し始める。

「え~と、相原が 昨日のこともうこいつて……ビツコウこと
だ?」

オレは慌てて上半身を起して、相原に電話しようとする。
だが 。

「オレ、アイツの電話番号知らねえし

「今どきナンバ デイスプレ ジやないもんねえ、この家

「うつ

「だつてさあ、色々機能が付いたら訳分かんなりそうじやん。
「ちつしやあねえ。ちょっと家まで行つてくる。留守番よろしく

「分かつたわ……つて」

ボクサ パンツにTシャツにナイトキャップの寝巻スタイルのま

ま出掛けようとするオレを風紗が制する。

「面白いほど、寝起き悪いよね法師さま」

「う~みゅ」

オレは赤面しながらナイトキャップを外した。

相原の家に向かう途中、

「ん？ あれは？」

公園で相原の弟の和毅を見かける。

絵を描いていた。ない両腕の代わりに口や足を使って。オレは和毅がどんな絵を描くのか気になつて近付いた。

「ほつ」

オレは和毅の絵を見て思わず感嘆する。

空を中心とした風景画。画用紙はほぼ青一色で塗られていた。ただ、一言に青といつてもその多彩さは舌を巻く程で、とても水彩絵の具だけで表現しているとは思えない。

「ああ」

和毅はオレに気が付き口の筆をパレットにそつと置いた。

「チビ太兄ちゃんか」

「勝手なあだ名つけんなっ！？」

「へへ」

和毅はニッと笑う。

腹は立つがあまり憎めないのは。

「巧いな、お前」

「そう？」

「ああ、青一つでこんだけだせりや立派なもんだ」

「…………」

和毅は表情を消し自分の描いた空を睨む。そして首をゆづくつと

上げ天を仰いだ。

「でも なんか違ひ氣がする……」

ボソリと呟く和毅。

オレも和毅と同様に絵と空を見比べた。

「ああ、そうか」

「えつ？ わかつたの」

オレの言葉に和毅は驚いた。

「今、ちょっと理由があつて感覚が鋭くなつてるから。これ真上を見て描いた絵だろ？」

「うん」

「だから中心が真上になるからこじが一番青が濃いくなる。で、上に太陽があると仮定すれば上側が光で少し白っぽくなるとして、あとは外向きに青が薄くなつていいくだろ？ でもこじの雲の描き方だと右側に太陽がある」

和毅はオレの指摘にはつとなる。

「ほんとだ 気付かなかつた」

「ほんと空だけだと目を作りにくいし、こんだけ力入れて描こじうとすれば時間が経過するからな。まあ普通の絵だつたら、こんなこと気付かないだろうけど、色の再現が半端じやないから微妙な違いも気になつてしまつんだろ」

「はあ。なんかこじんとこ調子悪くてさ、バカだよなあ。集中できてねえよ」

和毅は呆れたように半分しかない腕を上げてみせる。まあ、家族全員呪いのせいで体調悪いようなこと云つてたからしちゃうがないだ

ろうけど ん？ 半分

「腕が伸び」

昨日見たとき、和毅の腕は半分もなかつたよつた気がする。

「つー！」

和毅が顔面蒼白になる。

そして、

「和毅くんつ！？」

彼は画材道具を置いて走り去つていった。
なんなんだよ、いつたい！？

「腕が伸びた？」

わけが分からぬ。オレは混乱する頭で、隆盛の下を訪れた。
「ほんとなんだつ！！昨日は四分の一くらいしかなかつたのに、今は間接のところくらいまであつた」

「うむ」

考え込む隆盛。

「腕が伸びる。つまり再生するということだが、実際問題なくなつた腕を再生させることは不可能だろ？」

「でも」

「まあ聞け。いいか、人間の細胞分裂つてのは胎児のときを除いて、指なら指に腕なら腕にしかならないもんなんだ。だから、もし腕の長さが変わつていたんなら、それは再生したというよりくつつけられたと　　胎児？　そうか……」

「隆盛？」

隆盛は何かを思いついたように立ち上がり、自分の部屋の本棚から分厚い本を引っ張り出してくる。

「これかもしれない」

「ゴ　レム？」

隆盛から差し出されたペ　ジの頭の文字を詠む。

「ゴ　レムつてドラ　エとかに出てくる土人形の？」

「ああ、そうだ。ゴ　レムの語源は胎児。ユダヤ教の尊師が使役する泥人形のことだが」

「おいおい、俺の見たのは泥なんかじゃなかつたぞ」

「いや、ゴ　レムの起源は『旧約聖書』で神が楽園の泥から最初の人間アダムを創造したという逸話によるものだ。つまりアダムは神

の分身 それらを総合的に考えると、ゴーレムとは子宮を必要としない即席クロン人間の製造法。和毅とかいう子の場合、それを部分的に行なつたとすれば

なんか話が誇大妄想っぽくなつてきているような。

「クロンだとか神とか、んな一昔前に流行つたSFじゃあるまいし」

オレが呆れ果てていると隆盛は苦笑する。

「おいおい、靈能者つてのは魔術師の末裔だろ？魔術つてのは恐らく行き過ぎた科学のことだからな」「

魔法と一緒にされてもな。

「ここで議論していてもしかたがない」

とにかく、オレたちは相原の家へ行くことにした。

*

さて、仕上げに入ろうか。

昨日は誰かさんの作った護符のせいで予定外に術が発動してしまつたが まあいい、それもすでに修正済みだ。

「うつうあ があああ 」

相原和毅は悶え苦しみながらどごの壙に凭れ掛かる。

「腕があ 腕があ 」

相原和毅 お前があくまでも失つた腕を求めるといづらくなれてやる。

だが代償はいただく。手にした腕を使って御陰勇太を抹殺しき。

「あああああああ 」

ぐりゅぐりゅぐりゅ

腕が生える。厭、正確に云えば僕の作ったゴーレムが相原和毅の細胞を模倣して誕生しているのだ。

後はゴーレムに仕込んだ依代を通して、相原和毅 お前を操り人形にするだけだ。

相原の家を訪ねるオレと隆盛。和毅の残していった画材と絵を相原に渡すと彼は苦笑した。

「あ～あ、へつたくそだなあ」

「ええ、調子が良くないつて云つてましたからね」

「…………」

相原は絵から田を逸らし外方を向く。

「呪いです。その影響を一番受けているのは和毅くんじゃないです

か？」

「…………」

「黙つてればオレが気付かないとしても思つてるんですか 和毅くんの腕！昨日、何があつたのか話してください」

相原は口を押さえいつときの躊躇していた。オレはそんな彼を睨み上げ、隆盛は後ろでなにやらぶつぶつ云つている。

「昨日の夜」

やがて相原は観念したように小声で話し始める。

「お前から貰つたお札を和毅に渡したとたん和毅が腕が痛いと云いだして……そしたら、腕が生えてきて」

「…………」

「和毅を問いただしたら、数日前に誰からか分からぬけど『腕、欲しくない？』ってメルがきて、『欲しい』って返信したら次の日塗り薬がポストに入つてて、それを腕に塗つてたらいすれ腕が生えるつて

「それであんたはあの子の腕が生えるからラッキ とも思つたのか！？』

「か！？」

相原はオレの言葉を受け田を瞑る。本当は耳を塞ぎたいのだと云わんばかりに。

「呪いつて分かつてたんだよな？危ないものかもしけないって分か

つてたんだよな？それなのにあんたは　　」
「しかたねえじゃねえかつ！！」

相原の叫び声。オレは思わず体を硬直させる。

「あいつの腕が生えてくるんだ　　少しばかりのリスクがなんだつてんだ」

「先生　　」

「和毅の腕は　　オレのせいでなくなつたんだ！」

「つ！？」

「あいつの面倒を見てなきやならなかつたのに、友達と遊ぶのに夢中になつて、ちょっと目を離したすきに事故に巻き込まれて相原が頭を抑えて崩れていく。

オレは今日、生まれて初めて大人を下に見たかもしない。

「腕がなくて、惨めな思いもしただろう。どうしてオレだけつて苦しんだだろう。だからあいつの腕がもとに戻るなら、オレは悪魔にだつて

「あんたそれでも大人かよつ！？」

ちくしょう　　。どこの誰の呪いか知らないが、こんなのが惨すぎる。人の心の傷を抉るみたいにして。

「あんたが罪の意識を感じるのは分かる。和毅くんが腕を欲しがつたことも　　どんな思いで、この青空を描いていたのかも」

オレは地面に落ちた、和毅の描いたちぐはぐな蒼天を指差す。

「誰だつてありもしない偶像に憧れることはあるんだ。それが手に入れることができなくて寂しい思いをすることだつて！！だけどつ！たとえ、手を伸ばして青空が手に入らなくとも、それでも心の中に青空を描けば空を飛ぶことだつてできるんだつて！それを子供に教えてやるのが　　そつやつて励ましてやるのが家族つてもんじやないのかよ！それが、大人の務めじゃねえのかよ！？」

「うつうああ　　くう

嘆び泣く相原。

「くそ」

父さんのようにはどうしてもいかない。それでもオレは

「なあ大智。呪いの症状、眠くなるって云つてたな」

それまで一人の世界にいた隆盛が、深刻な顔でオレに訊ねてくる。

「ああ、副作用かなんかか？和毅の腕に塗つた薬が風呂に入つたときとかに気化して他の家族にも影響が出たか？」

「いや寧ろそつちがメインじゃないのか？」

「えつ？」

隆盛の言葉にオレは混乱する。

「どういづ 」

「腕を餌にして しまつた、ここ勇太んちの近くじゃねえか」

「勇太くんは和毅の友達」

と相原。

「どういづことだよつ 隆盛！？」

「術者の目的は相原和毅を操つて勇太を殺すことだつ！！！」

「なつ！？でも、掲示板のアレはすでに削除したんだろ？」

そう、凧紗の事件の後『勇太を呪う』よう掲示板に書き込まれていた文面は隆盛が管理会社と交渉して削除させていた。

「消す前に凧ちゃん以外の誰かが見てたか。いずれにせよ、アレを書いた奴が誰か分かつてないわけだし、ネットの掲示板なんて世の中には五万とある。もしまだ勇太が誰かに狙われているとしたら

勇太がこここんどこやらとお前の周りに現われることもこれで説明が付く

「じゃあ

「

隆盛の言葉に息を飲む。

勇太が危ないっ！！

*

もともとゴーレム自体、僕の云うこと聞くようにできている。後は御神木を利用して作った依代を通して精神支配を強めれば、相

原和毅は簡単に僕の操り人形と化した。

「ふん」

もともと他の靈力を自由にできる能力を持つ僕にとってこんなことは朝飯前だ。

『よう、勇太』

相原和毅を御陰邸に向かわせた。インタ フォンで呼び出させる
と、御陰勇太はなんの疑いもなく玄関から顔を出してくる。

『どうしたの、和毅くん?』

一〇二〇顔で相原和毅に近付こうとする御陰勇太。しかし、途中
まで来て奴は相原和毅の異変に気が付き足を止めた。

『しまつ！？のうまく しつちり』

遅いっ！

御陰勇太は何かの術で応戦しようとしてきたがすでに後の祭りだ。

『ぐがあ』

相原和毅の放った飛び膝が御陰勇太の鳩尾に入った。

『首だつ！首を絞めろ！！』

僕の命に従い胎児なる腕が御陰勇太の首を締め上げる。

『くうあ』

強烈な握力に顔をピクピクさせながら、それでも御陰勇太は何か
の印を結ぼうと腕を動かそうとする。

なんて奴だ。普通なら氣絶してもおかしくないのに、逆に仕掛け
てこようとするとは。

『腕を取れ』

首を右手のみで握らせて、左手で御陰勇太の右腕を押さえ付けさ
せる。

『うがあ』

もう奴になす術はない。

『これで終わり あれは……』
ちつ、いいところで 。

*

「和毅つ！」

御陰邸のアプロチで和毅が勇太の首を絞めている場面に出くわす。

やはり腕が完全に生えてる。おまけに隆盛の云う通りになってしまった。

「やめろつ和毅！」

「待つてください」

和毅の下へ駆けようとする相原をオレは制止する。

「和毅くんは誰かに操られている。近付いたら危険です」

「どうする大智？」

隆盛の問い掛け。

依代を使った呪いを呪咀移しするのは難しい。依代を破壊するしかないので。

「取り敢えず不動金縛りで縛る」

金剛杵がないのは痛いが、寺に取りに返っている時間はない。俺は代わりに縄索印を結んで真言を唱える。

「のうまく さらば たた うぐつ！」

「大智つ！？」

体の力が抜ける。

俺は思わず跪いてしまった。

「まづい！」

ここにところの使用頻度が高くて不動尊の靈力が足りなくなつてしまつた。このままじゃ。

呪われ屋の出現に、またも邪魔が入るかと焦つたがなんのことはない。呪われ屋は先日の御神木の件で力を使い果したのか、術を使

*

えず」にいるようだ。

「ふん。相原和毅、そのまま御陰勇太の首を折つてしま

『うおああああああああああああああ

なつ！？

突然の呪われ屋の咆哮。

『大智つ！！』

いつも呪われ屋にくつついている巨漢が奴を止めようと肩に手を当てる。だが、

『ぬん』

呪われ屋の細腕が一振り、巨漢を後方に薙ぎ倒した。

あれだけの体格差でこんなことが可能なのか？

厭、それよりあの呪われ屋の瞳。

燃えるような紅に、しかも瞳孔が野性の獣のごとく縦に潰れてい

る。

「瞳孔を構成する虹彩は筋肉だ。なら、筋肉組織を急速に変質させる術……厭、まてよ。これはまさか

「第二次性徴不全かっ！？」

あの孤高の天才ト ル＝シンラ博士がかかっていたとされる、細胞の異常活性を促す原因不明の先天性失陥。 それなら奴の体が異常に幼いのも、突然の異変も納得ができる。

「だからといって奴の靈力は空のはず。この情況を打破する術など使えないだろが

『うああおおおおおおお』

呪われ屋が相原和毅に体当たりする。相原和毅は吹つ飛び御陰勇太から離れた。

「力任せにきたか？ よもや依代を

馬鹿なつ！？』 レムの腕とはいえ、すでに相原和毅の肉体と同化を始めているそれをもぎ取るつもりかっ！？ 「応戦しろっ！」

*

「大智、やめろっーー！」

隆盛の悲痛の叫び。オレにそんなことをさせたくない。でも、もうこれしかないじゃないか。

「うぐあ」

頭の中の血が巡りすぎて気がおかしくなりそうだ。

「つああ」

和毅の腕が彼に馬乗りになつて、オレの首に伸びる。

「ぐあ」

物凄い握力。勇太はこれで首を

。

もう、方法がない。呪いの依代を

この腕を

壊すしか。

「ぐう」

残酷かもしね。痛いかもしね。

それでもオレは呪いを 一の子を救わなきや。それが、オレにできる唯一のことだから。

みしめしめしめし

オレの首を絞めているその腕を両手で掴み捩じり上げる。

「うがああああああああ

和毅の絶叫が耳に

。

だめだ、力を抜いちゃ。今やめたってビリにもならない。

ばきぼきば

骨が碎ける音。

ぐしゅ

『うああああああああああああああ』

相原と和毅の声が重なつて耳に届く。

血の臭いが普段の何倍もの感覚を有するオレの嗅覚を貫く。それは工事現場の鉄渋の『』とく。

「ああああ

ああああ

ああああ

』

もう一本の腕が失った腕を求める、オレの首から和毅の血塗れの腕に 。

和毅から切り離された腕は断末魔を上げているかのよつて、地面の上をびくびくと跳ね続けている。

「ごめん。せつかく生まれてきたのに。

「ぬあああ

「残つた腕も……。

みし

ほきば

ぐしゅ

「ああああああああああああああ

」

和毅の叫び。痛みか、それともせつかく手に入れたものを失つた嘆きか。

オレの意識は答えを出せぬまま急速に遠退つていった。

*

「やつてくれるじゃないかよ

武者震いが止まらない。

呪われ屋、不破大智 御陰勇太の前にまずは貴様をどうにかしなければならないようだな。

シケンス

勇太の病室の戸が叩かれる。勇太に付き添つていてる母親が応対するとスツを着た男が入室してきた。

「警視庁の常磐というものです」

男は名乗ると警察手帳を翳す。

「昨日の件でお話を伺いしたいのですが、できれば息子さんと一緒にしてもらえませんか?」

「えつ?ですが

刑事の唐突な要望に母親は戸惑つ。

「大丈夫だよ、ママ」

首に包帯を巻きベッドに横たわっている勇太が母親に進言する。

「なにかあつたらすぐ呼ぶから」

「そつそつ? ジャあ

母親は渋々病室を後にした。

「悪かつたね態々来てもらつて」

勇太が刑事に云つた。その声は喉を潰された後遺症のためか若干嗄れている。

「首より腕の方がいかれちゃつてさ、メ ルうてないんだよ」

「乾闥婆さま、お劳わしく存じ上げます」

神妙な顔で勇太を気遣う刑事。それはまるで悠久に仕える主人を前にしているかのようだ。

「先日の呪われになつたときも、心配で氣が氣でりませんでした」

「ありがと」

勇太は屈託のない笑みで応じる。

「呪われぼつちに接触するためと、ヒロくんを挑発するために、掲示板に僕を『呪つて欲しい』って書き込んだはいいけど、まさかあんなに強い呪いに襲われるとはね はは、最近の女子高生も侮れないよね。まつおかげでレベルアップできただけど」

「…………」

「それに思つたとおり、ヒロくんはあの女と繋がつてゐる。確信が持てなかつたから泳がしていただけど正解だつたみたいだね。ゴ レムを作るためには人工細胞『キザン』が必要だ。今、純粹な『キザン』を保有している人間は限られているから」

「人工細胞『キザン』」 故ト ル・シンラ博士が生み出したとされる、簡単な電圧操作でその遺伝子から細胞の形まで自由に想像することができる夢のような代物。かつてはそれを用いて人造人間を創造する構想まで持ち上がつたが不幸な事故とテロ紛いの事件によって、人工細胞『キザン』表舞台から消失した。

「それでは

「ふふ

「ふふ

勇太はほくそ笑む。

YUA 五年前、ウイルス性の『キザン』を散布し、この国　いや、この世界にリップルリバースをもたらした女。

「恐らく一人に直接の面識はない。パソコンだよ。ヒロくんのパソコンをハッキングしてそこからあの女の取り憑いた先を捜し出すんだ。彼女が自由に行動できる力を付けてしまつ前にね」

「畏まりました、ではお大事に」

常磐は勇太に丁寧にお辞儀をしてから踵を返す。

勇太は彼に聞こえない程度の小声で、

「これで面目はたつた。後は呪われぼっちヒロくんの直接対決を好きなだけ観戦してもいいよね　そんなこと思つから今日も眠れない　つと」

至福を噛み締めた。

つづく

ヒロトカゲ、消える僕

1

目が覚めると本堂に横たわっていた。起き上がると思ったより体は軽く、幾分爽快でもある。本堂の戸を開けると、太陽はもう西に傾きかけていた。

「大智」

自宅に戻り居間に顔を出すと、凧紗と隆盛が座っていた。そして思い出す。なにがあつたのか。そして、自身が血塗れであったと。

西日で……気付かなかつた。

「大智先輩大丈夫ですか？」

台所から現われた風音が呆然となつていたオレを案ずる。

「今、お風呂沸かしますから」

そう云つて彼女は風呂場に向かつた。

「お茶飲む？」

凧紗が訊いてきたので頷き、オレは上座に腰を下ろした。

「隆盛」

恐い……だけど、訊かないわけにはいかない。

「勇太くんと和毅くんは？」

恐る恐るした問いかけに隆盛は大きく頷く。

「安心しろ。勇太は命に別状ないし、和毅の方も傷ついたのはほとんどゴーレムの腕だけで、本人はゴーレムがくつついてた部分の薄皮が剥がれた程度で大事ないから」

「そうか」

それを聞いて少しは救われた。

「はい、お茶。熱いから気をつけて」

「ありがとう」

凪紗が湯気の立つた湯呑みを田の前に差し出してくれる。

「ねえ訊きたいことがあるんだけど、あそこには籠もつてて、まあ食事は取らないにしてもトイレとかどうすんの？」

確かに気になることだろうな、それは。

「あそこにいるときは代謝力落とせるからする必要なくなるんだよ。冬眠してるのと同じ感じになるんだ」

「くつはつはつは」

行き成り隆盛が笑いだす。

「なんだよ？」

「くつくつ十回くらいいおもらじしたことあるよな」

「ばらすなよつ」

くつそー隆盛めつ！ 凪紗も思いつきり笑つてくれるし。

「しかたないだろ！ 前の日、水分取りすぎたりして突如、仕事が舞い込んできたときとかだつたんだから」

「ふはは、で？ 今回は大丈夫だつたの？」

「ああ、寧ろ喉カラカラだ」

そう云つてオレはお茶を啜つた。

「そりや そうでしょうね。丸一日籠もつてたら」

「丸い一日つ 今日は何日だ？」

てつくり数時間だと思つていた。オレは慌てて訊ねる。

「二十四日ですよ」

風呂場から戻つてきた風音が答えた。

「明後日はいよいよ体育祭ですね」

「体育祭なんてどうでもいい。」

「二十五日、明日は 。

「親父の命日……」

風音と凪紗がはつとなる。

「じゃつじやあお墓参りに 」

「オレ、行つたことない

墓の場所も知らねえし」

関西のどこかの寺にあるらしいが……。行く気になれない。まだ、気持ちの整理がつかない。

「大智」

隆盛は用命日さえも、学校を休んで墓参りにいらっしゃる。

「オレ、今日はやめとくよ。お前のことが心配」

「行けよ

「でも

「行けばいいだろっ！」

「…………」

また、あの笑い方 忍びを幸とするような

「ちつ」

くそつ！

気が付けば田の前の湯呑みを引っ掻んで隆盛に投げ付けていた。

ばしゃ ジュウ

「きや

廻紗の悲鳴。

「お前のそういうところが大嫌いだつ！」

仁王立ちして隆盛に罵声を浴びせ、オレは逃げるよ^{うに}血室に引っ込んだ。

「つう」

蹲ると血で黒ずんだシャツが田に入る。

「ちくしょつ、ちくしょつ……」

苦しい 悔しい。湧き出る感情をどうするかともできず、オレは畳の床を殴り付けた。

「くそつ」

「大智先輩、入ります」

風音の声。そして彼女はオレの部屋に入つてくる。

「…………」

顔を上げることもできず、オレは床に縮こまり続ける。

風音は何も云わない。その代わりに彼女がオレの横にそつと腰を

下ろす気配が伝わってきた。

「隆盛は悪くないのに」

「オレは懺悔でもするかのようになってしまった。

「オレが弱いから、勝手にイライラしてるだけなのに

そう、ハツ当りだ。

「大智先輩……」

「オレ、強くなりたい。誰にも迷惑かけないよ！」。誰の力も借りず、しつかり生きていけるように

風音の手がそっとオレの背中に触れる。優しく、包み撫でるよう

に。

「もし、そうなつたら寂しいですね」

「えつ？」

ぱつりぱつりと風音は云つた。

「だつて好きな人から頼りにされなくなるのは、きっと悲しいことだから」

「…………」

「私も姉も隆盛さんも大智先輩のこと好きだから 支えられた

り、支えたり、ずっとしていきたいんです」

「かざ

オレは顔を上げ風音を見上げる。風音はそんなオレに微笑みかけてくれた。

「そして、それは不動尊さまと共に先輩のこと見守つくださつて、いる黎須わまも同じような考え方でいらっしゃると思つますよ」

「親父……」

父さんが今でもオレのこと

「くつう

「めん、父さん。オレ、まだ父さんの死を受け入れる」ことができない。だけどもし、みんなに支えられ少しだけ強くなつて、いつか乗り越えることができたら、そのときはちゃんと挨拶にいくから それまで待つていてください……。

*

「これか……」

パソコンに向かいながら僕は呟いた。

第二次性徴不全 今は幻の人工細胞“キザン”を生み出した故トル・シンラ博士がかかつていていたと云われる原因不明の奇病。とかく細胞の異常活性に伴う成長プログラムの逸脱が起こり、見た目にそぐわない筋力を持つ、大人になれない人間が誕生するらしい。中には脳の活性も起こり、博士の天才ぶりをそれに位置付ける説もあるが あのバカそうな呪われ屋を見たかぎりでは眉唾だろう。

「よもや靈力失陥だとはな

「原因不明だというのも頷ける。

今 の 科 学 技 術 で 瞬 的 構 造 を 認 識 す る の は ま だ 難 し い だ ろ う か ら な。 「 し か し 、 自 分 も 呪 わ れ て い る 人 間 が 呪 わ れ 屋 と は

「 風 邪 ひ き の 医 者 に 風 邪 を 見 て も ら う よ う な 滑 稽 さ が あ る。 恐 ら く 普 段 は 別 の 瞬 力 で 封 印 す る の だ ろ う が

YUA は も つ と 詳 し く 知 っ て い る だ ろ う か ?

近 情 報 告 が て ら 聞 ね て み る か。

「 メ ル し よ ん ? 」

突然、パソコンがフリーズした。

「 ハ ン グ ア ッ プ ! ? 」

そ し て 次 々 と フ ア イ ル が 開 い て い く。 ま で、 何 か を 探 し て い る よ う に。

ま さ か ハ ッ キ ン グ ? フ ア イ ア ウ オ ル を 突 破 す た の か つ ! ?

「 くそつ ! 電 源 を 切 れ な い つ ! ス テ ル ス が 潜 伏 し て い た の か つ ! ? 」

目的は 僕 の パ そ コ ン か ら メ ル が 送 信 さ れ る

YUA

A か よ ! ?

ハ ッ カ は YUA の パ そ コ ン に 侵 入 す る た め に 僕 経 由 で ハ ッ

キングしているのだ。

「バッテリ を 「

プスン

ディスプレ がブラックアウトする。

「クラッキング……」

システムがほぼ全滅した。

しかも YUA からの攻撃で 。

YUA がウイルスを送り付けてきたのだ。ハッカ 諸共心中するように。

まさに蜥蜴の尻尾きり。僕を切り捨てた。

真っ黒になつたディスプレ にカチカチと文字が浮かぶ。

『 a p a r t i n g × × × 』

別れのキス 捨て科白のつもりか。

「うぬあああ

バキつ！

2

次の日、隆盛は早朝から墓参りに出掛けたらしい。オレの方はなんとなく腐つた気持ちをかえ居間ですつとテレビ

ゲ ムをやつていた。

「あつ 隆盛さんからメ ルだ」

同じく居間でパソコン（隆盛のお古）を弄くつていた凧紗が云つた。

「『お土産なにがいい?』 だつてや」

「八橋

オレの速答に凧紗は首を捻る。

「行つたの京都じゃなくて和歌山じゃなかつたかしら?」

「和歌山? じやあ蜜柑かなあ

「まだ早いわよ。収穫できるの

「それもやうだな じゃあ、なんか他にあつたか？」

「和歌山ラ メンとかなかつたかしら？」

「さあ、あつても持つて帰れねえだろ」

「そつよねえ」

「一人で考え込む。めんどくせえ。」

「もう、なんでもいいよ」

「『なんでもいいです』つと

メールを返す凧紗。

「なんでもいいとかいつてさ、ネ ム入りのキ ホルダ とか買つてきたりして」

「うわつアレ貰つてもあんま使わねえよなつて もう、話し掛けるから事故つちまつたじやんか」

「レ スゲ ムでコ スアウトしてしまひ。

「うわつ人のせい？」

「うつ」

「てか、法師さま朝からゲ ムしすぎ。体に悪いわよ」

「凧だつてパソコンずっとやつてるじやねえか オレの指摘に顔を引きつらせる凧紗。

「……だって、今までずっと学校でしかやれなかつたんだもん。せつかく隆盛さんに大ちゃん式号機（パソコンの愛称）をもらえたし思いつきつできるから。この家が今だに光じやないのが気になるけど」

「…………」

嬉しそうにパソコンを撫で回しながら凧紗は語る。

「パソオタ」

「ムツ法師さまこなげ マ ジやない」

『…………』

沈黙。

「パソコンがそんなに面白いかね」

「ゲ ムなんてガキくさいわよ。実際、小学生みたいだけど」

「何をつ！」

「何よつ！」

「ハイハイハイ」

睨み合うオレと凧紗の間に「ビ」からともなく現われた風音が割り込んでくる。

「二人とも今からお掃除するので表で遊んできてくださいね」

『えつ！？』

菩薩のような微笑みにオレたち一人は家を追いだされてしまった。「風音は家事オタクだな」

玄関前で佇んで呟くオレ。

「いやいや、それがね」

凧紗は声を潜めて云う。

「ほら、こないだ引っ越してきたときに、あの娘のダンボル開けたんだけど、そしたら物凄い本がいっぱい入っててさ」

「もの凄い本？」

「どんな本だ？」

「うん。私の口からはちょっと

思い出したのか顔を赤らめる凧紗。ますます気になる。

「あ～そうねえ……きっと、隆盛さんは趣味があつだうつとだけ

』

「今まで云うな」

何となく想像がついた。

「あの風音が……趣味、疑うな」

「ねえ」

秋風がどこか冷たい。

「これからどうする？」

「ああ、オレ病院行くかな」

「勇太くんたちのお見舞い？」

「ああ」

凧紗は少し考え込んでから云う。

「じゃあ私も行く。勇太くんにもう一度ちゃんと謝つておきたいし」

「そうか」

オレたちはとぼとぼと病院に歩きだす。

「見舞いの品、何がいいかしら？お花は買つとして、果物とか？」
そりや当然。

「ケキに決まつてんだろ」

「自分が食べたいだけじゃ？」

「…………」

ちつ巴レたか。

和毅の入院している病室を訪れる。彼は大部屋の一番端のベッドに座つて窓から空を見上げていた。

「あつチビ太兄ちゃん」

和毅がオレに気が付く。

「チビ太云うな！」

「へへ、見舞いにきてくれたんだ」

「ああ」

和毅は思つたより元気そうに見えた。それでも両腕に巻いた包帯が痛々しい。

「ここにちは、和毅くん」

凧紗が挨拶する。すると和毅はにやけて訊いてくる。

「ういつスつて、ねえねえ何？この可愛い姉ちゃん、彼女？」

「ちがつ」

オレが慌てて否定しようつとすると、凧紗はしれつと云つ。

「法師さまの嫁候補の一人よ」

「嫁つ！？」

「ちなみに、私の他あと一人いるわ。ああ、一人は嫁候補だつたか

しら」

それはもしゃ隆盛のことかよ、オイ。

「なんだか知らないけど、兄ちゃんモテるんだな……以外と」

「…………」

否定はしないがあまり嬉しくない。だつてほほ変態だもん、その人たち。自然と渡部りか子の顔が脳裏に浮かんでくる。

「お土産にケ キ買つてきたわよ。お姉ちゃんが食べさせてあげるね」

「わお～ラツキ ～あ～む

「 凪紗はフォ クでショ トケ キを和毅の口に運ぶ。和毅は大口を開けてそれを頬張つた。

「うつめ。しかも、こんな美人からのご奉仕つて、たまには入院してみるもんだな」

「一二二二口顔で云う和毅。

今しお、独りで空を眺めていた表情とのギャップ なんか力

ラ元気みたいで複雑な気持ちになる。

「あんま、ムリすんなよ」

「ん?」

「だからさ、そうやつて平氣そつな顔するなよ
「はつ」

和毅は失笑するように片方の頬を引き上げた。

「あん、男がぐだぐだ愚痴零したり、人前で泣いたりできるかよ

「…………」

よく人前で泣いて、愚痴零してオレつていつたい…………。

「だいたい、オレは腕なんかなくつたつてよかつたんだ。まつ生えればめつけもんつて感じで送られてきた薬付けてただけだし」

嘘だ。本当はそんな簡単な言葉で一蹴できるような思いのはずがない。

子供は子供なりのプライドがそう云わせているだけだ。

「寧ろ、オレの兄ちゃんの方が落ち込んでよ。チビ太兄ちゃんからも励ましといてよ」

「ああ」

「あ～む、むぐむぐ」

兄への配慮。そして和毅は嬉しそうに凧糸の手からケキを口にする。

頑固ものだな。潔すぎるほど。

いや、そうなりざる得ないのだ。明るく振る舞つて、人から嫌われないように。

それが和毅の生きる術。

ない腕の代わりに、人よりも多くの他人の手助けが必要な生き方をしなければならないものの。

たとえ屈辱に苛まれようと、平氣な顔を貫く。それが自分の誇りなのだと云いきかせ。

強い。強くなければ生きていけないのか？

オレには オレだつたら 。

「もう、行くのかよ」

ケキを食べさせ終え、少しの間談笑してからオレたちは和毅に暇を告げた。

「ああ、勇太くんの方も見舞つてやらなきゃなんねえからな」

「勇太か」

和毅の表情が消える。

「あのさ 今度、勇太に会いにいくのにオレに付き合つて欲しいんだけど」

目を伏せながら和毅は云つた。

自分の意志ではないにしる、勇太を傷つけてしまった罪悪感。一人で会いに行くには心細いのだろう。

「ああ、退院したらうちに来い」

オレの言葉に和毅はほんの少しだけ縋るような目でオレを見た。だがそれはすぐに強気なものに変わつて、

「オレはチビ太兄ちゃんじゃなくて、凧姉ちゃんに云つたんだけど？」

とクスクス笑いながら云つた。

「あつそ」

「へへ」

和毅は照れ臭そうに笑った。

どうやら口が減らないのも性分のようだ。

「あつ 大智兄ちゃん。 凪紗姉ちゃん」

勇太の病室を訪ねる。さすがに金持ちだけあつてVIPルームと呼ぶべき個室だ。

「よく、 風音と見分けつかな」

オレが感心して勇太に云うと、横にいた凪紗がジト目でオレを見る。

「法師さま、 風音と私、 見分けつかないんだふうん」

「あつ いや その 」

見分けて欲しいならどっちか髪切れ、 とは口が裂けても云えそうにない雰囲気だ。

「靈力の質は同じだけど、若干配分に違いがあるからね」

ほら、 勇太も見た目じゃなくて靈視で見分けてる。 つてか、 そんな微妙な違いが分かるんだ、 勇太。 なんでオレの周りには、 本業のオレよりも靈感が鋭い奴ばっかりなんだ?

「勇太くん…… 体、 大丈夫? 私 」

凪紗は謝罪の言葉を選んでいる。 大変なことをしてしまったという自覚があるからこそそう軽々と言葉が出てこないのである。

「もう、 気にしないで凪紗姉ちゃん」

「えつ?」

勇太が凪紗の言葉が出るより先に柔らかに許容を示す。

「僕もママももう凪紗姉ちゃんのこと懶く思つてないから」「でも……」

戸惑う凪紗に勇太は首を振つてみせる。

「人が人を傷つけるときつて、 無知すぎる」と追い詰められてし

まつて思わず行動してしまつたときと原因があるもんでしょう？」

そうかもしれない。

無知だと人の気持ちを計りかね、知らず知らずに誰かを傷つけることがある。感情を操作する方法を知らないことも。

そして心身に余裕がなくなれば、おのずと何かを攻撃してしまつものだ。

「前者は無知の知を怠ることに、後者は追い詰められた情況によりよい回避行動をとろうと努力しないことにその罪がある。でも、凪紗姉ちゃんは無知の知を知らないほど愚かではないし、苦境に耐えようと必死で努力してきた。僕はそんな情況で過失を犯してしまつて、それを後悔して懺悔している人を責められるほど偉い人間じゃないもの」

「…………」

大変感動的で素晴らしいお話ですが、

「勇太くんホントに小五かよつ！？」

オレは思わず思いつきりつっこんでしまつた。

「へへ、前世の記憶かもねえ」

へらへらして云う勇太。「冗談に聞こえねえよ、おい。ん~……この子、やっぱり怪しいよな。

「なあ勇太く

「

ガラガラ

オレの言葉にかぶつて病室の戸が開く。ランドセルを背負つた男の子（でも、やっぱりオレと同じくらいの背丈）が入室してきた。

「ヒロくん、お見舞いに来てくれたの？嬉しいなあ」

「うん」

勇太にヒロくんと呼ばれた子は柔軟に微笑んで頷く。凄く優しそうな子だな。

「こんにちは」

ヒロくんと目が合いオレは彼に挨拶する。

「はじめまして」

ヒロくんは丁寧にお辞儀をしてきた。なんだか、気品がある子だ。
勇太とはまた一味違つた人を引き付ける魅力がある子だ。

「…………」

「あれ？ でもなんか……。」

「呪い……」

凧紗が搾り出すような声で呟いた。

やはり、そうだ。この子、呪われてる。

「ごめん、今田はもう帰る」

「ちょっとまつ」

ヒロくんはそう云うと引き止める間もなく慌てて病室から出でていった。

「勇太くん、今子」

「ヒロくん？ 僕の友達だよ」

「呪われてたけど知つてた？」

「うん」

平然と頷く勇太。

「いつから？ この間、キミのクラスの子が呪われたときに見落としてた？」

「ううん。もつと前からだよ」

「じゃあ、なんでオレに教えてくれないんだよ。友達なんだろ！？」

「うーん」

オレの問いに考え込む勇太。

「なんだろ。呪いつて云つても誰かに攻撃受けてるんじゃなくて、邪氣にあてられてる感じだし、それにさヒロくんの情況を甘んじてるんだよね」

「甘んじてる？」

「そう、好きで呪われてるんだ」

「そんな奴いるわけないじゃないか！？」

「好きで呪われてる奴なんかいてたまるか！」

「だからね。えーと……そうっ！ リストカット症候群

そんな

感じ！！」

「リス

？」

なんだ、それ？

「手首を切ることが快感でやめられない人のことよ」
凪紗がオレの心の声を聞いたが」とく説明してくれる。

「自殺願望者つてことか？」

「いや、そうじゃないのよ。自傷行為つていつの。自分がね今生き
てることとか、自分と世界の関係とかが実感なくなつて 痛み
とか流れる血とかで、自分取り戻せた気になつたり どうしょ
うもない破壊衝動を人にぶつけてしまつんじやないかつて恐くなつ
たりしたときとかにやつたり 血が抜ける感覚とか、首閉めて
血が頭に上つていく感覚とかが気持ち良くなつて癖になつたりする
の」

「そんな奴

」

いるのか？ そう続くオレの言葉。だが、凪紗のその口から出でき
た言葉に絶句する。

「私もそうだつたから」

「つ！？」

「私も風音に呪いを移そと決意するまで、どうしようもなくてや
つてたから」

胸がざわざわする。心が感情で押し広げられて破裂しそうだ。

「今は

」

恐い。

「今は違うんだろ？」

肯定してくれ！

「大丈夫よつ！ 今は違うわ！ 今は辛くてもその気持ち分かってくれ
る人たちがいるから」

「…………」

ほつとした。安心と脱力が同時に訪れる。

「ほら、健全じやないから 治さなきやならないことだら？」

「そう？」

聊か責め立てるように詰問するオレに逆に勇太は訊きかえしてくる。

「そんなに健全じゃないこと？」

「だつてそうじやないか！」

「でもさ、そう決め付けられるほどみんな健全なの？」

「えつ？」

「たとえばさ、携帯電話を忘れてしまって、いても立つてもいられなくなる人とか結構いるでしょ？『キミがいなくちゃ生きていけない』とかプラトニックかさにきて、恋人に依存する人とか。夫に相手にされなくなつてドロドロに子供にかまつてダメにする青い鳥症候群。ゲームとか漫画とかにはまつて現実見ようとしない人。そう、買物依存症とかもあるよね」

「つー？」

『大智はあプチ買物依存症だ』

隆盛の言葉が頭に響く。

「そういうのつてさ、人口比率の問題とか、折り合い付けてなあなあでなんとかやっていくとかさ、みんなそうやって生きていつてるんじやない？健全じやないとか『病気』とかレッテルはつてさ、そんなんに傲慢になれるほどみんなちゃんと生きてるの？」

「そう　　だけど　　」

「そうかもしれないけど。

*

思わず逃げ出してきてしまった。

「…………」

どうせもう御陰勇太には僕のことは見透かされている。逃げる必要はなかつたようにも思えるけど……。

「アソツの前で醜態はさらせない」

御陰勇太にみつともないところを見せるわけにはいかないんだ。

「待つて！」

病院を出てトボトボ歩いているところに、背後から声をかけられる。

振り替えるとあの呪われ屋が僕の方へと走ってきた。

「…………」

改めてみると奴は凄い靈力を纏っている。神々しく黄金に輝いて見える。だが、それは奴の本来の靈力ではない。どこからかその莊厳な靈力を調達し、自身の呪われた靈力を押さえているのだ。他の靈力を取り込み操る、そういう意味ではこの呪われ屋と僕は似ているのかもしれない。ただ、その使い道も、その必然性もまったくもって別のところにあるが。

「はあはあ キミに……キミとちょっと話がしたいんだ」

呪われ屋が肩をぜいぜいいわせながら僕に云つた。

「話ですか？」

「うん」

どうせくだらない話だらう。

でも、気晴らしにはなるかもしない。

この似非坊主に人の心と向かい合ひつことがどうこうことなのか、存分に教えてやる。

*

勇太の言葉に空恐ろしくなった。

呪い

それが人の中に渦巻く感情の產物であり、自分を支配する精神の脆さの証明なのだと改めて気付かされる。

オレは爆発しそうな感情を行動に代え、勇太の病室を飛び出していく口くんのもとへと走っていた。

「いいですよ。そこベンチでお話しましょつか

「ありがとう」

よかつた。

ヒロくんは快く承諾してくれた。

「オレ、不破大智ってなんだけど

「縫取織ヒロトです」

なんだろ。

凄く聞き取りやすいっていうか、この子の声を聞くと、さつきまで動搖していた気持ちが落ち着いてきた。

確かにこの子の体の中に邪氣の坩堝を感じる。それでも不安定の中の安定というか、ぐちゃぐちゃに積み上げられた荷がかえって均衡を保っているような、そんな高揚する感覚を覚える。

やはり勇太の云う通りなのか？

「オレ、こう見えてお坊さんの端くれでわ」

「ええ、知つてますよ。勇太くんに聞きました。呪われたときに救つてくれたつて」

「うん……それで、云いにくいんだけど」

「僕の呪いが分かるんですね」

核心をつかれどきつとする。

「勇太くんが何か云つてましたか？」

「あつえつと

なんつて云つたらいいんだろう？

「その……キミが呪われている情況に甘んじているつて

「その通りです」

爽やかに首肯するヒロくん。

「あの、今はキミに特別な症状は出でないみたいだけじ」

「ええ、僕は周囲の靈力を取り込む体質なんですよ。最近は正常な靈力のところつて少ないじゃないですか。だから自然と邪気が体に溜まるんです。でも、抵抗があるからか、多少ストイックになる程度ですんでます。寧ろ精神安定に役立つてるようだと思つんですよ。そういうの共生つていうんですかね。ほら善玉菌みたいな感覚です

か

邪氣を逆に利用 もしそれが本当だとすればそれほど悪い情況ではないのかもしれない。だけど。

「うん。キミの云つてることは分かるんだけどね。

「御つて結構大変なことだろ?だから、今はよくとも急に豹変して大

事になるかもしないから……オレの云つてること分かる?」

「ええ、分かります。僕のこの呪い、お兄さんがどうにかしてくれると」

「そりなんだ!やつぱり危ないから」

理解してもらえた。勇太、がんばること云つから心配してたけど、ちゃんと言せば分かるじゃないか。

「お兄さんは優しんですね」

「えつ?いやそんな」

讃められた。なんか嬉しい。

「でも余計なお世話です」

「つ!？」

「さつきも云つたけど僕はこの情況を甘んじてはいるんです。後の災

いが心配されても、僕はこの状態が気に入ってるんです」

「だけど

オレは狼狽える。分かつてもらつたと思つた矢先のこれ。やつぱり一筋縄ではいかないのか?

「気に入つてはるかもしないけど、危ないのに何もしないのは間違つてるだろ!?」

「お兄さんは潔癖性なんですね。それはとてもいいことだと思います。でも、僕はきれいなものだけを糧としていけるほど恵まれていんです」

「どう云つて?」

「呪い 好きなんです」

ヒロくんは変わらずの笑みで囁いた。

「好き?」

「狂つたもの、醜いもの、呪い

好きなんですよ、僕

「…………」

ほんの少し恍惚を顕にするヒロくん。

「狂つたものが好きって　あの、オレ分からなければ……それ

はなん

？」

疑問が次々浮かんでるのに言葉にすることができない。

「気持ちがいいんです。そういうの肌で感じると」

「気持ちがいい？」

どういうことだ？わけが分からない。

「お兄さんには理解できなくて当然です。可哀相に」

可哀相、オレが

？」

「ふふ、第一次性徴不全　これがお兄さんの体を支配している呪いの名前です。」存じでしたか？」

「第一次性徴……」

「まさか自分の体が正常だなんて思つてないですよね？」

それは

！

「ふふ、その年にもなつてマスもかけないくせに、自分が不能だと氣付かないはずがありませんもんね」

「今、そんなこと関係ないだろつ！？」

怒鳴り声を上げてしまう。

恥ずかしかつた。なんで、会つたばかりの子供に人のそんな体のことまで　。

「関係ありますよ

「つー？」

「お兄さんはこの呪いのために大人になれない体です。つまり、一生快樂というものに無縁です。そんなお兄さんに僕の気持ち、悦を手放せない人間のこと、理解できないでしょ。そして、人の性癖を他人にとやかくいわれるとどういう氣分になるか、これで分かつたでしょ？」

顕になる敵意。近くを通る車の排気ガスが妙に鼻に付く。

あれ？なんでこんなことになつたんだ？頭が「こちや」「こちや」して、

気持ち悪い。

*

ふん、滑稽だな。

呪われ屋のくせに、僕が言霊にのせてお前を呪つてることも気付かないなんて。

「ああ」

呪われ屋は文字通り頭を抱えている。いいざまだ。

「呪われてるのを助けたいのに 助けたいだけなのに な

んでこうなるんだ?」

ふん、お前のような弱者が軽々しく僕に触れようとするからだ。

「そもそも、なんでオレの体のこと」

「和毅さんの一件ですよ。あなたのあの異変を見て気付いたんです。

過去に症例がありますからね」

「あつそっか」

「さて、ここからが問題です。僕があの事件の被害者でもなければ、目撃者でもないとすれば」

「勇太くんを呪つてるのはお前か……」

呪われ屋は驚愕というより、自身で云つてこられたとの半分も理解していない感じで呆然となつていて。

「(じ)明察 とこつても、これだけヒントを出して気付かない方がおかしいですけど」

「間違つている」

呪われ屋は声を震わせて云つ。

「こんなの間違つている」

「いいえ。間違つてませんよ。なぜなら人を呪つてはいけないという法律はないんですから」

「法律?」

「ええ。四年前、この国で爆発的に特殊能力を持つものが増える事

件がありました。それから呪いは抽象的な恐怖から、現実の驚異となつた。でも、この国を動かしている薄鈍の大人が危機感を覚えて、法ができるのは恐らくあと数年はかかるでしょう

「そんなことじゃない、モラルの問題だ」

呪われ屋は心の苦痛に顔を歪めながら、それでも僕を説き伏せようとしてくる。案外しぶとくていじめがいがあるな。

「じゃあ、訊きますけどなんで人を呪つたらいけないんですか？」「人を傷つけることも、自分を危険に曝すこともよくないことだろ！？」

「そうですか？では、あなたは人を傷つけたことはないんですか？」

「それは

顔面蒼白にして口籠もる呪われ屋。

「あなたは今生きている情況に誰一人として犠牲を出していないのだと、胸を張つて云えますか？」

「それは……それは云えないけど。自分から傷つけようとか思つてるわけじゃなくて……だつてそれは……」

「そう、故意じゃない。不可抗力というやつです。でもそれは未必の故意を誤魔化している言い訳にすぎないでしょ？」

「未必の故意？」

今日々の高校生はそんなこともしらないのか。

「ええ。罪を意図的に望まないにしろ、自分のしたことからなにか問題が発生するかもしれないと思いながら、そうなつても仕方ないと認めて行動する心理状態のことです」

「…………」

「分かりませんか？つまり、人は理想を語りながらも、生きるために何かを犠牲にしなければならないと認めている。その諦めが社会に不協和音を生み出し、罪と呼ばれる事象が発生していることも知つていて。そう犯罪は発生しても仕方ないとみんな思つていてるんですよ。社会の歪みをどうにかできるほど人は強くないから」

「あうつ」

やつと理解したか、この脳りん。

「自分たちを脅かす犯罪者は、過去や現在や未来、人類の未必の故意のツケだということですよ。これこそ呪いの連鎖とは思いませんか？」

「呪いの連鎖……」

「こういふことがありますよね。一つ大きな事件が起きると立て続けに同じような事件が起るなんて。アレはね、メディアという媒体が誰かさんの背中を押しているんですよ。自分と同じような境遇の人間を知つて、感染してしまうんですよ、心が。そう、テレビや新聞やネットが呪いの依代となつていてるんですよ。自殺者や犯罪者を助長させる呪い」

「はあはあはあはあ」

呪われ屋の息遣いが荒くなつていぐ。壊れるがいい。脆弱な人間の癖に僕に楯突いたことを悔やみながら。

「ああ」

「そうだ、テレビといえばなにか大惨事が起きたとき、片方の脳では被害者を哀れみながら、心のどこかで死者の数がどんどんとカウントされていくことに少なからず興奮を覚えることありませんか？酷いとか口では云いながら、自分より可哀相な人たちを見て高揚する。そういう感覚に近いと思うんですよ。僕が感じている気持ち」

「うぐう」

呪われ屋は吐き気をもよおしたように口を押さえる。

「同情と哀れみは優越を得るための糧であり、奉仕と救済は支配を得るための手段です。人は善という行為を以て他者を掌握し、愛といふ甘美な言葉で他人を縛る。教育は洗脳、執着は暗示の賜物。それが呪い。そう、この世界は呪いに満ちている」

「呪いに……満ちてる？」

「そうです。靈力の多い少ない、故意か未必の故意かの違いはあっても、誰しも呪いに手を染めている。なのに何故、その情況を楽しんでいるという理由だけで僕が間違っているんですか？」

「僕が……間違っているんですか……」

呪われ屋は鸚鵡返しに僕の言葉を反芻すると、がつくりと頑垂れた。

「…………」

ふふ、落とせた。が、これは一時的な衰弱で終わるだろ。僕の力だけではこれが精一杯だ。黄金の靈力がギリギリのところで防いでいるしな。

でも幾分憂さ晴らしにはなつたかもしれない。

僕はベンチから立ち上がり、

「もし、僕の問い合わせに納得の行く答えを返せたときは お兄さん

の救い手に……素直に応じましょ」

「…………」

答える気力も失つた呪われ屋を残してその場を後にした。

3

箸が進まない。風音の作ってくれた料理は今日も絶品だとうのに。

「…………」

オレは一・二口大根の煮付けを口に運んでから、銜え箸で固まつていた。

「あの、お口に合いませんか？」

風音が心配そうに訊いてくる。

「あついや、そうじやなくて ちょっと食欲がないんだ」

あの子の言葉が全身にこびり付いている。食道を塞ぎ、胃を縛り付けているみたいだ。

「何か心配なことでも？」

「いや

「なんでもない そう言つ掛けると、

「法師さまっ！」

凪紗が箸をテ ブルに叩きつけ怒鳴った。

「ウジウジするくらいなら、言葉にしてよ！吐き出さなきや溜め込むタイプでしょ、法師さまは！？」

「ごめん」

あまりの迫力にオレはたじろぐ。

「どうせあの子になんか云われたんでしょう？あの後からだもん。法師さま沈んでんの」

「うん」

「何、云われたの？」

こんなこと、凪紗に云うべきだらうか？でも、オレ適当に誤魔化すとかできないし。

「なんで人を呪つたらいけないのって訊かれた」「つ！？」

「あの子だつた。和毅くん呪つて勇太くんを殺そうとしたの」「そうだつたの」

そう驚きを洩らす凪紗の顔が見れない。

「オレ、人を傷つけるのはよくないだろ？って云つたんだ。そしたら

「そしたら？」

「そしたら、あんた人のこと傷つけたことないのかよつて云われた」「.....」

「その後、色々なんか云われて、全然わけわからなくなつてあの子が云うにはみんな多かれ少なかれ呪つてるつて.....それのになんで自分だけが間違つているんだつて オレ、答えられないよお」

涙が止まらない。

和毅は男は人前で泣いたりできないと云つた。

自分でも薄々気付いていたけど 今日、きつぱりとあの子に

『お前は大人になれない可哀相な人間』なのだ宣告されてしまった。オレは大人に 男になれない。

だから、ずっと弱いままなのか？

「うつぐ うつ ぐす」

食卓に響くのはオレの嘆きだけ。

ときが死んだような時間が流れる。

「私は」

やがて凧紗がときを復活させる。

「私は 私も、なんで人を呪つたらいけないのかとか分からない」

凧紗は喉を震わす。

「決して呪いを肯定するわけじゃないけど。でもね、もしあのとき風音のことを呪わないで、一人でずっと悩んで苦しんで、行き着く先が自殺とかだつたりなんかしたらって思うと」

凧紗は涙を呑んでいる。自分が泣ける立場ではないと。

「凧」

姉が妹を呪つた。凧紗はそのことをずっと悔やみ続けている。だがもし、凧紗が苦しみの末に自ら命を絶つていたとしたら、それは風音にそれ以上の嘆きと罪の意識を背負わせていたことだろう。「私はすごくいけないことをした。いくら懺悔してもそれは償いきることはできない。だけど今、そう思える自分は誇りたい。私がこんな風に思えるようになったのは法師さまに出会えて、法師さまが私を救つてくれて、今このときも私の横に座つていてくれるから。それだけは決して揺らがない真実だから」

「うつぐうつ」

毎日、毎日、生きてて不安で 自分のやつてきたことが正しいのか分からなくて これから先、どうなっていくのか全然見えなくて それでも、そんな言葉を貰えるオレは 。

「うぐつ……それが ひつ……オレの答えだ……」

ああ、オレはあの子を ヒロくんを救いたい。ただ、それだけ。

「姉さん、大智先輩

ありがとうございます」

風音が深々と頭を下げる。

*

壊れたパソコン　自らの拳でひしゃげたディスプレイの前に佇む。

何もすることが思いつかない。

夜が……長すぎる。

「くそあ」

YUA　世界で唯一信用がおける人間だと思っていたのに。

『突然だけど、こんにちはヒロくん。私はYUA。特殊な靈能力を持つキミにプレゼントをあげるね』

彼女からの初めてのメールを思い出す。

『キミは選ばれた人間だから』

彼女はいつも僕を讃えた。

『ヒロくんには私がついてるよ』

いつも優しかった。

『大好きだよヒロくん』

僕を必要としてくれた。

『恐がらないで。キミの気持ちを世界中に分けて上げてるだけだから』

なのになんてっ！

「…………」

苦しい。もう、この手があなたに届くことはない。

「ちくしょう」

呪われる、呪われる、呪われる！

『呪い……そうだ、今日奴の見舞いに来ていた女』

あの女の体、どす黒い靄で渦巻いていた。御神木の呪いには劣るもの、あれを僕が有効に使えば大量の人間を呪うことができる。

「ふふ」

僕は机の引き出しを開け、通販で手に入れたスタンガンを手に取る。

「ジイ

迸る閃光。

誰にも僕の呪いを否定なんかさせない。させるものか。

4

「オッハ！今日は運動会日和だな」

隆盛がハイテンションでオレのことを迎えにきた。

「お前、実行委員なんだから先に行かなくていいのかよ？」

「式を先にやつてるから全然オッケー！それより土産買つてきたぞ。

「これで機嫌治せ」

「これははつ！？」

「まさかっ！？」

隆盛から手渡された土産を手にし驚愕するオレと廻紗。

『ペナントつ～！』

そう、三角形で和歌山とか刺繡されてあつて壁に飾る代物。

予想を遥かに超えた 貰つても微妙な気分になる土産物 を拵え

てきたよ、この男。

「さすがね、隆盛さん」

「ああ一筋通つた変態だ、こいつは」

オレと廻紗がぶつつくたばつていると後ろで見ていた風音が感嘆の声を上げる。

「うわあ素敵なペナント。ちょうど居間の壁が寂しいと思ってたんですね、助かりましたね」

心底目を輝かしている風音。

「てか、飾るんだ」コレを。

「そりだら、そりだら」

風音の「メント」に大きく頷く隆盛。

「ほら、この蜜柑の刺繡がまた秀逸で」

「ええ、ホントに。そうだつ！柑橘系の香水を染み込ませてみたらいいかもしません」

「おおつそいつはエレガントだな！」

「なんか一人で盛り上がつてゐし……。

「そうか……隆盛と風音 一人は周波数が同じなんだな、電波の。

『ただ今より、第四十九回・真鎧高校体育祭を開始します』

ポンポンと打ち上げられた花火の音。古くさいスピーカーからパチンコ屋の開店したときよろしく派手な曲が流れ、運動場に集う生徒や観客の拍手が鳴り響く。

「…………」

そんな活気ある情景をオレはテントの中から眺めていた。

連日の疲労を考慮に入れ、結局オレは医務用テントで見学することにしたのだ。

それはつまり、

「ふふ、ラツキ ねーキミと一緒に過ぐせるなんて。不破大智くん？」

渡部りか子が一日横にいるという情況なわけで。

「いいか！？」

「？」

早くも躊躇寄つてこようとしている渡部にオレは凄む。

「オレに指一本でも触れてみろ！絶対、スクハラで訴えるからな！」

「？」

「スクハラ？」

「校内でのセクハラだつ！今、結構問題になつてゐんだからな」

「うん。スクール・ハラスメント（校内での嫌がらせのこと）で

しょ。知つてゐるけど、またかキミのお口からそんな高等な単語が出てくるなんて……」

首を捻る渡部。くそつバカにしゃがつて。

「上条くんの入れ知恵ね」

「うつ」

その通りだつたりなんかして。

「bingoだよ～ん。りか子ちゃん」

隆盛がピースしながら医務テントにやつてきた。渡部はいい年こいて膨れつ面して、

「もうつー！ いけずう」

今にもパンパンとか云いそうだ。

「はつはつはつ目が届かないといつてオレの可愛い大智にちよつかい出されてもかなわんからな」

「誰がいつお前のものになつたんだよつー！」

「このう照れ屋さんめ」

隆盛が椅子に座つてゐるオレの頭を撫で繰り回す。ああ、もう鬱陶しい。

「何しに来たんだよ、お前」

「ああ、そうそう。走つてるときとかにさ、邪魔になるから法具を預かつてもらおうと思つて」

そう云つて隆盛は手にしていた法具を外した。

「大事に」

キン

「ん？」

派手な音を垂れ流してゐた運動場のスピーカーがハウリングを起したと思つと急に音楽が止んだ。その代わりにジイジジッとノイズが入り始める。

「変だな？」

「ああ、妙　　うつー！」

突然、隆盛がうめき声を上げ頭を抱えて膝を付く。

「どうし つー？」

「うつ

うあが

ぐう

」

訊ねる間もなく隆盛は地面に崩れ落ちた。

「どうしたんだよ、隆盛つー？」

ジイ ジジッ

ノイズが頭蓋に響く。

「うつ

「うつ

頭が微かに痛い。

ガタツ

「渡部つー！」

渡部が椅子から崩れ落ちた。氣絶したようだ。いや、渡部だけじゃない。視界に映る人間全てがバタバタと倒れていく。

「くつ

この感覚。以前体験したことがある。

「.....凪.....」

*

「うつうん？」

女が目を覚ます。

「こつここは？」

「体育館倉庫の中ですよ」

声を掛けると女は斜め前の跳び箱に腰掛けている僕を見上げる。

「あなたは？」

「動かないほうがいいですよ」

チリチリ

立ち上がろうとする女にスタンガンを見せ付けた。

「.....」

「それにしても、都合よく一人きりでいるところに出てくわせてよかつた

僕は女に近付く。彼女は怪訝そうに僕の顔を見上げるだけに止まつていた。怯えているのだろうか？

「うん？ おかしい」

黒い靄が見えない。昨日は確かにこの女から溢れんばかりの邪気を感じたのに。

「あなた、昨日呪われ屋と一緒にいた人ですよね？」

「それは私よ」

「つ！」

背後から声がした。振り向くとそこにはいる女と同じ顔をした女が入り口に立っている。

「お姉さまっ！」

「姉？ 双子か？」

「そう。あなたが用あるのは私の方でしょ」

確かに。昨日、見かけたのはそつちの女の方だ。辛うじて押さえられている邪気が今にも溢れださん勢いで体の中に渦巻いている。妹は放してくれないかしら？

「そうですねえ」

僕は姉の方を警戒しつつ、妹にスタンガンを押しつけて思案する。

「さつさとしなさいよ」

「つー？」

「あなたに協力してやるから、妹を放せつひとつてんでしょうが！」

「ほう、意外なことを云う。

「あなたには僕がして欲しいことが分かつてるんですか？」

「呪いたいんでしょ？ 私の呪いを使ってみんなを呪いたいんでしょ？ 勇太くんの前に法師さまのことなどをどうにかしたいから」

「…………」

大した靈感だ。全てお見通しか……。

「あなたはそれでいいんですか？呪いに利用されて」

「はん。可愛い妹に一度もそんなもの喰らわせられるよりましまじよ？ 火傷とか残らないでしようね？」

「服の上からでしたから、それは大丈夫と思いますけど……」

「この女、妹のために僕の呪いに加担するというのか。

「本当にいいんですか？」

「いひつて云つてゐるでしょ。あんたさ、私が勇太くんのこと呪つた

から、それに触発されて勇太くんのこと狙い始めたんでしょ？」

「つー？」

こいつが先に御陰勇太を呪つた張本人？

ほんとかつ！？

厭、これだけの靈力があれば確かにあいつにも通用する呪いをかけられたかもしれないが。

「さんざん失敗していい加減ストレスたまつてんでしょ。だから、お姉さんが協力してあげようつて云つてゐるのよ」

「お姉さま」

妹が心配そうに声を洩らす。

そういうことか。

「あなた、あのバカな呪われ屋がなんとかしてくれると計算してるんですね？」

「はん、カスガ」

視線を逸らし毒突く姉。分かりやすい。

「ふつ強がつて あなたが奴のことをとことん信頼しているのは分かりますよ。でも、あなたと僕の共同の呪いをどうにかできるほど果たして彼は強いですかね」

「さあどうかしら？ ただね、法師さまはあなたのことを救いたいのよ。あの人はね呪われた人も呪つた人も両方救いたいっていうどんでもないお人好しだから」

ただのバカだと思うが。

「で、あんたのこと救うためには、あんたが全力出しきつて、それを法師さまが受けとめるしかないと思うわけ」

「一利ありますね」

面白い。ほんとに面白い。

あの糞弱い呪われ屋がこの僕を受けとめられると、

「行つていいですよ

僕は妹に押しつけていたスタンガンを離した。

「お姉さま……」

「何も云わないで、風音。あなたは法師さまのところへ

妹はいつときの間、辛そうに姉を見ていたが、やがて小さく頷き

駆け出した。

「さあ始めましょうか?」

僕は女の黒い靄の中心、胸の中に右手を翳す。

「ええ、法師さまがきっとあなたを救ってくれるわ

女はにっこりと笑つて僕の頬をそっと撫でた。

5

「隆盛……」

「うがあ

「

隆盛だけ明らかに他の人間たちとは症状が違う。殆どものが氣絶しているにも関わらず、苦しそうに藻搔いている。

靈力過敏症か……くそつ！法具を外してしまつっていたから。

「これしろ

オレは隆盛の腕に法具を填める。

「はあはあはあ　すっすまん

「

肩で息をして礼を云う隆盛。法具で防御力を高めても、一度起つた発作はすぐにはひかない。

どうしたものか、この情況。オレも辛うじて防げているとはいえ、頭がチリチリしてゐるし。

「不破つ！－！」元いたか

「高橋つー！」

高橋千佳子が生徒席の方からやつてきた。

「なに」とだ、これは

いつものように険しい表情で訊ねてくる高橋。

「呪いだ」

そう呪い。しかも、理由は分からぬが凧紗の呪いが広域放射されている。

「それは分かるが……」

「それよりお前はなんともないのか？」

高橋は偉く丈夫そうにしているが。

「あ？ これは精神を蝕むタイプの呪いだろ？ 私は普段から、他人の心を覗かないように精神防壁を張つてから防げているのだろう」

「そうか、こいつ特殊なESPがどうのって云つてたな。」

「とにかく呪いの根っこを探さねえと」

「大智先輩っ……！」

風音が駆けてくる。

「風音っ！ 凧はどうしたっ！？」

「それが…… それが……」

風音は泣きながら縋り付いてくる。

「落ち着けよ！」

「はい。私がスタンガンを持つた少年に襲われて……それで、姉が身代わりに……」

「スタンガンを持った少年？」

「あの子か……。

「どこにいる？」

「体育館倉庫の中です」

「そうか。高橋、風音を頼む」

オレは辛そうな風音を高橋に預けた。

「もし、これ以上酷くなるようなことがあればお前は神主さまを呼びに行つてくれ」

「それはかまわんが…… 一人で大丈夫か？ 私にもなにができる」と
が

高橋はあの御神木の邪氣の中でも生き残れることができたほど

実力の持ち主だ。手伝ってくれれば心強いが。

「いんだ。あの子は ヒロくんはオレが救わなきゃ。きっと、

凪紗もヒロくんもオレのことを持つてゐるだろ?」

「そうか

高橋はほんの少しだけ頬を緩め頷く。

「お前、見た目と違つて男らしいやつだからな

男らしいか どうだろ?な……。

「胸張つて行つてこい」

「ああ

「そうだ。胸を張つて オレはヒロくんを救いたい、それだけ
だつて凪紗が気付かせてくれたんだ 呪いに埋もれた二人のも
とへ向かうんだ。

*

「くつ

「この呪い 頭が吹き飛びそうだ。

「はあはあはあ

」

女の呪いを僕の体を通して広域放射したのはいいが、呪いの威力
が強すぎて、僕までおかしくなりそうだ。

この女は普段からこんな呪いを抱え込んでいるのか。

「はあはあはあ けつこつ……はあ きついでしょ

呪いを吐き出す感覚が快感なのか、女は悦びに顔を歪めながら囁
いた。

「ふふ、こう見えて丈夫なんですよ」

「はあ意地つ張り。はあ……そつこつこつは法師をまと

は

あいい勝負

「凪紗つ！」

やつと來たか。

「はあはあはあ

法師さま

はあはあ

「ふふふ

ヒロくんは薄笑いを浮かべ、凧紗の胸を驚掴みにしている。凧紗は顔を赤らめて息を上げてるし。

「なんかエッチいな」

「バカ云つてんじやないわよ！！」

オレの素直な感想に怒号する凧紗。

ううん云い得て妙だと思うんだけど。

「法師さま はあ 後は はあ まかせ た

……

「凧つ……」

凧紗はがつくりとその場に倒れこんだ。

「ガス欠ですね。でも、これだけあれば十分だ。僕がしつかりとコントロールすれば、学校中の人に間の脳味噌を徐々に、しかし確実に破壊することができる呪いです」

ヒロくんは相変わらず穏やかな体で語りている。

「ヒロくん……」

「さて、お兄さん。昨日の僕の問いかに、納得できる答えを用意してくれましたか？」

『どうして人を呪つてはいけないのか？』その答えを用意する

とはできなかつた。

「オレ、頭よくないからキリを論破することはできないよ

「でしようね」

ヒロくんは嬉しそうに頷く。

「だったら僕は僕の道を突き進むのみです」

「ああ、オレもオレの道を突き進むのみだ」

「それでいい。これが正しいカタチです」

ヒロくんの目が剃刀のように鋭くなつた。

「僕もお兄さんも大局に見れば間違つていない。だが決して相成れない。ならば真っ向から対立するしかないんです。そう、戦いこそ太古より培われてきた生命の掟。正義を計るための正当なる手段だ」

「いいや。それは違う」

「なに？」

オレの反論にここで初めて彼の歪む顔を見た。

「だつてオレはキミと対立しているとは思わないから」

「それは面白い意見です」

「そうかな。キミはそうやって強そうな言葉を並べてはいるけど、本当に強いんならそんな必要ねえじゃんか」

「つー？」

「理論武装するのはホントは纖細な証拠。キミが強がれば強がるほど、オレの目にはキミが『助けて、助けて』って云つてるようになが見えないつー！」

そうだ。あのとき勇太が云つていた。苦しみの末に人を傷つけてしまうと。だつたら、人を傷つけてしまう人は、一番に助けを必要としている人のはずだ。

「助けてやるつーぜつてえヒロくんを助けてみせるからー！」

「そう　ここまでバカとはね……」

そう呟いてヒロくんは両腕を上げる。

「自分の甘さを後悔して死んでください」

オケストラの指揮者のように彼の腕が動いた瞬間、
「うがあ」

周囲に立ち籠めた屈紗の呪いの邪気がオレに集つて襲つてくる。

「あがあ」

「ははは、痛いでしょ？ 苦しいでしょ？ 僕を救うなんでお兄さんにはできないよ」

ヒロくんの高笑い。頭が　　力チ割れそつだ。

「うぐうああ　　」

「お兄さんの次は、御陰勇太だ。あの鬱陶しいガキを血祭りに上げ

てやるから

「うがあ

」

「あははははははははははははは
目が靈んできた。意識が飛びそつ。

」

「あはははははははははははは
アレ?

歌が聞こえてきた……。

異様なほど勝ち誇つた笑い声の合間に縫うように。
古びたスピーカーから　頭の中に入り込んだ異物の芯から
。

「あははははははははははは
男の子のか細い歌声が

」

ブランコにさした

もつと小さかつた頃、

友達の『バイバイ』が

とても厭だつた

これはヒロくんの心か!?

あの日の夕日とか

レンジで暖める

『飯が物凄く不味くて

これは凧糸の呪いの作用！？

帰り道に聞いた

むやみに笑い声が聞こえてくる
テレビにむしょうに腹が立つた

流れてくる、奥底に眠っていた孤独が。

あの人

急に恐くなつてお母さんに
『帰つてきて』つて電話したら
謝られて電話は切れた

うう。

町に溢れてる

お母さんもお父さんも
家の口 ンを払うために
遅くまで働いているらしく

涙が止まらない。

色も旋律も

でも僕は知ってる

お父さんは日曜日に

趣味のゴルフに行っていて

お母さんは脇繰りで

高いバッくを買っている

寂しい、寂しいよお！

喜びと悲しみを

僕は家やゴルフやバッくより
価値がない人間なんだと思つ

違う！違う！！

僕にくれたの

四年前くらいから

黒い靄が見えだして

去年、あの人

僕に力の使い方を
教えてくれた

呑まれる ヒロくんの悲しみに。

その戸を叩き

黒い靄を掴んで近所の犬に
塗りたくつたのが最初だつた
犬は数日苦しんで死んでいった

だめだつ呑まれちゃ！

帰らぬ、ただいま

最初は恐くて泣いたけど
落ち着いたら気持ちいい気がした

俺は今でも父さんに支えられているー隆盛に助けて貰つてゐー

縋り付く

それが呪いだと氣付かされ
みんな呪われればいいと思つた

凧紗や風音はこんな俺のこと必要だつて云つてくれた！

人形さえも

御陰勇太に懐かれるのは

本当は嬉しかつたのかかもしれない

でも、それを認めたら

僕がとても寂しい人間だと
気付かされるから

今度はオレが、こいつのことを
！

壊して行つたの

だからいらない

惨めだと、そんなの

厭だから

ブランコにさした

あの日の夕日とか

帰り道に聞いた

あの人の声

救つてやらなきや情けねえじやねえかよ！..

喜びと悲しみを
色も旋律も
町に溢れてる
僕にくれたの

卷之三

「ああああああああ」

歯食し継ごてても救ごてせらなきヤ
に申し訳ねえじやねえかよ！

一
なめんなあ

まだ何も見えない。それでも分かる。

その口を叩き

返らぬ、
ただいま

縋り付く人形さえも壊していったの

か細く啜り泣いてる子がいる」とぐらぐら。

「はあああ　のつまく　わんまんだ　せせらだん　かん　我、
金剛に帰依す。一切の禍を滅さんと、衆生の業を括り給え！」
邪氣を括る。学校に毒めく邪氣。そして、ヒロくんの中に混在し

つづけた邪気を。

「ううううう」

ヒロくんが小さく声を上げた。

「消える」

「えつ？」

「僕が消えちゃう」

「どういう意味だ？」

「僕が消え」

ヒロくんは何かを手繰り寄せるように天に両腕を翳す。

「いやつ消える、僕が

爪先立ちになり、

「僕が消えちや

やがて少年は崩れ落ちた。

「おん」

邪氣を封じ、ぼんやりしてオレの意識も消えていった。

8

目が覚める。辺りは暗かつた。
空氣に広がりを感じる。

ここは本堂だ。

「うー！」

オレは慌てて本堂から出る。周間に灯る光を目指し駆けた。

「どうなつた！？」

「大智」「大智先輩」

隆盛と風音が座っていた。隆盛はオレに疲れた笑みを見せて答える。

「ああ、体育祭は中止になつたけど、お前のおかげでみんな助かつたよ。凪紗は検査入院してるが

「あの子は？ヒロくんは

「

「あの子は」「

隆盛はオレから田を逸らして口籠もつた。その行動から吉報は期待できないと悟る。

「どうなつた?」「

恐る恐る訊ねるオレ。隆盛は深いため息を吐いて、

「あの子は今、意識混濁状態にある」

「意識……混濁?」「

その意味が把握できなく聞き返す。ただ、よくないことだということは分かつた。

「なんだよ、それ!?」「

「昏睡まではいってないが、いまいち意識がはつきりせずに外界と交流できない状態になつている」

「どうして……そんなことに……」「……

オレはその場に崩れた。

「大智先輩っ!」

オレの傍らに風音が寄り添つてくる。

「なんで」「

オレ、また間違つたのか?救えなかつたのか?

「まだ詳しくは分からぬが、医者の話によると、或いはあの子は数年前からあの状態だつたのではないかって」「

「どういう?」「

「これはあくまでオレの見解だが、あの子はとうの昔に心を閉じていたんじゃないかな。本当は鬱病だか統合失調だかの精神失陥について脳の機能はすでに衰えていたんだ。そこにあの子の体質で邪気が寄せ付けられて、停止している脳に刺激を与えていたんじゃないだろうか?」「

「じゃあ、あの子の人格と思つていたものは実は呪いによってできたもので、本当の人格はすでに壊れていたということですか?」

「人格という程でもなくとも、脳機能の補正では大部分をしめていたんじゃないかな」

「…………」

『 駆け 役に立っているんですよ』あの子の言葉を思い出す。

そしてあの『僕が消えちゃう』。

「もしかして、オレのせいだ」

オレが彼の意識を支えていた邪氣を取つぱらつたから！

「そんなことないだろ？あの子は確実に歪んでたんだ。あのままだつたらたくさんのお犠牲者を出していたんだからな」

「じゃあなんでっ！？」

慰めてくれようとしている隆盛に激昂をぶつけてしまつ。

「なんであの子はああなったんだよーまだ、小学生の子供が心閉じちまつまでにっ！？」

「さあな、それの答えを導きだすには情報が少なすぎる。ただ云えるのはあの子がもともと邪氣にあてられやすかつたことが要因の一つではないかということと」

隆盛は目を瞑つた。心に蓋をして堪え忍びつとしているかのようだ。

「あの子の両親が病院で事情を聽いたとき、父親は『お前がちゃんと見てないからだ』と母親を罵り、その母親は『そんなはずない。ヒロドがそんなことするはずない。そんな子じゃない』と懇願するよつに周りに否定し捲つていた。ベッドの上で意識を朦朧とさせている息子を抱き締めることさえせずにな」

「ああ

「

オレは頭を抱える。

あのとき流れてきた、あの子の感情。

寂しさで一杯だった。

とても頭のいい子で、周りの人間の情況をちゃんと理解していた。それでも自分の感情を表に出す力が未熟すぎて、どうしたらいいか分からず藻搔いていた。

誰も気付いてやれなかつた。

「うつぐつ

「

また涙が流れる。

救えない 救えない 力が……オレに力がないから。

「大智、あまり抱え込むなよ。お前はよくやった。なつ？」

「そうです。それに、あの子はこれからよくなつていくんです。その切つ掛けを与えた大智先輩は素晴らしいことをしたんですよ」

二人が寄り添つてくれる。

「…………」

足りないんだ。力が 時間が ！

「それでも 」

オレは握つた拳に指がめり込んでいくほどに力を込めて床を殴り付ける。

「大智？」

「それでもオレは 」

ありがとう。

今日は 今だけは思いつきり泣いておこう。
明日からはまた、誰かのために 、

「オレは呪われる 」

“人のカタチ”

ブランコにさした

あの日の夕日とか

帰り道に聞いた

あの人の声

町に溢れてる

色も旋律も
喜びと悲しみを
僕にくれたの
その戸を叩き
返らぬ、ただいま
縋り付く人形さえも壊していったの

そばに寄り添つた
脱け殻をとおし
遠くに置き去りにした
心が疼く
どうして僕なの?
キミに問い合わせる
背中にふれた唇
あなただから、と
その夜、夢見る
笑つてる僕の
明日、取れた人形の首を治そう

リバース製作委員会／みゆ貴茂

シケンス

『申し訳ありません、乾闥婆さま』

受話器¹に聞こえる常磐刑事の声に勇太は軽い失笑で応える。

「は？」

勇太の田は病室に設置されていたテレビに走った。

『先日、警視庁のコンピュータ百三十一台がシステムダウンした事件で、今日警視庁はサイバーテロの可能性も視野に入れ捜査本部を設置すること』

「いや、こりちこり悪かったよ。大変そうみたいだけど」「はい、防ぐ間もなくクラッキングされてしまいました』

「しようがない、しばらくは様子をみよう。それじゃあ」

勇太は受話器を置くとクスクスと笑い始める。

「どうでもいいってね、そんなこと。僕は呪わればつとヒロくんの対決見れて大満足だし（病院抜けだして見ていた）、ああ早く腕治んないかな。みんなに報告したいよう』

ベッドで嬉々と足をばたつかせる勇太。

「まつこれでヒロくんもまともになるんだろうし、よつかったよねえ～そんなこと思つたらいつか夢の中へ～』

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5205d/>

呪わればっち

2010年10月13日14時43分発行